ISSN 2185-856X

JICA横浜　海外移住資料館

研究紀要

6

平成23年度

論　　文

ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動
— 移民の同化とアイデンティティ形成に関する一考察 —　島田　法子

経済不況下におけるブラジル人の生活状況と今後の展望
— A社調査、長浜市調査の比較から —　松宮　朝

日系南米人支援活動の「射程」
— リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人の状況 —　山口　博史

資料紹介

下山逸蒼資料について
粂井　輝子

海外移住資料館の収蔵する戦後海外移住実務機関作成業務資料等の紹介
岡野　伸治
渡邉由紀子

史料翻刻

菅野武雄「最後の手記」(一)
— 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —　柳田　利夫

はじめに

平成23年3月11日に起きた東日本大震災から一年が経とうとしています。その衝撃と悲しみは、日本に住むあらゆる人々にとって、また海外から日本を見つめる人々にとって、忘れ去ることのできないものとなりました。

この震災による大きな被害に対して、世界中から届いた温かな心遣いは、被災者の方々のみならず、日本に暮らす者すべてに大きな勇気を与えました。ユーチューブに映し出されるはるかに離れた国の子供たちが、日本のために祈り、歌ってくれる姿は、人々は助け合ってこの地球上に生きているのだという真実を教えてくれました。

海外の日系社会からも、震災直後からたくさんの人々がさまざまな形で支援の手を差し伸べてくださいました。それはちょうど、第二次世界大戦後、疲弊しきった日本に贈られたララ物資を思わせました。その記念碑は、海外移住資料館から数分の所、ララ物資が荷揚げされた横浜新港埠頭にあります。

あたたかきとつ国人の　心つくし　ゆめなわすれそ時は　へぬとも

碑に刻まれた香淳皇后御歌の心を、あらためて多くの日本人がわがものとしているように思います。

世界の人々とのつながりに気づき、日系社会とのつながりを思うとき、私たちは空間的にも時間的にも人の連鎖の中に生きていることを実感します。それぞれの社会の現状を理解し歴史を共有することが人のつながりを強いものにするのならば、今年で10年を迎える当資料館は、日本の若い人々に、困難な時代を切り拓かれた移住者、日系人の姿に思いを馳せる場を提供し、日本人と日系人とのつながりを育む役割が果たせたのではないかと、ささやかながら自負の念を抱いています。同時に、世界が大きく変動する中で、途絶えることなく歴史を伝えていく意義を思うとき、一人でも多くのご理解とご支援を得た資料館の次の10年の発展を祈るばかりです。

皆様のお力により、本『研究紀要』は無事、第６号の発刊を迎えることができました。変化の激しい時代の要請にも応え、地域における多文化共生社会の推進にも裨益するような館の運営と研究をさらに積み重ねていきたく、今回ご執筆いただいた皆様をはじめ、幅広く色々な方々のお知恵をいただいて参りたいと思います。

この『研究紀要』が、読者の皆様の海外移住・日系人社会のより深い理解に繋がることを願ってやみません。

吉　浦　伸　二
独立行政法人国際協力機構　横浜国際センター 所長
海外移住資料館 館長

『研究紀要』第6号の発刊によせて

『研究紀要』第6号が完成いたしましたので、お手元にお届けいたします。学術委員会が平成18年度に立ち上げ20年度まで続いたプロジェクトと、21年度に新たに始まり、活発な活動の後、今年度、終了する予定のプロジェクトの成果の一部が、ここに掲載されております。いずれも、海外移住資料館の目的である「海外移住と日系人社会に関する知識の普及」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」を達成するための努力が実ったものと、誇らしく思っております。

現在進行中（平成21年度－23年度）の学術委員会研究プロジェクトは以下のとおりです。
①「海外移住資料館所蔵文献資料の拡充と学術的活用の探求」
②「ブラジル日系人日本語学習者のための教材の開発と実践」
③「経済不況下における在日日系ブラジル人の実態および社会統合への課題」

とくに、上記の③は、学術委員会として外部の研究者に委託したプロジェクトで、これは本資料館の学術研究の幅を広げる新たな展開です。このような活動を通して、移住資料館としては必須である外部との研究上の交流がさらに盛んになり、有意義な最終成果が期待されます。『研究紀要』本号に成果の一部である論文が掲載されておりますが、加えて、関連の公開講座も企画されており、多数の参加があることと思います。

また、『研究紀要』本号には掲載されていませんが、学術研究プロジェクトの第1期が終了した平成21年以降、これらプロジェクトの成果が『研究紀要』以外にも公表されています。たとえば、この2年間でプロジェクト関連の企画展示･特別展示は、それぞれ1件、公開講座は7件、行われました。『研究紀要』とともに、海外移住資料館の目的がいくらかでも達成されたと認識されれば、大変喜ばしいことだと思っております。そして、このような成果が今後も出ることを願っている次第です。

この『研究紀要』が、読者および関係者のみなさまのご支援を得て成長し、海外移住資料館の活動の一端が、より多くの方に理解・認識していただけますよう、願っております。

飯　野　正　子
津田塾大学学長・海外移住資料館学術委員会委員長

研究紀要

〈目　次〉

はじめに　吉浦　伸二

『研究紀要』第６号の発刊によせて　飯野　正子

論　文

ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動
— 移民の同化とアイデンティティ形成に関する一考察 —
……1
島田　法子

経済不況下におけるブラジル人の生活状況と今後の展望
— A社調査、長浜市調査の比較から —
……21
松宮　朝

日系南米人支援活動の「射程」
— リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人の状況 —
……35
山口　博史

資料紹介

下山逸蒼資料について
……49
粂井　輝子

海外移住資料館の収蔵する戦後海外移住実務機関作成業務資料等の紹介
……67
岡野　伸治
渡邉由紀子

史料翻刻

菅野武雄「最後の手記」(一)
— 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —
……82
柳田　利夫

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface Shinji Yoshiura

On Publishing the Journal of the JOMM Masako Iino

Articles

Japanese Immigrants in Hilo, Hawaii: Their Literary Activities at Gin-u Shisha Tanka Poetry Club 1
Noriko Shimada

Comparative Studies of Brazilian Workers: Their Living Conditions and Future Perspectives 21
Ashita Matsumiya

The "Range" of Support for Japanese South Americans: The Situation of Brazilians under Economic Recession 35
Hiroshi Yamaguchi

Review on Scholarly Materials

A Report on the Documents of Isso Shimoyama, an Issei Haiku Poet 49
Teruko Kumei

Introducing the Operational Documents and Other Materials Prepared by Working Agencies in Charge of Postwar Japanese Overseas Migration and Stored in the Japanese Overseas Migration Museum 67
Shinji Okano
Yukiko Watanabe

Research Document Reprints

"Last Notes" by Takeo Sugano (1) : The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan 82
Toshio Yanagida

ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動
― 移民の同化とアイデンティティ形成に関する一考察 ―

島田法子（日本女子大学・教授）

＜目　次＞

はじめに ―ハワイ島ヒロと日本人移民
1.　ヒロ銀雨詩社の創立（1923）
2.　『銀雨』の出版（1925）
3.　銀雨詩社の活動と邦字新聞
3.1　月例会
3.2　新聞紙上での発表と批評
4.　日本の歌壇―大橋松平との繋がり
5.　戦後の銀雨詩社
結びにかえて ―日本人移民の同化

キーワード：ハワイ日本人移民、移民の同化、ハワイ島ヒロ、短詩形文学、銀雨詩社

はじめに ―ハワイ島ヒロと日本人移民

この小論は、ハワイ島ヒロを舞台に展開された日本人移民の文芸活動、特に銀雨詩社という短歌結社を取り上げる。銀雨詩社の戦前の発展を中心にたどり、日本人移民の文化変容と同化の一側面を読み解く。銀雨詩社に関する先行研究はない。また、ハワイ日本人移民の短詩型文学を史料として移民の社会史を扱った研究としては、著者と高木眞理子の共同研究を参照していただきたい[1]。

彼らの活動の理解のために、本題に入る前にその背景であったヒロの町と日本人移民について、概略を紹介したい。ハワイ島ヒロの町は弦月形をしたヒロ湾にそって広がり、「弦月の町」とわれる。また緑したたる樹木が生い茂るので「緑の町」ともいわれ、雨が多いために「雨の町」「雨の都」ともいわれる。雨量はホノルルの３倍以上あり、「多くの場合時雨のようにそそぎ、しっとりとした春の雨のような、または恋にすすり泣く女の涙を思わせるような雨である」[2]。ヒロ湾の一角に椰子島（ココナッツ・アイランド）がある。陸から 50 メートルほどの距離だ。今は陸続きだが、戦前はハワイ人のボートが「往復 10 セントで渡して」いたという。数エーカーの小島であるが、周囲は岩礁に囲まれ、美しい白砂に椰子が繁っている。戦前の日本人移民の休息の場で、月の椰子島、船出、船帆など、短歌、俳句によく詠われた。椰子島の乗船所の近くには日本人が集う料亭水月があった[3]。ヒロからは、火山マウナケアのなだらかな稜線が見え、4,025 メートルのケア山は冬には雪を頂く姿となる。サトウキビ耕地が栄えた戦前はヒロを起点とした鉄道が海岸線にそって走っていた。

日本人移民がサトウキビ耕地労働者としてハワイ諸島に移住し始めたのは、官約移民（日本政府とハワイ政府間の協定に基づく移民）が始まった 1885 年である。日本人移民数は 1900 年には既に 61,000 人を超え、ハワイの人口の 40 パーセントを占めた[4]。そのうち、面積が最大のハワイ島の日本人は 23,300 人であった。ヒロの町は 20 世紀に入って急成長し、ホノルルに次ぐハワイ第２の都市となった。1925 年に林三郎が出版したハワイ島の紹介書『布哇島一周』によると、ヒロは「日本

人移民が渡来する前までは、至って微々たる一寒村にすぎなかった。・・・其後布哇の産業である糖業が、日本人移民によりて開発せらるるに及び地勢の関係と、地質及び気候［により］・・・ヒロ方面が繁栄を恣にするにいたったものであると云う。ヒロ現在の姿は、砂糖産業に日本移民の貢献せる如く、大部分は同じく日本人の力に帰せねばならぬのである」[5]。ヒロの日本人人口は、1910 年には 6,745 人に達した（下記表を参照）。

ハワイの砂糖産業は 1900 年頃を境に急速に拡大した。1900 年のハワイ諸島全体の人口は 154,001 人であるが、その四分の三はサトウキビ耕地の小さな村落に住んでいた。そしてその耕地労働のほとんどが日本人であった。ハワイ島では、例えば 1900 年にヒロとその南にあるオーラアの 3 か所の耕地に働く労働者の総数は 1,355 人で、そのうち 1,323 人（97.6％）が日本人であった[6]。ハワイ島のサトウキビ耕地の人口が最大になったのは 1933 年で、107,297 人を記録した。その年のサトウキビ作付面積も最大で、144,959 エーカーに達した[7]。その後 1959 年までに、機械化によって、砂糖産出高は増加したのに耕地労働者数は 1 万 5 千人に減少した。ヒロの人口は、1930 年には 19,468 人、1958 年には 25,300 人と増えたが、1959 年には 24,900 人と減少に転じた[8]。

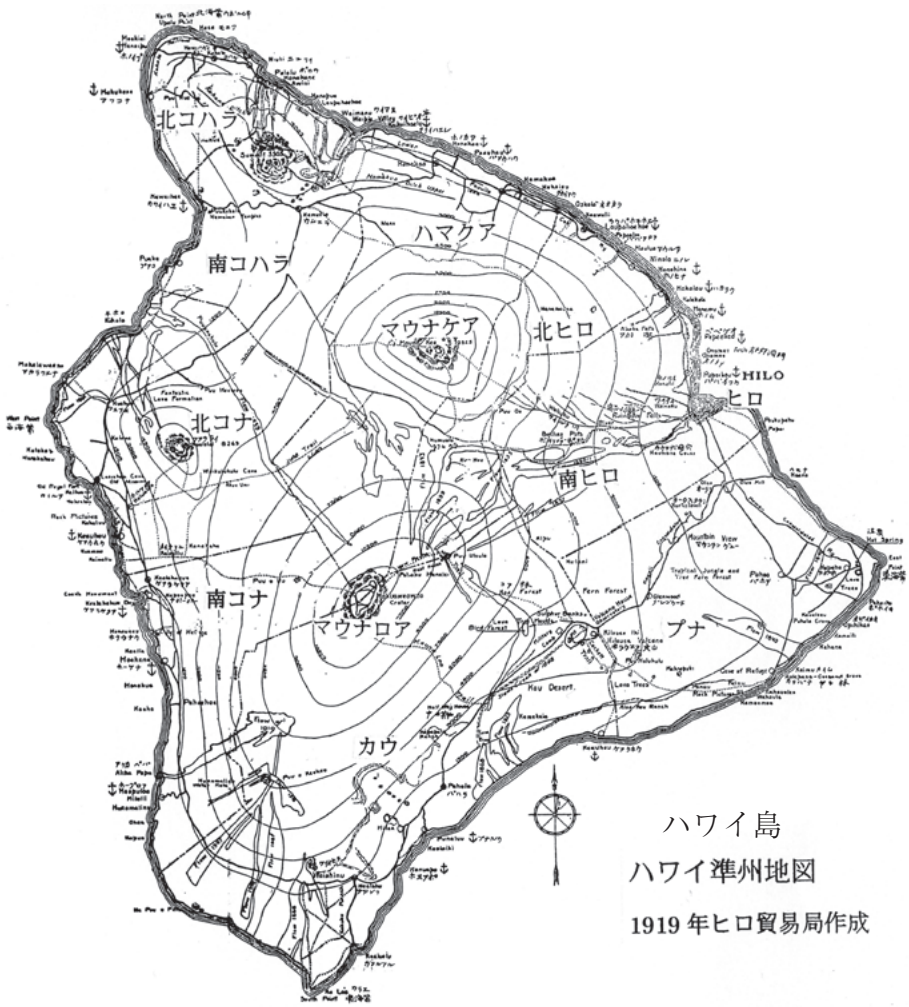
ハワイ島のサトウキビ耕地は、雨の多い島の東側に、特にハマクワ地区に集中した。サトウキビ栽培には多量の雨が必要だったからである。ハワイ島はマウナロア、マウナケアという 4,000 メートルを超す二つの火山によって東西に分けられ、雨は東のヒロ側に降り、山を越えたコナ側は乾燥地帯である。ヒロを含む南ヒロ地区から北へ、北ヒロ地区、ハマクア地区が続き、海岸線にそってサトウキビ耕地で働く日本人移民の村落ができた―パパイコウ、オノメア、ポポケオ、ホノム、ハカラウ、ホノヒナ（南ヒロ地区）、ニノレ、マウルア、パパアロア、ラパホエオエ、オーカラ（北ヒロ地区）、パアウハウ、ホノカア、カウイハレロ、ワイピオ、ワイマヌ（ハマクア地区）である。ヒロの南のプナ地区（オーラア、パホア）とカウ地区（パハラ、ナアレフ）にもサトウキビ耕地があったが、その規模はさほど大きくなかった（地図参照）。

ヒロの発展は、サトウキビや粗糖を運搬する鉄道の敷設と、砂糖を船積みしてアメリカ大陸に輸送するためのヒロ湾の整備とに並行していた。1899 年、オーラア製糖会社が設立されると共にヒロ鉄道会社が創立。ヒロとオーラア間の鉄道が敷設された。その後もヒロを起点とした鉄道敷設が続き、1905 年にはヒロ－ハマクア間が敷設され、1920 年には鉄道網が完成をみた。桟橋も順次整備され 1922 年には完成した。日本人移民にとって記録すべきは、1913 年に東洋汽船会社の南米航路路線がヒロ港に寄港開始したことで、隔月ではあったが日本から食糧雑貨が直輸入できるようになった[9]。

下記の表は国勢調査による 1890 年から 1940 年のハワイ準州、ホノルル、ヒロ、ハワイ郡（島）の人口変動を示している。ハワイ島の人口は 1920 年代に最大の人口増加率がみられるが、1930 年代には減少に転じている。ヒロでは 1910 年代に大きく増加し、さらに 1920 年代には 89 パーセントとう急激な増加率を示している。さらに 1930 年代にも増加を続けている。人口の都市への流入が大きくなったためである。耕地からヒロへ流入しただけでなく、ホノルルへの流出も原因である。ホノルルは常に人口が増え続けており、第 2 の都市ヒロの約 8 倍の規模を保ち続けている。

ハワイ島の人口（The U.S. Census 1940[10]）

	Hawaii	Honolulu	Hilo	Island of Hawaii
1890	89,990（＋ 11.7%）	22,907（----------）		
1900	154,001（＋ 41.3%）	39,396（＋ 71.6%）		
1910	191,009（＋ 24.6%）	52,183（＋ 32.8%）	6,745（----------）	
1920	255,012（＋ 33.4%）	83,327（＋ 59.7%）	10,481（＋ 54.6%）	64,896（----------）
1930	368,336（＋ 43.0%）	137,582（＋ 65.1%）	19,468（＋ 86.0%）	73,325（＋ 13.0%）
1940	423,830（＋ 14.9%）	179,326（＋ 30.3%）	23,353（＋ 20.0%）	73,276（－ 0.1%）



その後も人口の減少はサトウキビ耕地で非常に顕著で、ハマクア沿岸では、人口千人以上の部落が、1910 年には 16 か所、1930 年には 25 か所に増えたが、1958 年には 14、そして 1959 年には 12 か所と減少傾向をたどった。戦後は観光業、国防関連工事、船舶、航空、製造業、あらゆるサービス業がオアフ島に集中し、雇用が集中するホノルルにさらなる人口の集中化がおきた[11]。

戦前のヒロにも、規模はホノルルに及ばなかったが、発達した日本人社会があった。「1910 年代から 1930 年代にかけてのヒロは活気に満ちた新興市街であって何事もホノルルを対照として、何ホノルルに負けるものかと、ヒロ人士は競争意識に燃え立っていた。・・・ホノルルのワシントン祭に劣らぬ独立祭の祝賀行事がヒロで行われていた。ホノルルの８分の１の人口しかないヒロが堂々とホノルルに対抗していた時代があったのだ」[12]。ヒロの人口の半数以上が日本人で、日本人街は、ヒロ湾にそって東西に走るカメハメハ通りに沿っていた。椰子島町はほぼ日本人のみであったし、新町地区にも多かった。日本人を相手にした宿屋、商店、会社が軒を連ねた[13]。1925 年当時のヒロには、中等学校としてヒロ中学・ヒロ女学校と、ヒロ独立学校があり、初等学校ではヒロ学園、椰子島日本語学校、実践学校があった（ハワイ島全体では 52 の小学校レベルの日本語学校があった）。また、宗教に関しては、救世軍日本人小隊、日本人基督教会、浄土真宗ヒロ本願寺、浄土宗明照寺、曹洞宗大正寺、真言宗法眼寺、ヒロ大神宮、石鎚神社、稲荷神社（ハワイ島全体では、本派本願寺 12、

浄土宗 9、曹洞宗 2、日蓮宗 1、真言宗 2、組合教会 7、聖公会 2、救世軍 1）があった。そしてその当時のヒロには、夕刊の『布哇毎日』、隔日朝刊の『布哇朝日』、週刊の『火山』という 3 つの邦字新聞があった[14]。ヒロは「新聞狂者の町」と呼ばれ、人口に不相応な多くの邦字新聞が刊行されたが、その多くは短期に消滅していき、1920 年代には 3 紙が安定して残った。ヒロの邦字新聞に詳しい大久保清によると、3 紙も創刊、廃刊、合併の歴史をたどって、ようやく安定にいたったようだ。『布哇毎日』は 1909 年創刊の『布哇植民新聞』の流れを汲み、穏健路線で成功していた。『布哇朝日』は 1896 年創刊の『ヒロ新聞』の流れを汲み、1917 年創刊された。『火山』は 1910 年代創刊で山村幸八個人の新聞であった[15]。このような邦字新聞を舞台として、ヒロの短歌吟社「ヒロ銀雨詩社」が活動するのである。

1. ヒロ銀雨詩社の創立（1923）

ヒロの日系人社会において短歌が詠まれるようになったのは 1910 年頃であった。すでに 1903 年に結成されていた俳句吟社「蕉雨会」[16] の会員のあいだで始まったようだ。急速に短歌熱が広まって、1913 年には『布哇毎日』に殉情詩社という歌壇が、『布哇朝日』には海虹詩社という歌壇が設けられ、詠草が定期的に掲載されるようになった。さらに 1914 年には『火山』が短歌と俳句の懸賞コンテストを始めたという。ヒロの最初の短歌結社は「若葉会」で、ヒロ大神宮宮司で蕉雨会会員の合志蘇川等によって結成された。さらに、蕉雨会会員で『布哇朝日』の主筆であった増田王穂が、同じく蕉雨会会員の村上紅嵐の協力を得て、俳句・短歌・随筆を総合化した文芸結社「海洋文勢社」を創設し、ヒロの最初の文芸誌『洋』をガリ版刷りで発刊した。そして最終的に 1923 年 11 月、若葉会の元老である増田王穂、武内鷗波、合志蘇川等が若手の歌人を糾合して「銀雨詩社」が結成されるに至った。その背景には、「同好の者が集まって、短歌に親み、研究的態度で、作歌するやうな団体を組織して見度いものだ」という考えが久しくあり、機運が熟して新しい結社の誕生をみたという。設立時の同人は 25 名で、ほとんどが初歩の域を出ない人たちであった。そのうち 5 名は女性であった[17]。

結社の名前の由来を、中野次郎は次のように説明している。歌人たちは「雨の都」ヒロの雨が陽光に美しく輝くのを「銀雨」と呼び、新しい結社の名前を銀雨詩社と名付けたと[18]。もちろん歌人たちはこの雨を詠う[19]。

うす日さす朝の庭面に降る雨の細く光れる南国の秋（本郷くれない）
マンゴ樹の杜より虹の橋かゝる傾斜の甘蔗に銀雨降るなり（村上紅嵐）

創設メンバー名の一人で、ヒロ独立日本語学校で教師をしていた尾崎無音は、設立経緯を尋ねられて次のように答えた。

> 因にヒロ銀雨詩社が何時創立されたものか尾崎無音氏に聴くと同氏は大要左の如く語る処があった。
>
> ヒロ銀雨詩社が創立されたのは大正十二［1923］年十一月で増田王穂氏等の主唱により、前に合志実行氏其他の方々によって若葉会といふ和歌の会があり、それから後に毎日紙に殉情詩社の名で短歌が発表され、朝日新聞には海紅詩社といふのがあった。次に同志で作った海洋文芸社でミメーヨグラフ刷りの雑誌を発行してゐたが当時は歌人約二十名位をり、それから銀雨

詩社が生れるに至ったのである。云々[20]。

また、同じく創設同人の安達凉雨も、「布哇毎日には殉情詩社があり朝日には海紅詩社があった。そして亦ミメオグラフ刷の『洋』もあった。恁 [か] うした盛んな時に二十余人の同人に依って生れたのが銀雨詩社であった」と回想し、創設当時の銀雨詩社の熱心な活動をなつかしみ、次のように述べている。

私は八九年前のヒロ歌壇がなつかしく思はれてならない。実際アノ頃の歌壇は盛んだった。何によりも歌の空気が濃厚に漂ってゐた。私には来布して早々であったが、アノ当時の記憶がハッキリ残ってゐる。・・・

其の同人達は三四氏を除いては大方初歩の人々ではあったが、それだけに真面目な態度を以て精進してゐた。そうして一ヶ年を巡って貧弱ながらも記念として歌集『銀雨』まで出したものだ。・・・

個人的にも同人としても慈父の様に尊敬されてゐたのは蘇川さんである。

殊に私はその感じに過ぎず実際に慈父にもまして愛して貰った。・・・

蘇川さんは若葉会の元老で実際の所謂歌道を尊重した和歌を物されてゐた。

破調も破調、歌にしては余りに幼稚なものを見せても決して嘲笑をあびせず黙って選された人である。

王穂さんを生みの親とすれば蘇川さんは確かに育ての親であった[21]。

銀雨詩社の同人たちは､時代によって出入りがあり変化した。発足１年後に出版された合同歌集『銀雨』には創設時の同人名が記されている。そのなかで、俳句の蕉雨会会員だった人々は、増田王穂、合志蘇川、斎藤芙蓉、中林紅流、村上紅嵐、大門赤帯、田中滴水、浦部緑村、川添樫風、尾崎無音の 10 名。女性参加者には本郷くれない、谷本まどり、上江洲芳園、大村耕園、田中葉園の５名。そのほかに武内鷗波、安達凉雨、横山櫻泉、落合静雨、神川謙三、上本千鳥、宮崎千草、寄森極観、根本如獄、井浦曠野の名が挙がっている。また２年目に丸谷秀岳が参加した[22]。

その後、同人数は増減を繰り返したようであるが、戦前の約 20 年間に銀雨詩社に名を連ねた同人数は 50 名を超えたと推測される。例えば、尾崎無音は 1935 年当時の会員名を次のように記録している。「ヒロ銀雨詩社の創立されて以来すでに十幾年になるのであるが、其の間同人の変化もありつつ本日に及んで居る。目下の所会員は、三上朽葉、神川謙三、岩谷残花、中林紅流、横山櫻泉、藤間順笛、比嘉静観、丸谷秀岳、夕川寒月、當間嗣郎、比嘉里風、吉澄孤鳴、竹森岱峰、初美女史、田中洋月､尾崎無音の十六名なり。会合は毎月一回同人の家庭を順次に巡って催する事になって居る。同人の中の神川謙三氏はパパイコウ、竹森氏はコハラ、寒月、里風、孤鳴、初美の四氏はハカラウである[23]。」さらに藤間順笛がその回想のなかで挙げている戦前の銀雨詩社の同人のなかには、次のような名前も挙がっている―上川〇一、福永渓月、岸とめ子、そしてハカラウ支部として夕川寒月の他、吉済孤鳴、藤岡兵吉、〇〇政美、比嘉里風、黒原〇〇（伏せ字部分は判読不能）[24]。他にも名前が漏れていることは十分推測されうる。

銀雨詩社設立の１年前、1922 年にホノルルに誕生した「潮音詩社」のとの関係について短く触れておこう[25]。二つの詩社はハワイを二分する短歌創作の拠点であった。移民たちは職をもとめて、オアフ島とハワイ島の間を移動することがあり、歌人たちはその都度、二つの吟社を行き来した。ホノルルから有力な歌人たちがヒロに渡ってきて銀雨詩社に参加した例として、1925 年にヒロに渡っ

てきた藤間順笛が挙げられる。藤間は、「当時の歌人総領事館の細田紫葉、日本人病院の飯岡白蓉、相賀渓芳、山下草園、浅海青波、豊平走川、吉田のぶじ氏等の先輩諸氏と共に［ホノルル潮音詩社の］詠草会の出席を唯一の楽しみとしたものであったが、1925 年この布哇島に渡って爾来ヒロ銀雨詩社の同人の一人に加わ」った[26]。順笛はヒロ銀雨詩社の書記として活躍することになる。

福永渓月と三上朽葉の二人は 1920 年代末にホノルルからヒロにわたって来た。渓月は、ある新聞記事に朽葉がヒロに来た当時のことを回想して、次のように書いている。

> 顧みれば三上朽葉さんが飄然とヒロに渡ったのは昭和三［1928］年だった。其の頃布哇島ハカラウにゐた私は十月もすでに末に迫った一日、ヒロの町中で偶然にも朽葉さんに会った。朽葉さんがヒロに着いた二日目だったと思ふ。・・・
>
> 沖野ホテルに旅装を解いてゐた朽葉さんを私の所へ迎へて十一月三日の晩佐藤芳山の所で開催された銀雨詩社の歓迎詠草会へ同伴出席した。其の席で朽葉さんの万葉集の講釈があったのが私の切抜帳に見える。
>
> 忌憚なく言へば、朽葉さんの歌や歌論は其頃銀雨詩社では容れられなかった。私と共に異端者視されてゐた。でも五年を経た今日の銀雨詩社の詠草を見るとき、朽葉さんの短歌の上の主張が率直に容れられてゐるらしく思はれる。朽葉さんの五年の努力の賜物と私には思へる。・・・滑かな光沢と、堅さと、緻密さを内容に盛った歌がわが朽葉さんの狙ってゐるところであることは、朽葉さんが日本で出版してゐる歌集若鮎を見れば判る[27]。

朽葉は、移民地文学の中では、特に秀でた経歴の持ち主であった。ハカラウの歌人竹の里人が紹介する銀雨詩社の歌人のなかでも異彩をはなっている。日本で釈超空に師事した歌人で、ヒロの移民たちに短歌の指導者と認められていたようだ。

> 師匠が斯う云ふた、師匠が斯う書いてゐると［朽葉］君の口癖の師匠釈超空先生も博士になったから弟子の君も肩身が広い訳だ。国文学の造詣が深いからその方はお手の物だが歌丈けに就いて云ふとそれと正比例してゐるとは言ひ難い。・・・君の国文学の講義程歌は甘いとは云はれぬが、併しこれは敢へて君を冒瀆する意味にはならない。同人達の正しい歌道への道案内者として君の存在は今のところ唯一無二のものである[28]。

詩社同人の職業や階級についても述べておきたい。短歌という風雅な趣味をもつ者は、日本語学校教師や宗教家、新聞記者に多かった。職業が分かっている人は少ないが、増田禎二（王穂）、村上実（紅嵐）、川添善一（樫風）は新聞記者、合志実行（蘇川）は神道宮司、斎藤春登（芙蓉）、田中隆祐（滴水）、尾崎音吉（無音）は日本語学校教師、大門赤帯は薬剤師であった。ビジネス界からの参加者も無かったわけでは無く、1931 年にヒロ日本人社会の重鎮である田中千代松（洋月）が詩社に加わった。1932 年の岩谷篤衛（残花）の随筆によると、

> 昨年度銀雨詩社第一の収穫は田中洋月氏を同人のうちに迎へ得た事である。洋月氏とは、アメリカン、ツレーデング商会社長、ヒロ日本人商業会議所会頭にして錚々たる実業家田中千代松氏の事である。由来文芸とは金に縁遠い者達の弄ぶものとの誤った観念から見事脱し得た同氏の心境に私は常に敬服してゐるものである。尤も功成り名遂げて後の悠々自適の生活に寒灰故木の三昧境に入る人は別として氏の如き劇職にある人のあの真剣な精進振りには若い私達の

尚其の努力の足らざるを痛感させられるばかりである[29]。

原則的にはヒロという都会の比較的経済的に恵まれた階層の移民たちの同好会であったといえようが、岩谷残花は生活苦のなか漁船船員、魚の行商、晩年は輸入商の販売員をして家族を養った苦労人であった[30]。ハカラウやパパイコウのようなサトウキビ耕地の村落から参加した異色の同人たちもいた。1931 年に参加した夕川（鉄男）寒月は、田中洋月とは対照的に、労働者で貧困階級に属した[31]。寒月は自らを石川啄木に重ねて、次のように書いている。

啄木は悲惨な自らの生活を歌に残してくれた。それは余りに感傷的かも知れないが自ら苦難の体験を通して生れ出た歌だ。私達貧民階級者の心の琴線に触れるのも尤もな事だと思ふ。

働けど働けど猶我が暮し楽にならざりじっと手を見る

どうかこうか今月の無事に暮らしたりと外に欲もなき晦日の晩かな

百姓の多くは酒を止めしといふもっと困らば何をやめるらむ

生きることは苦しいことだ。働かれる丈働いた私の手、それでも飢えはつき纏ふ。荒んだ手をじっと見つめた目から、熱い滴が頬を伝ふ。慰み半分の殿上人の歌が私共に何の感激を與へよう。失業に貧困に汗と血の体験を通して綴られた民衆本位の「貧民芸術」にこそ私共に共鳴点がありはしないだろうか[32]。

寒月が、経済恐慌さなかの 1931 年 11 月の例会で生活苦を詠んだ歌、「一皿の漬物なれどおとなしく子等は食べ居り貧になれしか」は、ヒロの恵まれた階級の同人たちにショックを与えた。ヒロでは現実とうけとめにくい生活難を歌っていたからである。丸谷秀岳は「一皿の漬物」と題したエッセイの中で、寒月の歌を取り上げ、ハワイ移民のなかの階級差に着目し、ヒロの富裕層の消費生活の浅薄さ、不健全さを告発している。

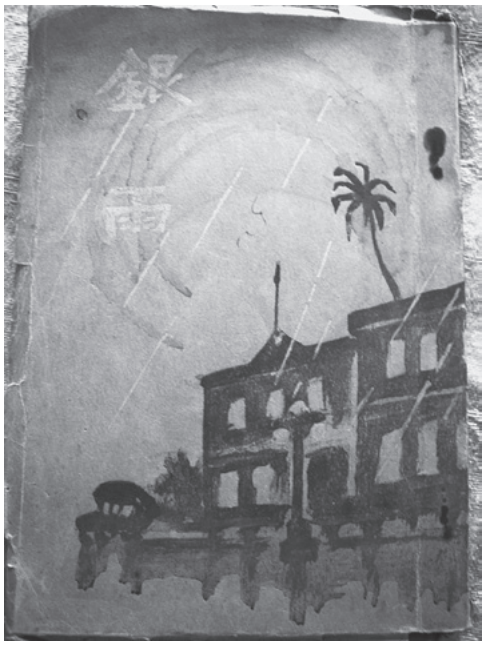
恵まれた洋上の楽園布哇の天地には、就職難の声は聞くけれども生活難の話は聞いたことがなかった。・・・果して此の歌は真の叫びであらうか。余り誇張ではなからうかと思った。時に一度位の食事を只漬物だけにてすますことは敢へて不思議はないが、此の歌の内容は一皿の漬物のみに依って食事をすることがほとんど常であるかの様に思はれ、此の布哇にかくも深刻な生活苦が来襲して居るのであらうかと少なからず迷ふた。若し之が事実であるとしたなら、作者は随分勇敢であると同時に、私はそのいつはらざる真剣な態度に満腔の敬意をはらはねばならんと思った。然るに幸か不幸か順笛、洋月両氏の説明に依って、ある耕地に事実あった事であることを知った。実際耕地にあって安い給料を得て、しかも沢山の子供を持って居ては、ほんとに気の毒である。殊に十一月の如きは五回の日曜日に休戦記念日、感謝祭、其の上多くの耕地は労力過剰の故を以て毎土曜日を強制的に休業せしめた為年末は想像以上の苦しみであったらしい。

それ等を思ふと、ヒロに生活して居る人々は恵まれて居る。然るに此の恵まれて居ることをいいことにして身分不相応に飾り身分不相応に見栄を張って居るから不景気は年々より深刻になるのであると思ふ。・・・[33]

寒月は労働者歌人としての作歌を続けた。竹の里人は、寒月について、「君はハカラウの田園歌人だ。毎月秀れた歌をみせてくれる。非常に真面目な生一本な人らしい。田園に隠れて一本一草の成長にも眼を止て静かに歌ひ暮すといふ態度だ。君の歌には衒気がない。何時もしみじみと胸に沁み入る

ものがある。これは君のつつましい生活態度の反映であらう。君の歌は作ったといふより自然に溢れ出たと云ふ方が当はまる位極めて自然である。努めて倦まずんば大成するであらう。」と評している[34]。このように、参加者が階級的にも多様であったことも、ハワイ日本人移民の短詩形文学の特色の一つである。たとえ耕地の労働者であっても新聞や雑誌を読み、文学的教養のある移民が珍しくなかったのである。

2. 『銀雨』の出版（1925）



『合同歌集　銀雨』表紙

『銀雨』に掲載された創設メンバー

銀雨詩社の創設1年を記念して23名の合同歌集『銀雨』がヒロの布哇毎日新聞社から出版された（写真参照）。48ページの小さな歌集であるが、1年間に詠んだ歌のなかから各々10首を選んで掲載している。後書きには、初歩の域を出ない歌であっても、「互いに真摯な態度を以て、只管に進んだ」記念として、1年の歌稿から選んで冊子を発行しようと意見が一致し、出版に至ったとある。同人たちの熱意や仲間としての団結をうかがい知ることができる。同時に、同人たちには本を出版できるだけの経済力があったことも示している。

最も目につくテーマは、花、黍畑、虹、火山、海といった楽園ハワイの美しいダイナミックな自然である。自然の美、その変化に、日本人の感性が生きている。

斜面なるみどりの畑に音もなくふはりと浮ぶ七色の橋　（本郷くれない）
すっきりと朝の大気に吐息してけ高く立てる夏浜の椰子　（神川謙三）
火山道冷気身に沁む頃にしてオヘロベリーは赤く実れり　（川添樫風）
黍切りし山畑にゆるうフルーム[35]のうねりが見えて夏の朝ばれ　（増田王穂）
ペレの神[36]怒りますらしキラウエアの山なりひゞき砂をふらしつ（合志蘇川）

移民としての生活苦、差別を受ける悔しさ、孤独やと寂寥感、志を果たせない慙愧の念も、大きなテーマとなっている。アメリカン・ドリームを果して成功を謳歌する歌はみあたらない。彼らは心の底に蓄積される苦しみや悲しみを歌に表現することによって、それを互いに分かち合い乗り越えて、移民地での生活を受け入れ順応していく。

友去りぬ続いて一人又去りぬ生きんが為めに去ると云ふなり　（川添樫風）
靴をもて砂をならして排日と云ふ字をかいて涙して見る　（横山櫻泉）
二十年国を離れて古妻の猫背影さす夜寒悲しも　（武内鷗波）
おとなへば孤独の友は病みほつれたゞうつむきてなにも語らず　（中林紅流）
雨止まず膝の児は眠ず此の夕又来ん明日の生活に泣く　（大門赤帯）
一廉の人に成らんと七年を古里出でて旅にさまよふ　（尾崎無音）
人の世は悲しきものよ南国にあへぎさすらふ移民なる子は　（安達凉雨）

苦しくても辛くても何とかハワイに根付き、家庭を築き、ささやかな妻子との暮らしや、近隣の生活模様が歌に描かれる。とくに子どもが生まれると、移民地に生活の根が張って生活者としての目線が生まれていく様子がうかがえる。

夢の国遊ぶが如し妻と子と月明の道を走る自動車　（神川謙三）
となり家にほせしふとんの花模様強き日ざしにまぶしくも見ゆ　（谷本もどり）
妻と我水浴びながら対しあへば二人の乳首撫づるさゞ波　（武内鷗波）
黄昏て今朝出し吾子の帰らざり出つ入りつ待つ親となりぬる　（村上紅嵐）
青空も吾子の瞳も今朝は澄みてすがすがしくも衣洗ふ我　（上江洲芳園）
六人の母となりしが君を待つ夕となれば心ときめく　（上江洲芳園）
花嫁の立てる姿のうつくしき世の波風もしらぬ風情よ　（大村耕園）
一張りの傘にもつれし若人の風呂の帰へりや小雨降る町　（大門赤帯）
病める児の褓衣取り代え妻はしも今日も降るやと空仰ぎ見る　（大門赤帯）
よちよちと覚束なくも歩を運ぶ愛らしき児に子犬戯る　（落合静雨）
日曜の夜の静けさ老いし母の古き子唄を聞きほれてあり　（尾崎無音）
叱りしが子はいつしかに庭すみの土掘りながらひとり唄へり　（斎藤芙蓉）
夜となれば子供となりて子供らと遊ぶ癖つき日に日に老けぬ　（斎藤芙蓉）
つくづくと物想ふ我となりにけり父となる日の近づきければ　（宮崎千草）

短歌を詠むとき、ハワイでの生活と共に、やはり祖国を想う気持ちが出てくる。祖国の穏やかな山河や、故郷に残した父母を思慕する歌も多い。日本に帰りたくても帰れない移民は、日本に続く海や、空、雲、そして日本とハワイを行き来する船や手紙に思いを寄せる。移民の目線はハワイと日本の双方を向き、二元的アイデンティティを保とうとする。

桟橋に近づく船を意味もなくなつかしく思ふ移民なる子は　（川添樫風）
故里は今なほ山の国なるか旅を行く子は斯く言ひて見る　（川添樫風）
しみじみと草に座りて故郷の昔の野辺を想ひてもしみ　（根本如獄）
健かと父の便りも涙ぐむ筆の跡にも老いませしかと　（浦部緑村）

母と居し京都の秋の恋しけれ西に東に紅葉見し日の　（大村耕園）
老いませし母笑まさんと心にもなきことを書く我れなりしかも　（落合静雨）
懐かしき妹のつたなき便りはもわびしく待ちぬ淋しきがゆえ　（落合静雨）
いたく老ゆ母はひたすら吾れ待つと妹の便りや秋の行く頃　（増田王穂）
旅立ちを気にして母の賜ひける守袋を見るもなつかし　（安達凉雨）
国恋し雨の彼方ぞ偲ばるゝ去り行く雲も心して行く　（安達凉雨）

もう一つの特色は、日本人移民とハワイ社会との関係の希薄さである。日本人社会の中で十分に生活が成り立ったため、ハワイ在住の多様な人々との交流が見られず、歌の中には日本人以外のハワイの住民や彼らの文化は単なる景色の一部としてしか詠われない。

朝風にうなじ吹かせて髪洗ふ布哇女に初夏来る　（神川謙三）
谷深く霧の小暗く立ち罩めし中に家あり土人住むらし　（井浦曠野）

『銀雨』のなかで、移民たちは移民としての生活や、経験、思索、情念を詠った。移民地の短詩形文学の歴史は、日本人移民の経験の歴史を結晶化したものである。島田・高木が論じているように[37]、短歌を文学的価値からではなく重要な日本人移民の社会史史料として見ることができよう。

戦前の合同歌集の出版はこれ1冊である。これ以降は、歌稿の発表は新聞紙上となる。

3.　銀雨詩社の活動と邦字新聞

3.1　月例会

銀雨詩社では、毎月第3日曜日の午後4時から例会が開催された。会員の中の一人が順番でホスト役をつとめ、自宅に夕食を用意し、会員は料理と酒の食事会を楽しみ、7時頃から短歌の合評会となった。会員は、定例会のすこし前に2首の歌を作って書記に届けることになっており、書記は作者名を伏せてすべての歌をガリ版印刷し、各会員に郵送して届けた。会員は前もって印刷された歌全部に目を通して、優秀と判断した歌5首に印をつけて例会に持参する。そして夕食後、合評会の席上で投票結果を発表し、その月の優秀作を決めたのである。その後全員で、皆の作品を一首ずつとりあげて、まじめに批評し合う。合評会は時には何時間も続くことがあった。例えば、1929年の1月27日の例会記録によると、例会はヒロ本願寺の松田開教師宅で開催され、夕食後の7時から合評会が始まり、6時間も続いて、終わったのは夜中の1時であった。批評をめぐって、斎藤芙蓉と福永渓月の意見が対立したためであった[38]。

1935年の尾崎無音の証言によると、例会のあり方にも時代とともに多少の変化があったようだ。「毎月三首宛雑詠を持ち寄り速ぐ［その場で］藤間順笛君のゼラチン版で一枚の紙に謄写して配布し互選を行ひ、批評をし合ふのである。主に［三上］朽葉氏の総評を以って終る事にして居る。同人は事故のない限り勤めて出席する様にして居るが、出席しなくとも詠草丈は私の所へ送ってもらふ様にしてゐる」[39]。

例会は会員宅だけでなくレストランで開催されることもあったし、海岸や山のホテルに泊まりがけで出かけて歌会をすることもあった。毎年、新年会や忘年会をかねた例会が開催されたし、またピクニックに出かけて歌会をすることもあった[40]。

例えば、1934、5年頃の新年会と忘年会を紹介する新聞記事から、銀雨詩社の活動を窺うことができる。まず、新年会の予定をアナウンスする「ヒロ銀雨詩社同人、来る十九日午後、出本亭で新年宴会催す」という記事がある。それによると、「ヒロ銀雨詩社一月例会を来る十九日サタデー午後から四哩の出本亭に於て新年宴会を兼て開催する事に決定した。同人は歌三首、外に席上課題『月光の海』一首持寄りの事。日本より歌の批評も来て居る［日本との繋がりについては下記4を参照］ので席上配布するとの事である・・・」。この記事には例会に集った同人の記念写真がついている。写真に映っている参加者16名は丸谷秀岳、中林紅琉、横山櫻泉、谷本まどり、村上紅嵐、井浦曠野、落合静雨、斎藤芙蓉、宮崎千草、尾崎無音、増田王穂、根本如嶽、川添樫風、武内鷗波、大門赤帯、浦部緑村であった[41]。

また、忘年会の報告記事もある。詩社同人の丸谷秀岳による参加記である。まるで日本にいるかような風景―そろいの浴衣、鯉の池、囲碁と将棋、料亭と仲居さん―が展開している。移民社会が強い日本志向をもち、ミニチュアの日本を形成していたことが明白である。祖国を思慕する移民たちにとっては、仲間との日本式の忘年会がどれほど心の慰めになっていたかうかがい知ることができる。

> 銀雨詩社幹事の努力で同人の忘年会を旧臘二十三日コスモス亭で開催することになった。いつも時間より少し遅れるのだからまだ大丈夫だらうと思って行って見ると、いやはや皆揃って浴衣がけでぱちりぱちり写真を撮って居る。それから涼しい木陰に鯉の遊ぶをながめつつ盛んに頭をひねって居る連中もある。今頃流行の囲碁や将棋に手をつけて居る者もある。其の間藤間ミメオグラフ主任は一生懸命にペンを走らせておいすんだすんだと大声にどなる。遊ぶときは夢中で遊ぶ連中も、選歌をやる時は真剣だ。呼吸を殺して選をするあたり、真面目其のものの標本である。選をして見ると例に依って例の如く、岩谷残花が最高点で無音、静観など相当の点を得てとても鼻いきが荒い。かたいことを清算して、愈々忘年会となると之はまた別人の如く同人悉徹底することを期してやるやる。美人連はサービス満点を持してとても愛嬌よく酒間を取り持つので同人大満悦である。・・・かくて遺憾なき忘年会の夜はだんだん更けて行く[42]。

3.2　新聞紙上での発表と批評

詩社の月例会で詠まれた歌は毎月邦字新聞紙上で発表された。そして新聞社は外部にその批評を依頼した。厳しい批評に晒されることもあり、詩社同人にとっては、趣味としての短歌ではあっても、真面目に向上を目指す刺激となった。例えば、1925年9月29日の『布哇毎日』紙上で田山啓は、銀雨詩社の歌人たちの歌には個性がなく命の躍動がないと、以下のように批評した。

> 久しぶりに銀雨詩社の例会があると云ふので私は大きな期待を以てこれを迎へた。そうして毎日紙上に其詠草が発表されたのを見て私は意外であった。案外であった。私の期待は見事に裏切られたのだった。・・・
>
> 全く千遍一律である。全部五十四首を通覧して私の感じた事は全体的にみて其過半数には生命の躍動がない。飛躍がない。借物の思想、他人の感覚で小手先の技巧を弄して机の上で捏ね上げたとほか［ママ］、或る少数の人達のを除いては見分られないではないか。
>
> 総べての芸術を通じてそうではあるが、殊に短歌にあっては何よりも力強い生命が籠って居なければうそだ。真と実と個性の表現がなければならぬ。・・・然るに今回の銀雨社詠草の多くは何等の個性の特異点も見出されず、感激もなく、最後の技巧さへもが欠除されて居るといふ

に至っては最早論外である。論理の外の軌道を通ってゐるとみて差支えない。溌剌たる生命さえ籠って居れば技巧はもとより問ふ処では無いのだ。然るにその末の末たる技巧迄も無いのだ[43]。

この記事は、銀雨詩社の同人たち（夕鳥、静雨、芙蓉、蘇川、無音、樫風、紅流、秀岳、一星、櫻泉、順笛）を順次取り上げて、一人一人に厳しい批評を加えている。此の批評に対して、銀雨詩社の斎藤芙蓉は10月3日付の『布哇毎日』で反論し、さらに田山は10月5日の紙上でさらに厳しい批評を展開している。芙蓉は7日、再び反論しているが、両者の間には真面目な意見の交換が見られ、険悪さはない。

もう一つの例として、1933年と1934年に掲載された秋山紫明による批評を紹介しておこう。

ヒロ銀雨詩社の十一月の歌稿を渡されて、批評を書けって云ふ話だったのだが、私自身の歌もどうしてよいか判らないでゐるのに、他人の歌の批評なんて一寸荷が張りすぎる。

それに銀雨詩社同人の方々とは未だ一面識もない人が殆んど大部分で、従って、その個々の作歌の歴史に対しても、全然無知なのだから批評と云ふ事は不可能と云って差支へない。が然し感想でも述べさせてもらって私の責を果したいと思ふ。

先ず一読して頭に浮び上って来る事は、銀雨詩社同人の中で殊更見劣りのする作家のない事である。それは大いに銀雨社として誇っていい事なのだと思ふ。そして歌の傾向も一、二をのぞけば素直な成長発展の経路をたどってゐる。

然し個々の作品に就いて見る時は多少不満も希望も無いではない。以下個人の作品によって考へて見る。・・・[44]

私は三月の詠草の発表せられる日を待ってゐたが、いざ発表されて見ると余り私の期待が大き過ぎた為めか作品に対しては聊か失望を感じさせたれた。紅顔を以て超歌人振りを発揮した時の同人の印象を想ひ描きながら以下作品に対して批評を書いて見る。・・・

これで三月の銀雨詩社寸評はしまいである。此の後も暇を見ては書いて見たいと思ふが間違った批評はどしどし作者自身の弁解が聞きたいものである。それがお互ひの勉強であり向上である。[45]

新聞社が単に寄稿された詠草を掲載するだけでなく、歌壇を成長させる役割も果たし、また歌人たちは、銀雨詩社以外の歌人からの批評を受けることによって、なれ合いでなく真剣な研究に励んでいたことがみてとれる。

4. 日本の歌壇 ―大橋松平との繋がり

短歌詩社の活動を継続することは簡単なことではなかったようだ。1920年代半ば過ぎにヒロを去っていた安達凉雨の目には、1930年当時の銀雨詩社は低迷した嘆かわしい状態であった。彼は次のように書いている。

ヒロの歌壇は寂れた。イヤ寂れたと云ふよりも全然その姿を消して仕舞った。歌の無い人間の生活、詩心を忘れた日の心が空虚である。・・・

ヒロの歌壇は何うして消へたんだらう。不景気が・・・。イヤ、何んな不景気だって歌を詩

の心まで奪ふとしない筈だ。それでは詠み盡して仕舞って最う其の気力がなくなったのであらうか。イヤ、そんな不真面目な歌人はなかった。精進を忘れた不真面目な人達であったら詠み盡すと云ふこともあるだらう。然し銀雨詩社の同人達はそんな不真面目ではなかった筈だ。・・・

それから暫らくは、詠草会も続いてゐたが、いつからと無く寂れ始めて今日の様に全く姿を消して仕舞った。銀雨詩社が寂れかかる頃、他島から来た新しい人達に依ってサボテン誌が発行されて亦暫くは歌詠む機運も見へてゐたが、それも永くは続かなかった。・・・

然し私は希ふ。銀雨詩社同人はたとえ幼稚であってもそれを捨てずに、どこまでも生かして行って貰いたいことを・・・。幼稚乍らも精進し大胆に自由に歌いたいものだ。私は所謂歌道等余り問題にしなくともいいと思ふ。アノ啄木の様に自由に、然かも大胆に歌って行きたいものだ。・・・[46]

この記事は、銀雨詩社同人の目に触れることを前提に、彼らの奮起を促すために書かれたのであろう。凉雨はさらに、この後すぐヒロに舞い戻った。1 年後の 1932 年元旦の『布哇毎日』には、8 人の銀雨詩社の歌人たちのエッセイが掲載され、銀雨詩社が何とか息を吹き返した様子が見て取れる。藤間順笛は、近頃は撃剣に熱中しているが、「併し短歌やその他の趣味の方面から足を洗った訳ではありません」と言い訳をしているが[47]、安達凉雨は、放浪の貧しさに、「魂がどこかへ消え去る様な淋しきを味ふ時、何うして私が歌はずにゐられよう。物質的な成功を遂げるには其の手段を持たない私である」と、歌に救われると告白し[48]、尾崎無音は、上達が遅いことを嘆きつつも、歌を詠むことの楽しさを述べた。

私は、短歌の真似を初めて十年近くなる自分を思ふと、不思議に思ふ程、しみじみと自分の歌に情無くなります。・・・別に其で身を立てようと云ふ野心もなく又其の器でもありませんから唯自分本位の利己的なものばかりを並べるばかりです。唯人はどうであらうと、自分丈で自分の道に歩みたい希望です。

楽しいではありませんか。

同好の人々が集まって、そしてそうした方面に話をする事は[49]。

ヒロの日本語学校教師でヒロ歌壇の重鎮であった斎藤芙蓉も、吟社に参加する喜びを語った。

私は短歌に親しみ出してから、もう彼是二十四五年にもなる。だが省みて一向進境しない私である。短歌を語るは、あまりにも未熟だ。然し私は他人のために作歌はしない。自分自身のために歌ふのであり作るのである。・・・

酒友は「一夜にして十年の知己になれる」と言ふように詩歌を通じて未だ見ぬ親友を作る事が出来る。

職務や雑務に追はれながらも尚捨て難い、作歌に親しむ理由である[50]。

そして、ヒロに戻った安達凉雨の誘いで同人になったばかり労働者歌人夕川寒月のエッセイは、作歌から得られる慰めと、階級が異なる同人の仲間入りしたことへの複雑な気持ちを表明している。

学びの道に遠い私が筆を投げてから五六年位にもなろうか。其の時から日記も止めたし種々な集会にも出ず新聞も止めた。こっそりと音も立てない様にこの地上のどこかで生きて行きた

かった。その柄でもない筆と絶縁するためには日記を始め一切を焼いて捨てた。・・・近頃になって凉雨さんが銀雨詩社から呼びかけてくれた。私が短歌を作るといったら歌が泣き出すかも知れない。只文字を縦にならべて見て喜んでゐるに過ぎない。然し銀雨詩社老人の中に短歌を通して一の暖い親しみが流れていることは真実だ。今迄「汗臭い土ほぜり」として白シャツ連中から度々虐げられて来た私には、たまらなく嬉しかった。一つの歌、それは血のにじむ様な私の生活記録といひたいが道に迷ふてどうにも動きの取れなくなった泣き声かもしれない。・・・生活難に喘ぐ園田の生活にも詩と歌とは充々てゐる[51]。

この年、銀雨詩社に転機が訪れた。すなわち、日本の改造社の大橋松平との繋がりが生れたのである。『門川』、『淡墨』、『夕雲』などの歌集を著した大橋松平は、前田夕暮、若山牧水、斎藤茂吉に学び、1931 年に上京して改造社に入社し、『短歌研究』編集長をつとめた歌人である。その大橋がヒロの銀雨詩社の指導をすることになった。その仲介役を果たしたのは田中洋月であった。洋月の遺稿集『流星』の出版にあたり大橋が寄せた「序」のなかに、その経緯が語られている。

私が田中君と会ったのはただ一度きりであった。かれこれ八年も前［1932］年の事であるが、雑誌の構成で印刷所に出張してゐた私は、突然見知らぬ人の訪問をうけたのであったが、その人が田中君であった。病気療養のため日本に帰って居たのだが、もう治ったから近々に、再びヒロへ行くとのことであった。・・・

その時の機縁で、私は田中君を通じてヒロの歌人諸君を知ることになり、爾来熱心な諸君の作歌精進に感じつつ、その批評をつづけて来たのであった[52]

田中洋月が病気保養のために帰国した際に、何の面識もなく、面会の予約もなく改造社を訪問して、偶然大橋松平に出会い、無理に批評添削を依頼したということのようだ。大橋は田中の熱意に打たれて承諾したのであろう。これによって太平洋をまたぐ郵便を通しての添削指導が始まった。添削は第二次大戦開始まで続いた。

移民地の歌壇発展は、日本との交流によって道がひらかれた。銀雨詩社の同人にとって、日本の専門家による添削指導は、目の覚めるような体験であった。真赤に添削されて戻った草稿は、例会ごとにガリ版刷りにされて同人に配布され、参加者全員で真剣な勉強がなされたようだ。尾崎無音は、次のように述べる。

［銀雨詩社の］会費は毎月二十五仙である。是はどうするかと云ふと毎月の詠草を日本に送って批評添削してもらふ費用である。

日本唯一の綜合短歌雑誌である改造社の短歌研究と云ふ雑誌があるが、その雑誌の編輯主任であり尾山篤二氏の高弟である大橋松平氏に依頼して同人の詠草を送って批評添削をしてもらって居るその費用である。

是は田中洋月氏の心配になったもので其の批評たるや流石に其の道で生活して居る丈あると同人等しく感心して居る処である。

一首の歌に対して十行二十字詰の原稿用紙に真赤に朱を入れてある四十枚からの原稿を藤間順笛君が徹夜して謄写版で作って同人に配布するのであるが其の努力の実に並大抵ではないのである[53]。

ホノルルの潮音詩社も、また俳句の布哇俳句会やヒロ蕉雨会も、創設から一定の期間を経て、さらなる向上を求めて日本の歌壇、俳壇と結びついている。日本との繋がりが移民地における文芸活動の継続と成長に貢献したことは明白である。と同時に、日本からの指導を求める段階で、移民たちはすでにハワイの大地に根を深く下しており、彼らの歌は自らの経験を歌うことによってますます移民としての生活を見つめ直し、そして移民地に適応していくことになった。

1941 年 12 月、このような日本との繋がりは、突然断ち切られた。日本軍による真珠湾奇襲である。日本人移民は「敵性外国人」という地位におかれ、日本語を奪われ（公的場での日本語使用禁止）、10 名以上の日本人の集会は禁止となり、日本人は周囲の疑惑の目をさけるために日本語の本、天皇の写真、日本人形、日本刀等を自主的に廃棄した。銀雨詩社の集会が開けなくなっただけでなく、銀雨詩社の同人のなかには、逮捕･抑留対象となる教育者やジャーナリストが多く、尾崎音吉（無音）、村上実（紅嵐）、丸谷松夫（秀岳）、小出正一（月梢）、村井正雄（翠嶺）、塩谷基（流霧）は開戦と共に逮捕され、ハワイ島のキラウエア火山基地に収容された。そこからオアフ島のサンドアイランド収容所へ、さらに大陸の収容所へと移送された[54]。

しかし大陸で抑留された歌人たちも、ハワイに残った歌人たちも、歌を詠み続けている。彼らの戦中の経験を歌から読み取ることは興味深い研究テーマであるが、しかしこの小論の枠外となる。戦中の歌ついては稿を改めたい[55]。

5.　戦後の銀雨詩社

このような意義ある短歌結社の活動であったが、ヒロ銀雨詩社は、戦後復活することがむずかしかった。紆余曲折の末やっと 1963 年 5 月に再スタートをきったが、ホノルル潮音詩社が戦後間もなく復活し、1950 年には合同歌集『ラウハラ』[56] を出版したのに比べると、著しい後れをとった。それはなぜだったのか。1959 年に藤間順笛が『ハワイ報知』に寄せたエッセイでその理由を分析している。順笛によると、「われわれ同人にその気力がなく」、また「われわれの不甲斐無さか怠慢による」ものだと断ったうえで、第一に戦後になって銀雨詩社同人のなかに俳句に走る者が出たこと、第二に銀雨詩社の元老格の同人（斎藤芙蓉、當間嗣郎、岩谷残花、田中洋月、横山櫻泉）が亡くなったこと、第三に日本に帰った者（三上朽葉）がいたこと、第四にヒロを去ってホノルルに転居した同人（福永渓月、安達凉雨、尾崎無音）がいたことを理由として挙げ、なかでも「名幹事尾崎無音がホノルルに転出」したことは痛手であったと述べている。しかし順笛は復活をあきらめてはおらず、「戦後帰米、留学生、軍人花嫁等、文芸趣味を持った人物が多くいる」ことを挙げ、ハワイ立州［1959］を記念して復興したいものだという願望を表明した[57]。

順笛の願望が実現したのは1963年であった。1950年代から1970年代は日本詩歌の黄金期といわれ、元気な戦争花嫁や留学生などのニューカマーの流入によって新しい動きがでてきた時期であり、銀雨詩社復活もその流れの中にあった。翌 1964 年の『ハワイタイムス』の「新年詠草」には銀雨詩社が登場し、その復活を印象づけている。掲載されているのは、夕川寒月、佐々木睦子、神川謙三、高見岱東、比嘉三良、木原ときえ、村井翠嶺、真砂津香、大田好美、美沙、島南郷、碧翠、大久保うまきち、丸谷秀岳、あくたがわ、牧ノ段光代、藤間順笛、上原素尚、鹽谷流霧、まるたにひさえ、松岡きぬ、落合静雨の 22 名の歌である。復興したいきさつについては、復興の中心となった又吉全興が次のように語っている。又吉はヒロの又吉病院の院長である[58]。

私は昭和三十七年（1962）に故国を訪問し比嘉春潮、栄子御夫妻の紹介で中野［菊夫］先生

に万葉の講義をして貰って先生に連れられて飛鳥、藤原宮、吉野川上流を見せて頂いて帰布して同好の先輩藤間順笛君と相語り、銀雨詩社再興を議した。幸いに夕川寒月、村井翠渓、本郷紅、大久保うまきち、高見岱東のベテランが相集り中心となって昭和三十八年五月に愈々スタートして今日に至っている。月一回第三日曜日に拙宅に集って貰い、例会を開催しているが中野先生を師として、研究的態度で作歌する様につとめている積りである。もう約六年も続いて会員も次第にふえて来た[59]。

戦後も日本の歌人に指導を仰ぐことが踏襲された。しかし戦後の例会は、同人宅を順次回るのではなく、毎回又吉全興の自宅で開かれたようだ。彼らの活動は、日本の中野菊夫の世話で、第二合同歌集『銀線集』（1970）の出版として実った。25 名の同人が歌を寄せている。丸谷秀岳は同書「あとがき」において詩社復興と第二歌集出版のいきさつを語っているが、活気ある活動が展開されていたらしい。「第二次世界大戦の余波を受けて長い空白時代はあったが、戦前の同人順笛･南郷･翠嶺･くれない・月梢・三良・秀岳等相集い、又吉ダクターを中心に復活し、すでに満五年の歳月は、夢の様に去った。過ぎ来し方を顧みてその進境の遅々たるにはなさけなくなるけれど、その後沢山の新人を迎えて戦前にまして盛んになった今日、歌集を発行してはと云ふ議は直ちにまとまった。私たちは短歌を通じて友情を深めつつ趣味に生き、併せて向上にはげみつつあることは倖である」と。

その後も活動は続いた。10 年後の 1973 年元旦の『ヒロタイムス』の「銀雨詩社一九七三年一月詠草」には、20 名の同人の詠草が掲載されている。そしてその 10 年後の 1984 年には、第三合同歌集『じゃからんだ』（1984）が出版され[60]、15 名の同人の歌がおさめられている。

結びにかえて ―日本人移民の同化

ハワイ日本人移民の短歌結社である銀雨詩社の歴史をたどり、彼らが詠んだ歌を分析することによって、いくつかの日本人移民の同化の特質がみえてきた。第一に、彼らはハワイで長年暮らしハワイに定着していたにもかかわらず、常に日本を向いており、日本文化である短歌を核として結社を作り、日本の歌壇との繋がりも持った。同好の士が集まり日本文化を楽しむことによって、祖国の父母や家族への望郷の念を昇華させていった。第二歌集『銀線集』の序文で中野菊夫が述べているように、移民が短歌を歌うのは、ハワイにおける生活や思いを歌うとともに、日本を思い出し心に刻む作業でもある。中野は言う。「この歌集の中にはハワイでの作者たちの生活や考え方が込められている。・・・歌をつくることを通して、日本のことを思い、祖国の美しさの理解を深めていることはたのしいことだろう」と。

第二の特質は、ハワイの生活に順応していく一方で、日本人以外のハワイの多民族社会にはあまり目を向けていなかったことである。彼らは社会的多数者であり、英語を話せず、日本人社会に孤立しても生活に困らなかった。すなわち、美しいハワイの自然に対しては日本人の感性で感動して歌を詠むが、ハワイの多民族社会との関わりは薄かったので、多民族社会の一員としての歌がない。彼らが歌ったのは移民地における日本人社会内の生活や思いであった。

この特質を、視点を少し変えて見ると、時代の制約を受けた日本人ナショナリズムと他文化への偏狭さを指摘できよう。外国にあっても日本人としての感性を磨き、日本人としてのアイデンティティを保持しようとする―そこには、日本人であることの誇りと、ナショナリズムが見られ、内的生活がハワイ化されることへの抵抗がみられる。例えば、尾崎無音は、日本人の感性を保持することについて、「物の見方に対して、月を観ても露一つ見ても同じ中に違った意味のものを感じ得られ

る自分である事は感謝してよいと思ひます」と述べ[61]、またハワイの生活様式・文化を「どんより」とした「魚の目」に例え、それに順応しないことに誇りや喜びを覚えている。

> 落ちた一枚の病葉にも、何とはなしに心動くのを感じ得る私は、其の詩心を嬉しく思って居る。布哇の様に年中温ま湯に浸って居るような気候と、生活は、ともすると心までもカナカナイズ［現地人化］して仕舞って、魚の目の様に、どんよりと、動かなくなってしまった時、私達は、云ひ知れぬ淋しさを感ずるのである。喜怒哀楽、其の時々の心をそのまま残して置こふと云ふ自己を客観する眼を少しでも持得る事を、私は心からうれしく思ふ。・・・[62]

文化も歴史も風土もまったく異なる外国にあって、ハワイ文化に同化せず、ハワイ人にはない日本人の感性を磨き、日本人というアイデンティティを保つことに拘りがあったといえるだろう。

第三の特質は、彼らは仲間と共に結社を作ることによって、移民地での日々の苦労や悲しみを歌を通して分かち合い、それを乗り越え、移民地に一層根付いていったことである。仲間を作るのに排他性はなく、日本人であることだけが条件であり、階級や性別を超えて結社をつくった。結社設立の意義について、斎藤芙蓉が語ることを引用しよう。

> 結社とか同志の集まりがないと稍もすれば遠ざかって行く、時には、はち切れるやうな歌の気分の浮かばない時もある。併し同志の集まりの前に作歌せねばならぬと言ふ事は過去の経験や実感をそらして進まして呉れる。夫れは同志の共励のお陰だと思ふ。若し同志がなければ、否同志の仲間に入って居らなかったならば、職務や雑務のために終に自然に捨ててしまふかも知れない。それを思ふが故に私は出来るだけ同志の集まりには欠かさず出席するやうに努めて居る。私の生活はそれだけ豊かである事を感謝して居る[63]。

彼らにとって短歌結社は生活を豊かにし、「共励」「同志」を得る場であった。目線が日本に向いた結社が、逆説的にハワイへの同化の助けとなったと言えるだろう。

註

1 島田法子編『俳句・短歌・川柳にみるハワイ日本人移民史』平成 18 年度科学研究費補助基礎研究 C（一般）報告書、2009 年。

2 林三郎『布哇島一周』（コナ、コナ反響社、1925）、29 頁。

3 林、18 頁。

4 Eleanor C. Nordyke, *The Peopling of Hawaii,* 2nd ed. (Honolulu: University of Hawaii Press, 1989), p. 179.

5 林、31 頁。

6 Marion Kelly, *Hilo Bay: A Chronological History: Land and Water Use in the Hilo Bay Area, Island of Hawai'i* (U.S. Army Engineer District, Honolulu, 1981), p. 120.

7 Kelly, p. 112.

8 前山北海「布哇島飛びある記」『ハワイ報知』1959 年 8 月 28 日。

9 林、34-35 頁。

10 U.S. Department of Commerce, Bureau of the Census, "Population: First Series, Number of

Inhabitants, Hawaii," *The U. S. Census 1940* (Washington, D. C.: Government Printing Office, 1942), pp. 1-2.

[11] 前山北海「布哇島飛びある記」。

[12] 前山北海「布哇島飛びある記」。

[13] 林、22 頁。

[14] 林、40-41 頁。

[15] 大久保清『ハワイ島日本人移民史』（ヒロ、ヒロタイムス、1971）、340-4 頁。

[16] 蕉雨会については、次を参照。高木眞理子「俳句･短歌から見る日系移民の姿（1930 年～ 1960 年）―ハワイ島を中心に― 」島田法子編『俳句・短歌・川柳にみるハワイ日本人移民史』、51-74 頁。

[17] 銀雨詩社『銀雨詩社合同歌集　銀雨』（ヒロ、銀雨詩社、1925）、48 頁。

[18] 銀雨詩社『銀雨詩社合同歌集　じゃからんだ』（ヒロ、メラニ・アーツ社、1984）、8 頁。

[19]『銀雨』、2 頁、20 頁。

[20]「ヒロ銀雨詩社同人、来る十九日午後、出本亭で新年宴会催す」『布哇毎日？』1935 年 1 月 15 日。ヒロ市 Hawaii Japanese Center（HJC）所蔵。

[21] 安達凉雨「其の頃の人を想ふ ―銀雨詩社同人繞りて（一）」『布哇毎日？』1931 年 1 月 16 日。HJC 所蔵。

[22]『銀雨』、1 頁。

[23] 尾崎無音「ヒロ銀雨詩社を語る」『火山』1935 年 1 月 1 日。

[24] 藤間順笛「三十五年前に創始したヒロ銀雨詩社を回想」『ハワイ報知』1959 年 8 月 13 日。

[25] 1941 年度の『日布時事布哇年鑑』（ホノルル、日布時事社、1941）によると、ホノルルとヒロの他、「馬哇島には真珠社、ハイク短歌会などあり」とある。213 頁。

[26] 同上。

[27] 福永渓月「三上朽葉氏を語る」『布哇毎日？』1933 年 11 月 11 日。HJC 所蔵。

[28] 竹の里人「銀雨詩社歌人総まくり」『布哇毎日？』日付不明。HJC 所蔵。

[29] 岩谷残花「雑感」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。

[30] 岩谷残花『歌集　沈黙の塔』尾崎無音編（ホノルル、尾崎無音、1954）、5-6 頁。

[31] 1931 年度の『布哇年鑑』によると､寒川（寒月）鉄男は「大工職」とある。日布時事社編集局編『日布時事布哇年鑑並に人名住所録』（ホノルル、日布時事社、1931）、住所録ハカラウの項。

[32] 夕川寒月「呼びかけられて」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。

[33] 丸谷秀岳「一皿の漬物」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。

[34] 竹の里人「銀雨詩社歌人総まくり」前掲。

[35] サトウキビを水とともに製糖場まで流す木製の筧をフルームという。

[36] キラウエア火山はペレの神の住みかで、彼女が来ると噴火を起こすと信じられていた。

[37] 島田法子編『俳句・短歌・川柳にみるハワイ日本人移民史』。

[38] Jiro Nakano, "Tanka Poets of Hilo ―A History of Hilo's Issei Poets," *Hawaii Herald*, vol. 8, no. 14, July 17, 1987.

[39] 尾崎無音「ヒロ銀雨詩社を語る」前掲。

[40] Jiro Nakano, "Tanka Poets of Hilo."

[41]「ヒロ銀雨詩社同人、来る十九日午後、出本亭で新年宴会催す」前掲。

[42] 丸谷秀岳「銀雨詩社同人の忘年会のぞき」『布哇毎日？』年号不明 12 月 24 日。HJC 所蔵。

[43] 田山啓「銀雨詩社詠草其他」『布哇毎日』1925 年 9 月 29 日。

[44] 秋山紫明「短歌随感（一）」『布哇毎日？』1933 年 11 月。HJC 所蔵。
[45] 秋山紫明「銀雨詩社詠草評（一）」『布哇毎日？』1934 年 4 月 14 日。
[46] 安達凉雨「其の頃の人を想ふ ―銀雨詩社同人繞りて（一）」前掲。
[47] 藤間順笛「銀雨詩社同人手記 ―歌人心境を語る」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。
[48] 安達凉雨「歌に生きる」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。
[49] 尾崎無音「ルンペン短歌」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。
[50] 斎藤芙蓉「作歌に親しむ心」『布哇毎日』1932 年 1 月 1 日。
[51] 夕川寒月「呼びかけられて」『布哇毎日』前掲。
[52] 田中洋月『歌集　流星』尾崎音吉編（ヒロ、田中洋月遺稿刊行所、1940）、3-4 頁。
[53] 尾崎無音「ヒロ銀雨詩社を語る」前掲。
[54] Jiro Nakano, “Tanka Poets of Hilo.”
[55] 第二次大戦中については、次を参照。島田法子「第二次大戦をめぐるハワイ日本人移民の忠誠心と日本人意識 ―俳句・短歌・川柳を史料として―」島田法子編『俳句・短歌・川柳にみる日本人移民史』、35-50 頁。
[56] 潮音詩社『歌集　ラウハラ』（ホノルル、潮音詩社、1950）。
[57] 藤間順笛「三十五年前に創始したヒロ銀雨詩社を回想」前掲。
[58] 又吉は 1892 年那覇に生れ、熊本医大を卒業。1918 年にハワイに渡航、1919 年ミシガン大学に学び、1920 年コーネル大学で技師として働き、1922 年医師試験に合格するとハワイに戻った。24 室の病室をもつ病院を経営し、日本人患者のために尽くした。Leon H. Bruno and others, “The Private Japanese Hospital: An Unique Social Phenomenon on Hawaii, 1907-1960,” a booklet, (Hilo: Lyman House Memorial Museum, 1985), p.16.
[59] ハワイ銀雨詩社『歌集　銀線集』（東京、樹木社、1970）、151-152 頁。
[60] 中野次郎編『合同歌集　じゃからんだ』（ヒロ、メラニ･アーツ社、1984）。その他に村井翠嶺編『銀線Ｉ』（ヒロ：ガリ版刷り、1980）と、村井翠嶺編『銀線第二集』（ヒロ、ガリ版刷り、1984）がある。
[61] 尾崎無音「ルンペン短歌」前掲。
[62] 尾崎無音「歌を作る心」『布哇毎日？』日付不明。HJC 所蔵。
[63] 斎藤芙蓉「作歌に親しむ心」前掲。

Japanese Immigrants in Hilo, Hawaii: Their Literary Activities at Gin-u Shisha Tanka Poetry Club

Noriko Shimada (Japan Women's University)

This paper examines the history of Gin-u Shisha Poetry Club, which was organized by Japanese immigrants in Hilo, Hawaii, in 1923. This club was founded for creating short traditional Japanese poems. Club members met once a month at a member's home, enjoyed dinner together, presented their new poems, and then discussed and commented on those poems. They published their first anthology in 1924, and local ethnic newspapers in Hilo continued publishing their poems every month. The club continued its activities until the outbreak of World War II, when many poets were incarcerated as dangerous enemy aliens and sent to detention camps in mainland America. This paper confirms that the club served as the agency of promoting ethnic pride among immigrants, a sense of belonging, and assimilation into the local life in Hawaii.

Keywords: Hawaii's Japanese immigrants, Japanese in Hilo, tanka poetry club, Gin-u Shisha

経済不況下におけるブラジル人の生活状況と今後の展望
― Ａ社調査、長浜市調査の比較から ―

松宮 朝（愛知県立大学・准教授）

＜目　次＞

1. 本稿の目的
2. Ａ社調査と長浜調査の比較
3. 日本での居住志向の規定要因に関する重回帰分析
4. まとめにかえて

キーワード：ブラジル人、不況、失業

1. 本稿の目的

本稿の目的はリーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人をめぐる現時点での問題と今後の展望について、調査データをもとにした実態把握・分析を行うことである。これまで、自治体、研究者による調査では、主に失業の実態やその国際比較が行われてきており、日本においてブラジル人の失業率が圧倒的に高くなっていたことが明らかにされている（樋口 2010）。もっとも、日系人労働者に対する需要がなくならないのは、安価で簡単に切ることができる労働力への需要が以前にも増して強く、ブラジルでのビザ支給については減少を見せつつも続いており、「フレキシブルな労働力」としてのブラジル人を必要とする構造は変わっていないという指摘もある（丹野 2009b）。その意味では 2008 年秋の経済不況後、どのようにブラジル人の労働・生活状況が変化し、今後のあり方はどのようなものとなるのかという点について目を向けることが重要な課題となるが、本稿では次の２点に絞り検討していくことにしたい[1]。

第１に、日系人が多く働く工場の労働力需要は 20 代後半から 30 代前半に集中（丹野 2009a:46）し、生産性とコストが求められるからこそ、日本語能力が解雇をめぐる決定的な要因（丹野 2009b:28）となっているという。特に日系人労働者については選別が行われているとされるわけだが、その基準とされる性別、年齢、滞在資格などの属性の特色、家族等の社会関係、日本語能力など、実際に経済不況後に職を得た人はどのような層なのかという点について、Ａ社調査、長浜調査の比較から分析を行いたい[2]。Ａ社調査が、人材派遣会社で雇用されているブラジル人労働者が対象であるのに対して、長浜調査は滋賀県長浜市に居住するブラジル人住民を対象としている。また、調査時期もＡ社調査が 2010 年９～ 10 月であるのに対して、長浜調査は 2010 年３～４月とズレはある。このような違いから、単純な比較をすることはできない。しかし、逆に言えば、サンプリングの偏りによる違いが認められるかどうかという点から比較分析を行うことで、それぞれのブラジル人の生活実態、展望の特色を描き出すことができると考えている。

第２に、リーマンショック後も日本で生活をしているブラジル人の今後の日本での滞在予定を規定する要因に関する分析を行いたい。この点については、日系三世・四世ないし二世の非日系配偶者がもっとも速いペースで減少していることに関連して、①日本語能力の相対的に低い三世・四世が解雇される確率が高いとする「日本の労働市場連動説」、②若年層がブラジルでの就労可能性が高いゆえに日本での生活に見切りをつけて帰国したという「ブラジルの労働市場連動説」が仮説的に提示さ

れている（稲葉・樋口 2010:26-27）。本稿では、属性、経済的資源、社会関係、日本語能力などの要因が、どのように定住／帰国に対する志向を規定するのかという点から探索的な分析を試みたい。

2.　A社調査と長浜調査の比較

本稿で用いるA社調査と長浜調査は、JICA 横浜海外移住資料館学術研究プロジェクト「経済不況下における在日日系ブラジル人の実態および社会統合への課題」（研究代表：山本かほり）を受けて実施したものであり、その概要は表 1 に示した通りである。

表 1　調査の概要

	A社調査	長浜調査
調査時期	2010 年 9 ～ 10 月	2010 年 3 ～ 4 月
調査対象者	A社との契約者	長浜市居住者 16 歳以上
有効回収票	489	301

表 2　性別

	A社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
男性	358	73.2	146	50.5
女性	123	25.2	152	48.5
無回答	8	1.6	3	1.0
計	489	100.0	301	100.0

回答者の性別は、A社調査でおおよそ 3/4 が男性、1/4 が女性、長浜調査では半々となっている。

表 3　年齢

	A社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
～ 19	7	1.4	22	7.3
20 ～ 24	47	9.6	49	16.3
25 ～ 29	88	18.0	38	12.6
30 ～ 34	86	17.6	34	11.3
35 ～ 39	92	18.8	32	10.6
40 ～ 44	68	13.9	31	10.3
45 ～ 49	49	10.0	38	12.6
50 ～ 54	29	5.9	31	10.3
55 ～ 59	9	1.8	16	5.3
60 ～	3	0.6	4	1.3
無回答	11	2.2	6	2.0
計	489	100.0	301	100.0

年齢については、日系人が多く働く工場の労働力需要は 20 代後半から 30 代前半に集中しているという丹野清人の指摘（丹野 2009a:46）を裏付けるように、A社に雇用されているブラジル人労働者は、20 代後半から 30 代前半が 25.6％と約 1/4 を占めている。30 代後半も 18.8％と一定数あるが、40 代前半から後半は 13.9％→ 10.0％と低くなり、50 代では前半 5.9％→後半 1.8％とさらに下がっている。A社は生産性が高い製造業中心に派遣をしており、2009 年 9 月のA社での聞き取り調査にお

いても、「半導体関係では 40 代半ば、自動車関係でも 50 代半ばくらいまでの人しか仕事はない」ことが指摘されていた。このように年齢が重要な雇用の条件となっていることがわかる。

もっとも、長浜調査データと比較してみると、長浜調査が 10 代、20 代前半の層が多く、50 代以降も若干多くなっている。この点からすると、Ａ社において 20 代後半から 30 代前半の層が相対的に多いというという特色があるだけで、年齢層に関して際だった傾向が認められるわけではない。

表４　永住資格

	Ａ社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
永住資格あり	173	35.4	86	28.6
取得予定	157	32.1	144	47.8
取得しない	118	24.1	53	17.6
日本国籍あり	16	3.3	4	1.3
その他	19	3.9	9	3.0
無回答	6	1.2	5	1.7
計	489	100.0	301	100.0

Ａ社調査の場合では、永住資格についてはすでに 35.4％が取得し、約 1/3 の 32.1％が「取得する予定」と回答している。長浜調査では「取得予定」が半数弱となっている。この「取得する予定」というニュアンスをどのように読み取るかが重要となるが、少なくとも、明確に「取得するつもりはない」という回答がＡ社調査で 24.1％、長浜調査で 17.6％であることと比較すれば、日本での中長期的居住も視野に入れた層が一定程度存在することが推測される。

表５　日本での居住年数の合計

	Ａ社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
１年	17	3.5	23	7.6
２年	32	6.5	32	10.6
３年	32	6.5	32	10.6
４年	18	3.7	18	6.0
５年	23	4.7	23	7.6
６年	16	3.3	16	5.3
７年	19	3.9	19	6.3
８年	13	2.7	13	4.3
９年	15	3.1	15	5.0
10 年	17	3.5	17	5.6
11 年	11	2.2	11	3.7
12 年	11	2.2	11	3.7
13 年	12	2.5	12	4.0
14 年	11	2.2	11	3.7
15 年	10	2.0	10	3.3
16 年	4	0.8	4	1.3
17 年	6	1.2	6	2.0
18 年	7	1.4	7	2.3
19 年	4	0.8	4	1.3
20 年～	34	7.0	9	3.0
無回答	25	5.1	8	2.7
計	489	100.0	301	100.0

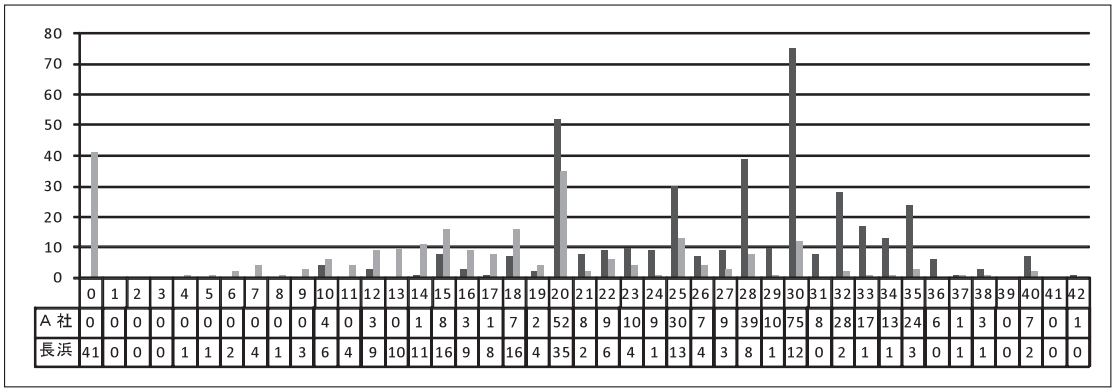
次に、日本での居住年数の合計を見てみると、A社調査では、「1 ～ 4 年」という比較的短期間の層が約 1/4、「5 ～ 9 年」が約 2 割、相対的に長い「10 ～ 14 年」、「15 年以上」がそれぞれ約 1/4 となっている。これに対して長浜調査では、「1 ～ 4 年」が約 1/3、「5 ～ 9 年」が約 3 割「10 ～ 14 年」が約 2 割、「15 年以上」が約 15％と、居住年数は若干短くなっている。

表 6　日本での移動の回数

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
0 回	14	2.9	35	11.6
1 回	36	7.4	47	15.6
2 回	67	13.7	48	15.9
3 回	78	16.0	47	15.6
4 回	74	15.1	32	10.6
5 回	56	11.5	22	7.3
6 回	33	6.7	16	5.3
7 回	33	6.7	7	2.3
8 回	20	4.1	3	1.0
9 回	6	1.2	3	1.0
10 回～	45	9.2	21	7.0
無回答	26	5.3	21	7.0
計	489	100.0	301	100.0

日本での移動の回数は居住年数の違いに対応して、A社調査の方が長浜調査よりも頻度が高くなっている。移動回数は「2 ～ 4 回」がどちらの調査でも 10％を超え、「10 回以上」もA社調査で 9.2％、長浜調査で 7.0％である。これまで指摘されていたように、頻繁な国内移動の様子をうかがい知ることができよう。

図 1　平均月収



平均月収は、A社調査では 20 万円と 30 万円の 2 つの山があり、20 万円～ 35 万円の間に集中している。先に見てきたように、経済不況後収入が下がったという回答が 7 割以上にのぼるわけだが、A社を通じた派遣では 30 万円前後の月収を確保している層が一定程度存在していることがわかる。その一方で、長浜調査の場合、失業中（0 円）が 41 と相当数存在しており、20 万円の山に集中し、A社調査では最も多かった 30 万円前後の収入を得ている層は少ない。ここから、A社と契約するブ

ラジル人労働者が相対的に高い収入を得ていることが明らかとなる（図 1）。

では、こうした収入がどのように貯金や母国への送金、ブラジルでの不動産取得など経済的資産形成に結びついているのだろうか。

表７　貯金

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
している	250	51.1	75	24.9
以前はしていたが現在はしていない	103	21.1	83	27.6
していない	108	22.1	128	42.5
無回答	28	5.7	15	5.0
計	489	100.0	301	100.0

貯金については、A社調査で「している」が約半数の 51.1％と約半数であるのに対して、長浜調査では約 1/4 にすぎない。「していない」がA社調査で 22.1％、長浜調査で 42.5％、「以前はしていたが現在はしていない」がA社調査で 21.1％、長浜調査で 27.6％と、近年の景気悪化の影響を認めることができるかもしれない。

表８　円での貯金額

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
～ 9 万円	37	23.1	59	89.4
10 ～ 49 万円	64	40.0	6	9.1
50 ～ 99 万円	40	25.0	1	1.5
100 ～ 199 万円	19	11.9	0	0.0
200 万円～	10	6.3	0	0.0
計	170	100.0	66	100.0

もっとも、貯金をしている場合でも、その額を見ると、9 万円未満が長浜調査で 9 割弱、A社調査でも 23.1％と 1/4 近くというように、決して多いわけではない。

表９　母国への仕送り

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
していない	158	32.3	191	63.5
1 ～ 4 万円	43	8.8	41	13.6
5 ～ 9 万円	95	19.4	20	6.6
10 ～ 14 万円	76	15.5	12	4.0
15 ～ 19 万円	40	8.2	8	2.7
20 万円以上	23	4.7	8	2.7
無回答	54	11.0	21	7.0
計	489	100.0	301	100.0

母国への仕送りについては、「していない」がA社調査で 32.3％と約 1/3、長浜調査では 63.5％である。

この点に関連して、2005 年 9 月に実施された群馬県太田市の人材派遣会社調査、2006 年 11 月に実施された愛知県豊橋市調査の分析では、人材派遣会社に勤務する約半数が母国に送金しており、5 ～ 10 万円未満が 32.5%、10 万円以上の者が 26.2%も存在していたことが明らかにされている（小内・浅川・都築 2010:95-96）。その一方で、送金による母国とのつながりが重要であるものの、2008 年秋以降、日本からブラジルへの送金額が減少しつつあることが指摘されてきた。この点について、調査時においても、A 社調査では 5 ～ 9 万円の仕送りをしている層が約 2 割で、10 万円以上の送金をする層も 3 割近くにのぼることは、送金による母国とのつながりが保持されていることを示している。

表 10　ブラジルでの不動産所有

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
持っている	187	38.2	97	32.2
持っていない	282	57.7	193	64.1
無回答	20	4.1	11	3.7
計	489	100.0	301	100.0

貯金に限らず、不動産で見てみても、ブラジルで不動産を所有しているのはA社調査で 38.2%、長浜調査で 32.2%であり、「持っていない」という回答がA社調査で 57.7%、長浜調査で 64.1%と多くなっている。

こうした経済的資源とともに重要なのが、社会関係資源である。

表 11　日本に居住する生活の面倒を見てくれる家族・親族

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
いる	112	22.9	78	25.9
いない	363	74.2	212	70.4
無回答	14	2.9	11	3.7
計	489	100.0	301	100.0

表 12　ブラジルに居住する生活の面倒を見てくれる家族・親族

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
いる	204	41.7	64	21.3
いない	271	55.4	223	74.1
無回答	14	2.9	14	4.7
計	489	100.0	301	100.0

自身の生活の面倒を見てくれる家族については、A 社調査ではブラジルで 41.7%、日本では 22.9%、長浜調査ではブラジルで 21.3%、日本では 25.9%である。「ブラジルにいない」という回答がA社調査で 55.4%と半数以上、長浜調査では 74.1%と 3/4 近く存在している。

表 13　ブラジルで働き口を紹介してくれる家族・親族

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
いる	167	34.2	78	25.9
いない	309	63.2	206	68.4
無回答	13	2.7	17	5.6
計	489	100.0	301	100.0

さらに今後の動向を考える上で重要なのは､｢ブラジルで働き口を紹介してくれる家族･親族｣が｢いる｣という回答がＡ社調査で約 1/3、長浜調査で約 1/4 にとどまっている点である。ブラジルへの帰国を希望する層が大半であるものの、ブラジルでの生活に関する保障という点では極めて厳しい条件となっていることが推測される。

表 14　困ったときに頼りにする人・機関（複数回答）

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
日本にいる家族	179	36.6	152	50.5
ブラジルにいる家族	130	26.6	27	9.0
日本にいる友人・知人	125	25.6	91	30.2
ブラジルにいる友人・知人	9	1.8	4	1.3
日本人の友人・知人	15	3.1	10	3.3
日本人中心のボランティア団体	12	2.5	6	2.0
ブラジル人が中心の宗教団体	33	6.7	30	10.0
会社	20	4.1	32	10.6
日本の行政機関	72	14.7	17	5.6
その他	33	6.7	22	7.3

では、生活上、困った時に誰を頼りにしているのか。この点については、｢日本にいる家族｣がＡ調査 36.6％、長浜調査 50.5％で最も多く、｢ブラジルにいる家族｣はＡ社調査では約 1/4 が頼りにしているものの、長浜調査では 9.0％にすぎない。｢日本にいる友人・知人｣は一定程度頼りにされているが、｢日本人｣との関係については、｢日本人の友人・知人｣がどちらも 3％強、｢日本人中心のボランティア団体｣も 2％台と極めて低い。

次に、日本語能力については､｢話す･聞く｣､｢読む｣､｢書く｣それぞれで｢母語とする人と同程度｣､｢漢字を使って書ける｣はどちらも 1 割に満たない。｢話す・聞く｣については、Ａ社調査では｢日常生活に困らない程度にできる｣､｢母語とする人と同程度｣合わせて約 45％であり、半数近くが困らない程度の日本語能力を持っている。それに対して長浜調査では、いずれについても｢ほとんどできない｣が 3 割前後を占めている。ここから、Ａ社と契約しているブラジル人労働者が相対的に高い日本語能力を有しており、先行研究で強調されてきた就労における日本語能力の重要性が確認されたと思われる。

表 15　日本語能力（話す・聞く）

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
ほとんどできない	67	13.7	82	27.2
しばしば困ることがある	190	38.9	103	34.2
日常生活に困らない程度できる	187	38.2	92	30.6
母語とする人と同程度	30	6.1	17	5.6
無回答	15	3.1	7	2.3
計	489	100.0	301	100.0

表 16　日本語能力（読む）

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
ほとんどできない	90	18.4	91	30.2
ひらがな、カタカナは読める	153	32.0	83	27.6
簡単な漢字程度	208	42.5	109	36.2
母語とする人と同程度	18	3.7	8	2.7
無回答	20	4.1	10	3.3
計	489	100.0	301	100.0

表 17　日本語能力（書く）

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
ほとんどできない	131	26.8	109	36.2
簡単な単語程度は書ける	181	37.0	111	36.9
ひらがな、カタカナでは書ける	142	29.0	64	21.3
漢字を使って書ける	15	3.1	5	1.7
無回答	20	4.1	12	4.0
計	489	100.0	301	100.0

表 18　ポルトガル語能力（%）

	A 社調査			長浜調査		
	話す・聞く	読む	書く	話す・聞く	読む	書く
まったくできない	1.8	3.3	3.3	3.3	6.3	5.3
あまりできない	6.3	7.2	7.2	3.7	5.0	6.0
わりとできる	19.0	15.1	17.0	18.9	16.3	18.6
ほぼ完全にできる	70.6	71.8	68.7	72.4	69.4	66.1
無回答	2.3	2.7	3.9	1.7	3.0	4.0

ポルトガル語については、A社調査、長浜調査共に「話す・聞く」、「読む」、「書く」すべてで「ほぼ完全にできる」が 7 割前後、「わりとできる」も含めると 9 割近くにのぼる。いずれについても「まったくできない」、「あまりできない」が合わせて約 1 割も存在する。日本生まれ、あるいは日本で教育を受けた若年層のポルトガル語能力の実態であり、少なくとも、今後日本での生活を選択する要因の 1 つとなっていることが推測される。

表 19　日本語を学ぶこと

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
学びたい	220	45.0	127	42.2
機会があれば学びたい	201	41.1	127	42.2
あまり学びたくない	31	6.3	7	2.3
学びたくない	12	2.5	35	11.6
無回答	15	5.1	5	1.7
計	489	100.0	301	100.0

では、日本語を学ぶことの意欲については、A社調査、長浜調査いずれも「学びたい」、「機会があれば学びたい」合わせて８割以上である。日本語能力については、調査対象がアルゼンチン人で本研究と対象者は異なるが、稲葉・樋口（2010:98）の調査では、「人的資本のうち日本の労働市場で有効活用されているのは、日本語能力にほぼ限定されている」という指摘が重要だろう。この点からすれば、「日本語を学ぶこと」に対するニーズを考慮した取り組みの必要性をあらためて強調しておくべきだろう。

表 20　日本での滞在・帰国予定

	A 社調査		長浜調査	
	度数	%	度数	%
日本に永住予定	39	8.0	40	13.3
できるだけ日本に滞在、いずれは母国に帰国予定	157	32.1	108	35.9
１年以内に母国に帰国予定	67	13.7	26	8.6
３年以内に母国に帰国予定	77	15.8	30	10.0
５年以内に母国に帰国予定	32	6.5	7	2.3
帰国の予定が立たない	97	19.8	82	27.2
その他	8	1.6	5	1.6
無回答	12	2.5	3	1.0
計	489	100.0	301	100.0

日本での滞在・帰国予定にみてみると、日本に永住するという意思表示を明確に示しているのはA社調査で 8.0%、長浜調査で 13.3%である。最も多いのが「できるだけ日本に滞在し、いずれは母国に帰国したい」という層で、どちらの調査でも約 1/3 を占める。これに続くのが「帰国の予定が立たない」で、帰国を希望しつつもその時期を明確にできないことが数字からも明らかとなる。

こうした日本での滞在志向がどのような要因によって規定されるのか。この問題については次節で詳細に分析を行っていきたい。

3.　日本での居住志向の規定要因に関する重回帰分析

日本での永住か、帰国、あるいはその揺れなど日本での居住志向はどのような要因により規定されるのだろうか。こうしたテーマについてのまとまった研究成果は限られており、部分的には、近藤（2011）で、永住資格、同居家族構成などに関する分析が行われているだけである。ここではこの問題に迫るため探索的に日本での居住志向を従属変数とした重回帰分析を行ってみたい[3]。

従属変数は、「日本での滞在･帰国予定」を改変し、「日本に永住予定」5、「帰国の予定が立たない」4、「できるだけ日本に滞在後帰国」3、「3 ～ 5 年で帰国予定」2、「1 年以内に帰国予定」1 を割り振り、

「日本での滞在志向尺度」とする。

独立変数としては、属性として、「性別」、「年齢」、「永住資格」を採用する。生活面では「貯金」、「母国への仕送り」、「ブラジルでの不動産所有」、社会関係では「ブラジルで生活の面倒を見てくれる家族・親族」、「ブラジルで働き口を紹介してくれる家族・親族」、「日本で生活の面倒を見てくれる家族・親族」、「日本での子ども居住」、日本語能力「話す・聞く」とする。

それぞれの変数の度数分布については前節までに示した通りだが、重回帰分析を行うにあたって以下の通り改変している。

表 21　変数の説明

性別（女性）	女性 1、男性 0
年齢	年齢の回答通り
永住資格	「日本国籍・永住資格あり」1、「永住資格なし」0
貯金	「している」1、「していない」0
母国への仕送り	「している」1、「していない」0
ブラジルでの不動産	「持っている」1、「持っていない」0
ブラジルで面倒を見てくれる家族・親族	「あり」1、「なし」0
ブラジルで働き口を紹介してくれる家族・親族	「あり」1、「なし」0
日本で面倒を見てくれる家族・親族	「あり」1、「なし」0
日本での子ども居住	「あり」1、「なし」0
日本語能力「話す・聞く」	「話す・聞く」の回答通り

以上の変数をもとに、A社調査と長浜調査の重回帰分析を行うが、その際、次の点に着目し分析を行う。

第 1 に、日本での居住志向を規定する要因として強い効果を持つのは、属性なのか、経済的資源なのか、社会関係なのか、意識なのかという点である。ここでは、「モデル 1:属性のみ」、「モデル 2:属性＋経済的資源」、「モデル 3：属性＋経済的資源＋社会関係」、「モデル 4：属性＋経済的資源＋社会関係＋日本語能力」という 4 つのモデルの調整済み決定係数を比較することから、規定要因の大枠に関する分析を行いたい。

第 2 に、その中でも特に強い効果を持つ規定要因は何かを明らかにしたい。ここから、さらなる分析のための知見を獲得することを目指している。

重回帰分析の結果は以下の通りである [4]。

表 22　日本居住志向の重回帰分析

	A 社調査				長浜調査			
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
性別（女性）	-.002	-.057	-.081	-.067	-.023	-.059	-.055	-.055
年齢	-.006	-.025	-.041	-.058	-.050	-.024	-.063	-.063
永住資格	.116*	.131*	.101#	.090#	.120#	.122#	.088	.021
貯金		-.152**	-.138**	-.139**		.131*	.144*	.116#
母国への仕送り		-.127*	-.112*	-.112*		-.072	-.097	-.079
ブラジルでの不動産		-.177**	-.178**	-.177**		-.054	-.019	-.017
ブラジルで面倒を見てくれる家族・親族			.014	.009			-.108	-.110
ブラジルで働き口を紹介してくれる家族・親族			-.093#	-.090#			-.086	-.112
日本で面倒を見てくれる家族・親族			.078	.072			-.018	-.015
日本での子ども居住			.142**	.135*			.081	.095
日本語能力「話す・聞く」				.081				.171*
F 値	1.924n.s.	6.819**	5.318**	4.989**	1.394n.s.	1.664n.s.	1.804#	2.188*
調整済み決定係数	.006	.084	.103	.104	.004	.016	.034	.054

注：数値は標準化偏回帰係数　#p<.10 *p<.05 **p<.01

まず、A社調査の分析結果からみていこう。「モデル1:属性のみ」、「モデル2:属性＋経済的資源」、「モデル3：属性＋経済的資源＋社会関係」、「モデル4：属性＋経済的資源＋社会関係＋日本語能力」という4つのモデルの調整済み決定係数を比較してみると、属性のみのモデル1は有意なモデルなっていないのに対して、貯金などの経済的資源を加えたモデル2では説明力が一気に高くなることがわかる。モデル2→モデル3でも調整済み決定係数の値が高くなるが、モデル3→モデル4ではほとんど変わらない。これらを総合すると、日本での居住志向を規定する要因としては、属性はあまり説明力を持たず、経済的資源が高い効果を持ち、社会関係も一定の効果を持つことが明らかとなる。なお、日本語能力は効果を持っていない。

一方、長浜調査の分析では、全体的に調整済み決定係数の値が低く、モデル4のみが有意なモデルとなっている。属性の説明力が弱いことは共通しているが、A社調査の分析との比較で異なるのは、社会関係があまり効果を持たず、日本語能力が一定の効果を持つ点である。

次に、どの要因が説明力を持つのか個別にみていくと、A社調査、長浜調査のいずれも属性については「永住資格」を持っている方が日本での居住志向を高めている。また、A社調査では、「貯金」、「母国への仕送り」、「ブラジルでの不動産」という経済的資源についてはすべてが効果を持っている。つまり、「貯金」があり、「母国への仕送り」をし、「ブラジルでの不動産」を所有していることが日本での居住ではなくブラジルへの帰国志向を高めている。その一方で、社会関係としては、ブラジルでの家族・親族や日本での家族・親族関係はあまり効果を持たず、「日本での子ども居住」が日本での居住志向を高めている。

それに対して、長浜調査では、A社調査とは逆に「貯金」がある方が滞日志向を高めている点が注目される。もう一つは日本語能力が高いほど日本での居住志向が高くなっている点だ。最後に、これらの知見に関する解釈をまとめておこう。

4.　まとめにかえて

まずはA社調査と長浜調査の比較分析、および滞日志向に関する重回帰分析の知見をまとめておきたい。これまで指摘されていたような若い世代が多く雇用されている状況は明らかになったものの、A社調査と長浜調査の比較からは、年齢について顕著な差は認められなかった。その一方で、平均収入、貯金、母国への送金など経済的な要素については、明らかにA社に雇用されている層の方が豊富であった。これはブラジルとの家族との関係についてもいえる。また、近年最も重視されている日本語能力については、それほど大きな違いは認められなかった。とはいえ、A社に雇用されているブラジル労働者の方が、「話す・聞く」、「読む」、「書く」いずれについても、「ほとんどできない」という回答の割合が多かった。これは、先行研究で指摘されてきた、日本語能力が雇用に対して一定の効果を持つという知見を支持する結果と見ることができるだろう。

その一方で、今後の滞日志向については、A社調査と長浜調査では対照的な結果となった。A社調査からは、基本的に貯金や母国への仕送り、ブラジルでの不動産を所有しているといった経済的な条件が整えばブラジルに帰国することが推測される。逆に日本で子どもが居住している場合は日本での居住志向を高める。一方、長浜調査の結果から、一定の貯金をし、日本語能力を有することが、今後日本での滞在することを選択するという道筋が浮かび上がってくる。これは極めて対照的な結果ではあるが、今後のあり方を考える上では、ブラジル人労働者の就労形態や、どのような資源を有しているかという点を踏まえた、丁寧な比較分析が要求されるといえる。その意味で、今回の分析結果を踏まえ、同時期に実施された自治体調査との比較を行うことで、分析の精度をさらに高め

ていくことにしたい。

註

[1] これまでの筆者によるブラジル人をめぐる調査研究については、松宮（2008, 2009, 2010a, 2010b, 2011）を参照していただきたい。

[2] 長浜調査については、近藤（2011）において詳細が報告されている。

[3] A社調査データの詳細な分析については、山本・松宮（2011）を参照されたい。

[4] 多数の独立変数を投入するため多重共線性の危険性があるが、独立変数間の相関を確認したところ顕著に高い相関関係は認められなかった。

引用文献リスト

稲葉奈々子・樋口直人 2010『日系人労働者は非正規就労からいかにして脱出できるのか』（財）全国勤労者福祉・共済振興協会。

小内透・浅川和幸・都築くるみ 2010「在日ブラジル人の生活の諸相」小内透編著『在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房。

小内透編著 2010『ブラジルにおけるデカセギの影響』御茶の水書房。

近藤敏夫 2011「日系ブラジル人の家族構成と定住化傾向」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』5、45-59。

丹野清人 2009a「官製雇用不安と外国人労働者」『寄せ場』22、36-52。

丹野清人 2009b「外国人労働者問題の根源はどこにあるのか」『日本労働研究雑誌』587、27-35。

樋口直人 2010「経済危機と在日ブラジル人」『大原社会問題研究所雑誌』622、50-66。

松宮朝 2008「外国人労働者はどのようにして『地域住民』となったのか」鶴本花織・西山哲郎・松宮朝編著『トヨティズムを生きる』せりか書房。

松宮朝 2009「「縮小社会」化する地域社会と外国人」『地域社会学会年報』21、35-48。

松宮朝 2010a「これはなんのための調査なのか」『社会と調査』4、19-25。

松宮朝 2010b「経済不況下におけるブラジル人コミュニティの可能性」『社会福祉研究』12、33-40。

松宮朝 2011「ニューカマー外国籍住民集住地域の比較研究に向けて」『愛知県立大学教育福祉学部論集』59、19-26。

山本かほり・松宮朝 2011「リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人労働者」『社会福祉研究』13、37-62。

Comparative Studies of Brazilian Workers: Their Living Conditions and Future Perspectives

Ashita Matsumiya（Aichi Prefectural University）

This paper reports the results of a questionnaire survey targeting Brazilian workers employed by a temp agency in Aichi and Brazilian residents of Nagahama City.

This research was intended to determine how Brazilian workers in Japan have been affected by the ongoing recession that began in autumn of 2008. The research clarified how these people were seriously affected. More than 50% of the respondents had lost their jobs, with 70% reporting lower income after the recession. Moreover, 25% of the respondents had once been on welfare.

After experiencing these difficulties, the respondents now have jobs and continue living in Japan. We tried to determine who could get a job and remain in Japan after the recession, by asking respondents about their basic attributes (sex, age, visa), social network such as family, and Japanese language ability. We also tried to analyze certain factors that will affect their future — whether it entails returning to Brazil or continuing to live in Japan.

Keywords: Brazilian, recession, unemployment

日系南米人支援活動の「射程」
― リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人の状況 ―

山口博史（名古屋大学国際交流協力推進本部）

＜目　次＞

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 日系南米人支援活動の「射程」
4. 結び

キーワード：日系南米人、支援活動、失業、社会的距離、ネットワーク

1. はじめに

2008 年秋以降の急速な経済状況の悪化は東海地方の日系南米人にも大きな影響を与えた。下記の図 1 は東海三県の経済動向概況を把握するため、いわゆる景気動向指数（コンポジット・インデックス、CI（2005 年を 100 とする））を東海三県各県別に表したものである。

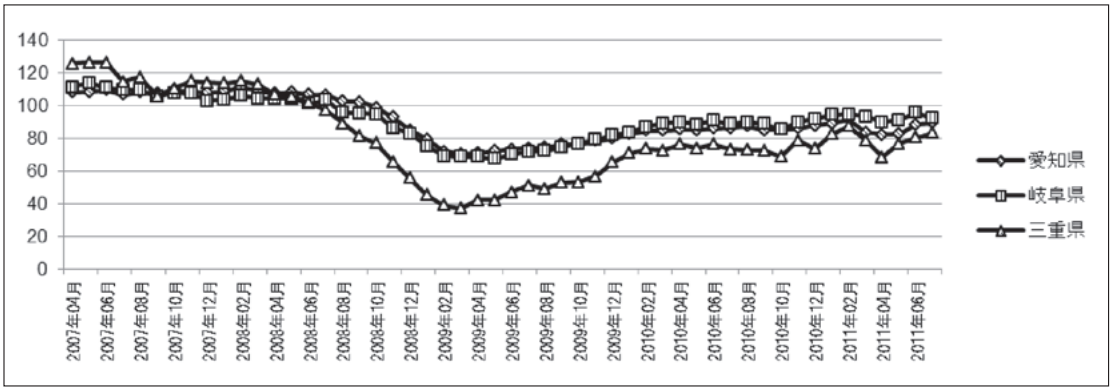


図 1　東海三県の景気動向指数（CI）（2005 年＝100）

図 1 に明らかなように、2009 年春を底にして一定の回復が見られるとはいえ、東海三県（特に三重県）での 2008 年からの経済の不振は深刻である。これにともない、多くの日系南米人が東海三県を後にした。代表的な日系南米人であるブラジル人に関して、愛知県を例にとってみると、2007 年末時点で 80,401 人であったブラジル籍外国人登録者数が、2010 年末時点では 59,515 人と、25％以上の減少を見せている [1]。

こうした状況のもとで日系南米人の大量失業と大量帰国に関心が向けられてきた（たとえば、樋口（樋口 2010）を参照）。またこれと表裏をなす研究関心として、日本に残ることを選んだ人々について、それがどのような人々であったかについてのものがある（松宮 2011）。

また、期間の長短にかかわらず、この間の不況で何らかの形で失業経験のある日系南米人の層 [2] は 54.0％にのぼっているというデータがある。筆者は、こうした人々がどのような層であったかについ

て、ごく単純なモデル（説明変数:基本属性と現住地居住歴、日本語能力）ではあるが、ロジスティック回帰分析を試み、下の表１のような結果を得ている。

表１　失業経験に関するロジスティック回帰分析

	B	Exp（B）
性別（女性 =1、男性 =0）	-.758 **	.469
年齢	.028 *	1.028
学歴（高卒以上＝１、それ以外＝０）	-.717 **	.488
現住都市居住月数	-.008 *	.992
日本語能力（読むこと）	-.025	.975
定数	.173	
Nagelkerke R^2	.098	

**: p<.01, *: p<.05
出典：（Yamaguchi, 近刊）

上掲表では、女性で相対的に失業経験を有する人が少ないこと、年齢が上がると失業経験を有する人が増えること、高卒以上の学歴を有する層に失業経験を有する人が少ないこと、現在住んでいる都市に居住している期間の長さと失業経験がないことの関連、そして日本語能力と失業経験の相関のなさが示されている。このうち、現住地居住歴と失業経験の関連については、失業して他地域に引っ越しをせざるを得なくなった状況の反映であると考えられる。日本語能力に失業経験を左右する効果が統計的に見られないことについては、契約の非更新や打ち切り等に際し、日本語能力が考慮されないという日系南米人がおかれた労働市場の性質を反映したものだと思われる（Yamaguchi, 近刊）。

筆者はこれまで、地方的な日系南米人支援がどのような社会的背景のもとに行なわれているのかについて検討を行なってきた（詳細は拙稿（山口 2011）を参照のこと）。この問題関心の上で、本稿では日本人社会の側からのサポート活動が日系南米人のどれほどの層に届いたのかについてデータに基づいて考察をしてみたい。この分析を行なう際、日系南米人支援活動の到達範囲の指標として用いたいのは、「日本の生活で困ったことがあるとき、頼りになるのは誰か」という質問に対する回答である。選択肢として日本人社会の側には、「日本人の友人・知人」、「日本人が中心のボランティア団体」、「会社」、「日本の行政機関」がある。

こうした分析に関連を有する研究として、代表的なものとして 90 年代の渡日初期に実施された調査データに基づいた分析（都築 1995）や 2000 年代後半に入ってからの職場関係を中心とした分析（浅川 2009）がある。都築は「社会的ネットワーク」と「関係依存」というコンセプトを用いてブラジル人の生活の維持・援助に関する様々な場面で見られる、本人以外のサポートについて検討を行なっている。浅川は、特に職場での関係に着目して、職場問題を話し合う関係、仕事の後に食事や飲みに行く、休日を一緒に過ごす、仕事のうえで協力しあう、困ったときに相談する、お金の貸し借りをするといった諸関係を分析の俎上に載せている（浅川 2009:62）

これらの分析から得られた知見として、都築は、多くの場面で家族親族への依存度が高いこと、「病気になって病院に行きたいとき」以外は、日本人側からの援助を受けた経験があまり多くないことを指摘した（都築 1995: 257）。また浅川の分析では「職場問題を話し合う」、「仕事のうえで協力しあう」、「困ったときに相談する」関係において、日本人との関係が比較的よく見られることが指摘されている（浅川 2009）。

上記研究のような先行研究は、日系南米人労働力に対する需要が比較的あった時期に行なわれていた。今次調査は、先にみたように、大きな不況の波から回復していない時期に、そのインパクトを評価するために行なわれたものである。本稿では、先に提示したように、不況で困難を抱えた日系南米人に対して、どういった「依るべき先」があったのか、またそうした「依るべき先」を有していた人たちのうち、日本社会サイドにそれを有していた層にはどのような特徴があったのかを検討していきたいと考えている。

2.　調査の概要

この調査で用いたデータは、2010 年 10 月 1 日から 10 月 31 日にかけて、愛知県内の人材派遣企業 A 社で働くブラジル人（をはじめとする日系南米人）に対して行なった調査票調査によるものである。同調査では、調査票を A 社本社に送り、A 社から、ブラジル人雇用が行なわれている各営業所に回送し、各営業所を通じて回答を取りまとめてもらうことになった。雇用されているブラジル人労働者数は常時変動しており、母数の正確な把握はできていない。なお、A 社に送付した調査票は 900 票、返送があったのは 489 票、無効票は 21 票であった（山本・松宮 2011: 39）。

同調査の結果（山本・松宮 2011）から、男女比は 73.2％：25.2％で男性のほうが顕著に多いこと、被調査者の年齢層については 20 代後半から 30 代前半で全体の 25.6％を占め、年齢が雇用にあたっての重要な条件になっていること、学歴については高卒が 43.4％とその多くを占めることが明らかになっている。また来日のきっかけとしてはブラジルで派遣会社の募集に応じたものが 45.2％、家族・親族に誘われたためというものが 25.0％などとなっている。最初の来日年については、入管法改正直後に少し多い傾向がみられるほか、1993 年を除いて、1990 年代、2000 年代ともに 3 ～ 5％程度となっている。現住地の居住年数については 2009 年以降で約 2/3 を占めている（山本・松宮 , 2011）。今次調査で得られたデータには、以上のような特徴がある。

3.　日系南米人支援活動の「射程」

ここからは、実際に A 社調査のデータを用いて、日系南米人たちが不況にともなっておかれた厳しい状況と、その際に頼る先についての分析を進めていきたい。

図 2 は、2008 年不況後に生じた諸問題とその経験割合を示したものである。急激な不況を反映して、収入減少や仕事の減少を経験した人はそれぞれ 9 割弱、8 割弱となっている。また失業経験者も半数を超えており、大変深刻な状況であったことがうかがえる。こうした状況にともなって生活保護受給にいたった人は 3 割弱となっており、不況が生活に大きなインパクトを与えた様子がわかる。

その他住居の変更を経験した人が 4 割超、家族の帰国を経験した人が 3 割超あり、不況の影響で子どもが学校をやめた（多くは、授業料が高いブラジル人学校であろうと思われるが）ケースも 20 パーセント近くにのぼっている。このように、2008 年以降の不況による生活への打撃はさまざまな方面において大きなものであったことがわかる。

こうした厳しい状況下で、ブラジル人たちはどのような経路で助け合いのネットワークを広げたのであろうか。この点について、日本の生活で困ったことがあるときに頼る人に関する調査結果を見てみよう。

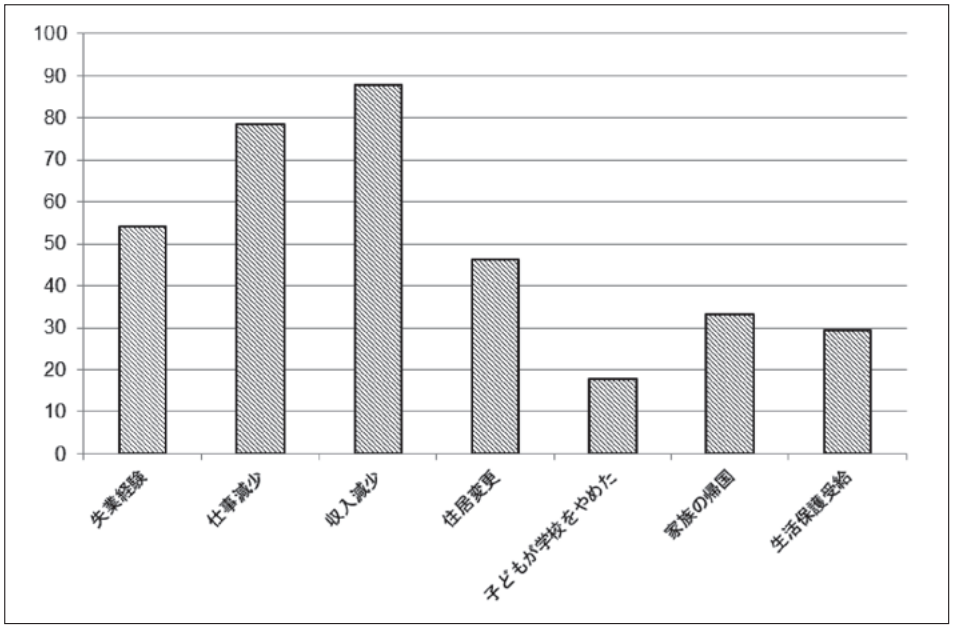


図２　経済不況後に生じた諸問題の割合　（縦軸：百分率）

下図３は困ったときに頼ることのできる先[3]の数を表したものである。図に明らかなように、困ったときに頼る先がない人は10パーセント以下である。またそうした先が一つ（68.5%）、もしくは二つ（15.3%）という人だけで８割強を占めることにも注意しておきたい。もしくは日本国内で頼る先が複数ある人は25パーセント以下であるという見方も可能である。

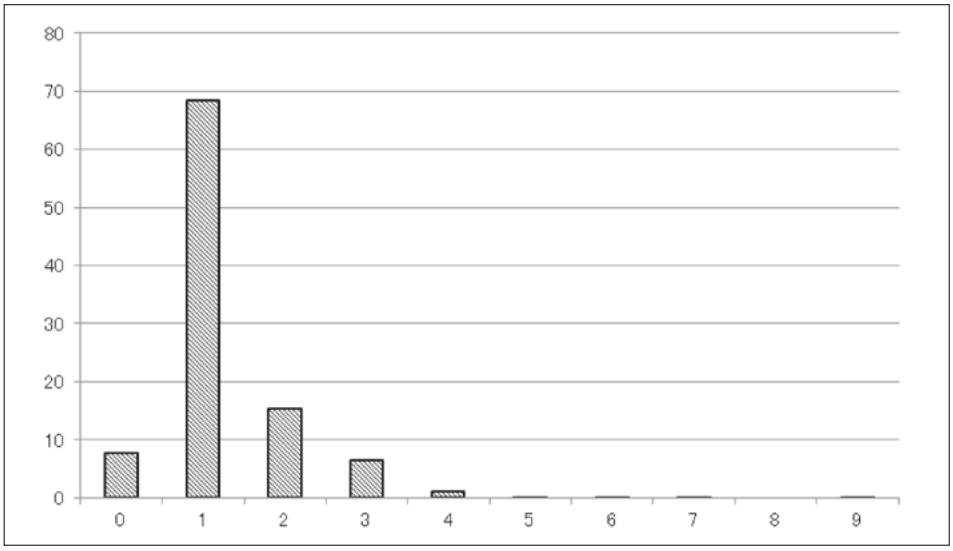


図３　困ったときに頼ることのできる先の数とそのパーセンテージ（全体）

それではこのような「頼れる人」がブラジル人社会と日本人社会にどれくらい分布していたのかを見てみることにしよう。

下の図４、５は困ったときに頼ることのできる先の数をブラジル人社会側、日本人社会側に分けて示したものである。ブラジル人社会側に頼ることのできる人がいると答えた人の割合は 75.3％あるのに対し、日本人社会側に頼ることのできる人がいると答えた人は 19.8％にとどまる。ブラジル人社会で複数頼る先を有する人々は 17.0％あるのに対し、日本人社会の側にそうした先を複数有する人はわずかに 3.5％でしかない。このように、日系ブラジル人が困ったときに頼る先にはブラジル人社会側と日本人社会の側に極端な非対称性があることをまずは押さえておきたい。

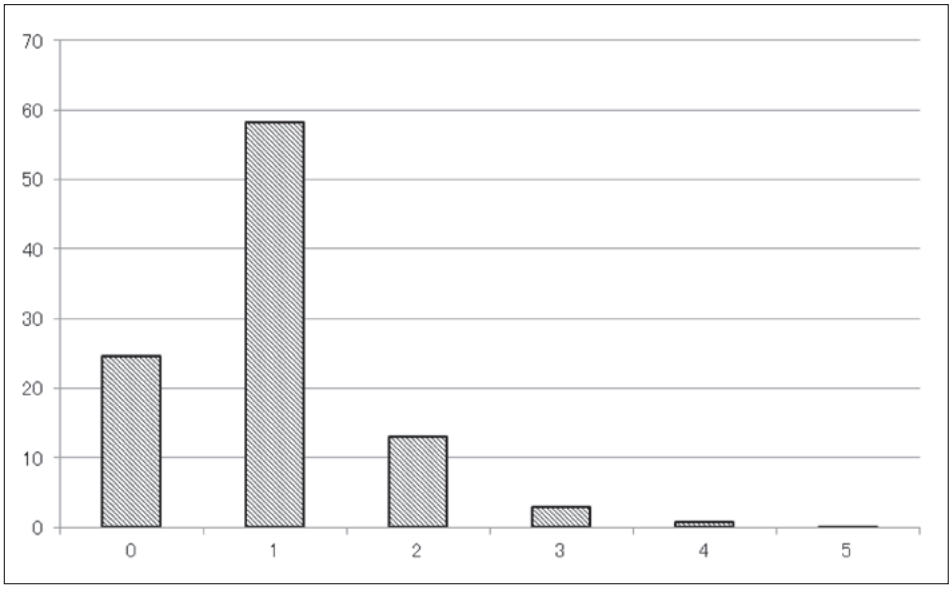


図４　困ったときに頼ることのできる先の数とそのパーセンテージ（ブラジル人社会）

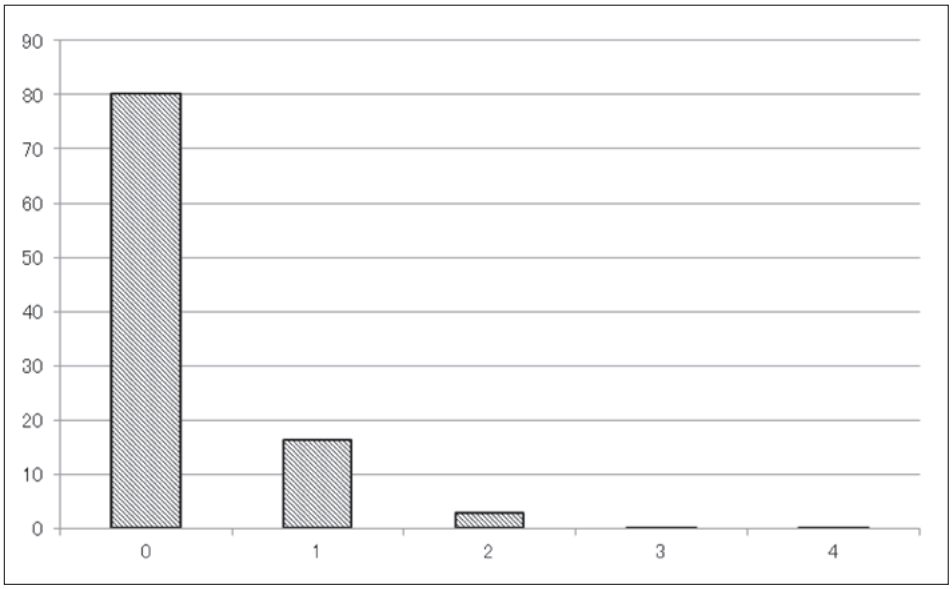


図５　困ったときに頼ることのできる先の数とそのパーセンテージ（日本人社会）

こうした困ったときに頼る先の内訳がどのようになっているか、もう少し詳細にみていこう。

表２　ブラジル人社会で頼りになる人

	日本にいる家族	ブラジルにいる家族	日本にいるブラジル人の友人	ブラジルにいるブラジル人の友人	ブラジル人が中心の宗教団体
頼りになる	179（36.6）	130（26.6）	125（25.6）	9（1.8）	33（6.7）
頼りになるとはいえない	310（63.4）	359（73.4）	364（74.4）	480（98.2）	456（93.3）

N=489　（　）内は百分率

上掲表２は、ブラジル人社会での頼り先とそれぞれの割合を表したものである。これを見ると頼る先として割合の多い順に、日本にいる家族、ブラジルにいる家族、日本にいる友人、宗教団体、ブラジルにいる友人となっており、社会的、空間的距離の近接性との相関があるように見える（社会的距離：家族→友人→宗教コミュニティ、空間的距離：日本国内→日本国外）。また、空間的に遠く隔たっていても、家族の紐帯が強いことは注目に値する。

表３　日本人社会で頼りになる人

	日本人の友人	日本人中心のボランティア団体	会社	日本の行政機関
頼りになる	15（3.1）	12（2.5）	20（4.1）	72（14.7）
頼りになるとはいえない	474（96.9）	477（97.5）	469（95.9）	417（85.3）

N=489　（　）内は百分率

上掲表３は日本人社会の頼り先とそれぞれの割合を表したものである。またこれは本稿での主要な被説明変数でもある。先に確認したように、日本人社会に頼る先を有する人は全体の 19.8％であるが、その中でもかなり多くの部分を行政機関が占めている。これは日本の日系ブラジル人各集住都市で、日常的な行政手続きや相談のためにポルトガル語の通訳をおく例がしばしばあり、こうした現状を反映したものである可能性があろう。また、会社に頼りになる人がいると答えた人は、5％に満たない。さらに会社と行政以外の人々で頼れる先を有すると答えた人は重複を除くと 4.9％であり、こちらも 5％に満たない。

この結果を見ると、これが不況期に入った後の現象かどうかは議論の余地があるが、日系南米人にとっては行政機関が日本人社会への入口になっている様子がうかがえる。これは不況とそれにともなう生活問題の出来によって、日本人社会の中では公共サービスの供給者である行政機関に信頼を置くブラジル人が多くなっていることを示唆するデータかもしれない。

また企業は、ブラジル人の生活時間に占める割合の大きさにもかかわらず、そこに頼れる人がいると答えた人は少なくなっている。ここに人材派遣業者に登録のうえ好条件を求めて職場を替える傾向の強さがあらわれているものと見ることもできるだろう。また、日本の友人やボランティアといった地域社会の人々については、そこに頼れる人がいると考えるブラジル人はかなり少ないことがわかる。

ともかくもこうした頼れる先が複合して、日本人社会からの支援活動の「射程」（今次調査では19.8％）が決まっているものと考えられるのである。

なお、日本人社会の側に頼れる先を有するこうした人々は、日本人社会の社会的ネットワークへの埋め込み（Granovetter, 1985）の度合いが比較的高い人と考えられる。それを裏打ちするように、こうした層（埋め込み度合いの高い層）は、日本への愛着も強い人が多いことがわかる（下掲図６）。

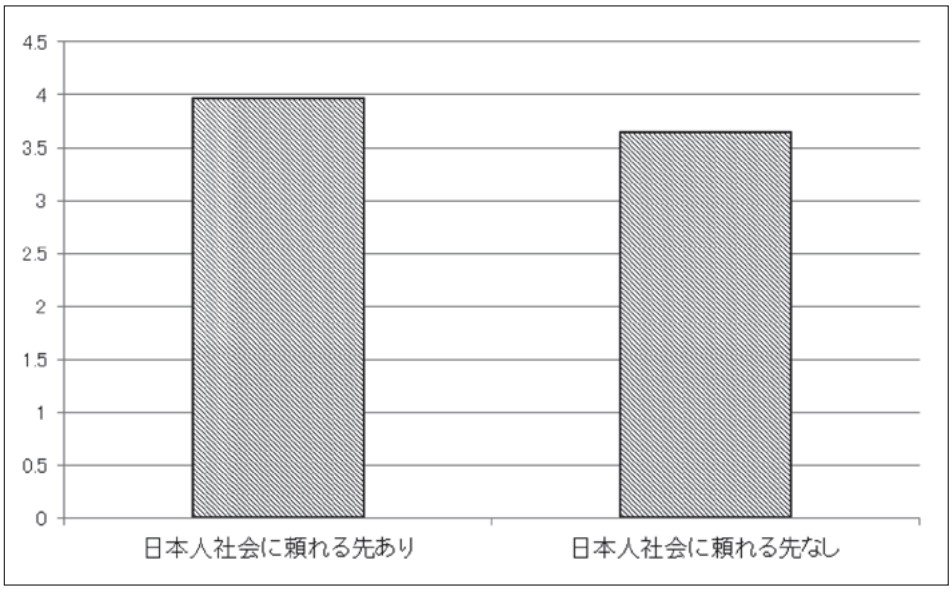


図６　日本社会への愛着（p<.05）

また、行政機関に頼れる人を有する人は、そうではないケースと比較したとき、同時に日本の友人やボランティアに「頼れる先」を有する場合が顕著に多いことにも目を配っておきたい（下掲表４）。

表４　「頼れる先」の重複状況（「友人およびボランティア」と「行政機関」

	日本人の友人やボランティアに頼れる人がいる	日本人の友人やボランティアに頼れる人がいない	合計度数
行政機関に頼れる人がいる	10（13.9）	62（86.1）	72（100.0）
行政機関に頼れる人がいない	14（3.4）	403（96.6）	417（100.0）
合計度数	24（4.9）	465（95.1）	489（100.0）

（　）内は百分率　　p<.01

ここからは、日本人社会に頼れる先を有する日系南米人にどのような特徴があるのかについて検討していきたい。

表５「頼れる先」の分布（ブラジル人社会と日本人社会）

	日本人社会に頼れる人がいる	日本人社会に頼れる人がいない	合計度数
ブラジル人社会に頼れる人がいる	42（11.4）	326（88.6）	368（100.0）
ブラジル人社会に頼れる人がいない	55（45.5）	66（54.5）	121（100.0）
合計度数	97（19.8）	392（80.2）	489（100.0）

（　）内は百分率　p<.001

上掲表５をみると、ブラジル人社会の側に頼れる人がいるという人は日本人社会の側に頼れる人をもたない傾向がある。すなわち、大まかにみれば、ブラジル人社会の頼れる人の有無と日本人社会の頼れる人の有無の間には負の相関関係があるのである。

また下の表６はブラジル人社会に頼れる人がいると答えた人数を分母とし、そのうち日本人社会に頼れる人がいると答えた人を分子として、それぞれのカテゴリー別に百分率を計算したものである[4]。

表６　カテゴリー別　日本人社会に頼れる人を有する割合

頼れる人：日本にいる家族	頼れる人：ブラジルにいる家族	頼れる人：日本にいるブラジル人の友人	頼れる人：ブラジル人の宗教団体
8.4%（15/179）	10.0%（13/130）	18.4%（23/125）	42.4%（14/33）

（　）内は実数

表６に明らかなように、ブラジル人社会側の頼れる人の社会的距離の遠近（家族＜友人＜宗教団体のメンバー）と日本人社会側に頼れる人を有する割合の間に関係が見られる（ブラジル人社会の中でも社会的距離が離れている層に頼れる人を有する人のほうが、日本人サイドに頼れる人を有するケースが多い）。ここから、日本人社会に頼れる人物を有する層というのは、社会的距離の離れた層に頼れる人々を有する層と重なっているのではないかという推測をすることも可能であろう。この点については、後に行なう多変量解析の結果を活用してさらに検討してみたい。

次に失業経験と日本人社会からの支援活動との関連を見てみたい。失業は様々な方面からの支援を必要とする状況である。これと日本人社会からの支援の有無との関連を見てみたい。表７は、失業経験の有無と日本人社会に頼れる人がいるかどうかについてのクロス集計である。両者の間にはかすかな関連があるようにも見える（クラメール係数は .081）。失業経験が日本人社会への志向性（特に支援活動に目が向くこと）を惹起しているかどうかについては、後に行なう多変量解析の結果を見て検討したい。

表７　失業経験と「頼れる先」の分布

	日本人社会に頼れる人がいる	日本人社会に頼れる人がいない	合計度数
2008 年秋以降失業経験あり	56（22.4）	194（77.6）	250（100.0）
2008 年秋以降失業経験なし	34（16.0）	179（84.0）	213（100.0）
合計度数	90（19.4）	373（80.6）	463（100.0）

（　）内は百分率　p<.1

最後に現在地への居住歴と日本人社会に頼れる人を有するかについて見ておきたい。というのは現住地への長期にわたる居住は、周囲のブラジル人社会との関係形成とともに一定程度の日本人社会との関係形成も惹起することが考えられるからである。

下掲図７は、現住自治体への継続居住月数平均を、日本側に頼れる人がいるかどうかで区分して示したものである。図に明らかなように、両者の間には３カ月程度の差があるが、その違いは大きくなく、統計的な有意性もない。ただこうした結果があらわれるのは、現住地に長期に居住することの効果が別の変数によって掩蔽され、効果が見えづらくなっているためということも考えられる。そのため多変量解析を通じて、他の変数をコントロールしつつ、現住地居住の効果を見極めていきたい。

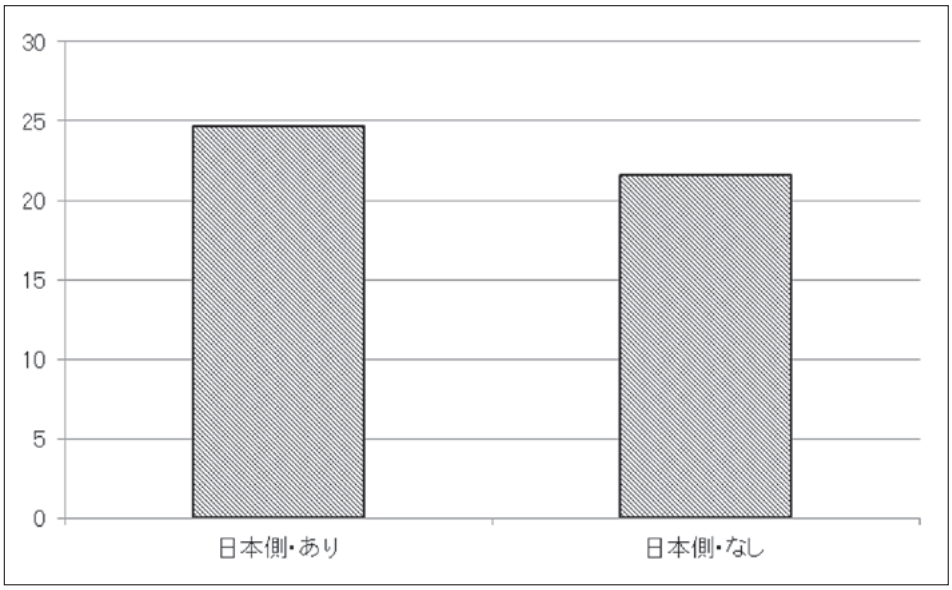


図７　現住地居住歴（月数）（日本側に頼れる人がいるかどうかで区分）

ここまで被説明変数（日本人社会に頼れる人がいるかどうか）と説明変数群（失業経験、現住地居住歴、頼れる先との社会的距離）について変数ごとの集計をもとに分析を行なってきた。ここで、各説明変数が被説明変数にそれぞれどのような影響を与えているかを明らかにするため、ロジスティック回帰分析を行なって、結果を検討してみたい。

被説明変数としては「日本人社会に頼れる人がいるかどうか」（日本人社会側に頼れる人がいる=1、それ以外=0）を用い、説明変数としては、統制変数として「基本社会的属性」（性別、年齢、学歴）、また居住期間の長さが日本人社会との相応に深い相互作用を励起するかどうかという観点から「居住月数」、日本語の能力があるほうが日本人社会との相互作用をするにあたってプラスにはたらく可能性があるため、「日本語能力」（読む能力）を分析に加えたい。

また、基本的な説明変数以外では、「2008年秋以降の失業経験」を用いたい。これは失業経験が日本社会からの分離をひきおこすのか、そうではないのかを検討するためである。また、ブラジル人社会で頼れる人の有無の結果（頼れる家族の有無、頼れる友人の有無、頼れる宗教団体の有無）を用いて、頼れる人との社会的距離の遠近が、日本人社会に頼れる人を有するかどうかとの関連があるかどうかを検討したい[5]。

表８　日本人社会で頼れる人の有無に関するロジスティック回帰分析（1）

	日本人社会で頼れる人の有無（会社含まず）		日本人社会で頼れる人の有無（会社含む）	
	B	Exp（B）	B	Exp（B）
性別（女性＝１、男性＝０）	-.873 *	.418	-.897 *	.408
年齢	.024	1.024	.024	1.024
学歴（高卒以上＝１、それ以外＝０）	.112	1.118	.229	1.258
居住歴（月数）	.007	1.007	.006	1.006
日本語能力（読むこと）	.019	1.019	-.006	.994
定数	-2.468		-2.303	
Nagelkerke R^2	.047		.050	

*: p<.05

表９　日本人社会で頼れる人の有無に関するロジスティック回帰分析（2）

	日本人社会で頼れる人の有無（会社含まず）		日本人社会で頼れる人の有無（会社含む）	
	B	Exp（B）	B	Exp（B）
性別（女性＝１、男性＝０）	-.693	.500	-.706	.493
年齢	.001	1.001	.002	1.002
学歴（高卒以上＝１、それ以外＝０）	.213	1.237	.382	1.466
居住歴（月数）	.015 **	1.016	.014 **	1.014
日本語能力（読むこと）	.155	1.167	.132	1.141
失業経験	1.076 **	2.933	.729 **	2.072
頼れる家族	-1.454 ***	.234	-1.609 ***	.200
頼れる友人（ブラジル人）	-.434	.648	-.356	.701
頼れる宗教団体	1.438 **	4.214	1.374 **	3.950
定数	-2.529		-2.163	
Nagelkerke R^2	.205		.203	

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05

表８は日本人社会に頼れる人がいるかどうかについて基本属性、居住歴、日本語能力によって分析を試みたものである。統計的に有意な変数は性別のみであり、（先にみた結果と同じく）居住歴は日本人社会に頼れる人がいるかどうかに影響を与えていない。また決定係数は .05 前後とかなり低く、現象の説明モデルとしては十分とは言えないことがわかる。

このモデルに失業の経験とブラジル人社会でも社会的距離に違いのある「頼れる人」の有無を投入したものが表９に示されたモデルである。まず、決定係数が .20 以上と相応に上昇し、モデルの説明力が増加したことを確認しておきたい。またこのモデルにおいては、表８のモデルとは異なり、日本人社会の側に頼れる人がいるかどうかについて、性別による顕著な傾向が見られなくなっている。代わって居住歴、失業経験、ブラジル人側の頼れる人（家族に頼れる人がいるときは負の影響、ブラジル人の宗教団体に頼れる人がいるときは正の影響）が見られる。失業経験を有する層、また居住期間の長い層は日本人側に頼れる人を有する傾向があることがうかがえる。また特に、頼れる人として家族の成員を挙げた層では、日本人社会に頼れる人を有する傾向が顕著に低くなっている。反対に頼れる人としてブラジル人の宗教団体を挙げた層では、同傾向は顕著に高くなっている。

以上のような要素が今次不況の間、日本に残る日系ブラジル人と日本人社会とのつながりの有無を社会的に規定していると当座考えられるのである。

4.　結び

ここまで、主として派遣会社に勤務する日系ブラジル人を中心に、日本社会側で頼れる人の有無について主に検討を行なってきた。また、とくに日本社会の側にそうした頼れる人がいるかどうかに注目して、日本社会の側からのサポートがどの範囲まで届いたのか、また届かなかったのかについて分析を行なってきた。

ここまで明らかになったのは次のような内容である。まず、日本社会の側に頼ることができる人の有無について、本稿での検討において説明力が見られなかったのは基本属性や日本語能力であった。また相応の説明力があったのは、現在地居住歴（正の影響）、失業経験（正の影響）、ブラジル人社会での頼れる人との社会的距離（社会的距離が比較的近い人に頼ることのできる層は負の影響、社会的距離が比較的遠い人に頼れる人がいる層では正の影響）である。居住歴と失業経験については、居住歴が長くなるにしたがって周囲の日本社会との関係が作られていくこと、また失業という生活上大きな問題、かつブラジル人ネットワーク内では必ずしも解決が容易でない問題を経験し、日本社会のサイドにつながりを持つことで個別解決をはかろうとしたであろうことの反映と理解することは可能であろうと思われる。そしてそうした層が不況時に日本に残っていると理解することも可能であろう。また、ブラジル人社会サイドの頼る先とその社会的距離との関係は、ブラジル人からみた日本社会が、ブラジル人ネットワークのさらに外側に広がっている状況を示すものであろうと考えられる。この現象は、近しい関係の内部で解決できる問題の場合は、より遠い関係の人々にその解決をゆだねることは少ない（理解しうる現象ではあるが）というようにも解釈可能であろう。また日本社会の側からのサポートが「届く」ことは、部分的には、当事者により近しい関係にある人が「頼れる」かどうかと関わりがあるということも推定しうる。

以上、日系南米人のうち、日本側に頼れる人がいる層、すなわち日本人社会側からの支援活動が一定程度届いている層がどれくらいあるのか、またそうした層にみられる特徴を検討してきた。言うまでもないことだが、この結果は、こうした日系南米人支援活動（特に行政以外の民間団体や個人の支援活動）を単に拡大し、支援活動の責任の多くをそうした層に押し付けることや日系ブラジ

ル人たちの自助努力のみに過剰な期待を寄せる立場を支持するものではない。また、政治や行政がカバーしていない範囲に自生的にこうした支援活動が叢生するのは例のないことではないが、こうした活動が有する効果を過大に見積もり、国レベル、地方レベルでの政策的対応の必要性を軽視することがあってはならないであろう。相互援助のネットワークは、社会問題に対する即効薬とまでは言えないのである（Portes, 1998: 22）。

今後、こうした支援に関して、支援に関わる人の間から問題状況を告発する声があがり、制度内への包摂を通じて問題の制度的解決がはかられるようになっていくこともありえるだろう。そうした方向性がどのようなプロセスを経て立ち現われてくるか、今後一層検討がなされなければならないであろう。

註

1 参考までに同時期の減少幅は岐阜県では 20,912 人→ 14,709 人（29.6％減少）、三重県では 21,338 人→ 16,651 人（22.0％減少）である（出典：外国人登録に関する愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室、岐阜県総合企画部国際課、三重県生活・文化部国際室資料）。

2 データについては、本稿第 2 節、調査の概要を参照のこと。

3 選択肢としては、日本にいる家族、ブラジルにいる家族、日本にいる友人、ブラジルにいる友人、日本人の友人、日本人が中心のボランティア団体、ブラジル人が中心の宗教団体、会社、日本の行政機関がある。

4 なお、「ブラジルにいる友人」のカテゴリーは選択者が非常に少なかった（総計 9 人のみ）ため、集計から除外してある。

5 なお、これらの説明変数群のうち相関がもっとも大きいのは性別と現住地居住歴であり、相関係数は 0.24 であるため、多重共線性の問題は生じにくいものと考えられる。

引用文献リスト

浅川和幸 2009「ブラジル人労働者の労働と社会関係――「顔の見えない定住化」の終焉とそのゆくえ」小内透（編著）『講座　トランスナショナルな移動と定住　在日ブラジル人の労働と生活』東京：御茶の水書房、53-89。

Granovetter, Mark, 1985, “Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness”, *AJS*, 91-3: 481-510.

樋口直人 2010「経済危機と在日ブラジル人　何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622、50-66。

松宮朝 2011「リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人(4)―A社ブラジル人調査から―」東海社会学会大会報告資料 於・中京大学。

Portes, Alejandro, 1998, “SOCIAL CAPITAL: Its Origins and Applications in Modern Sociology”, *Annual Review of Sociology*, 24:1-24.

都築くるみ 1995「地方産業都市とエスニシティ―愛知県豊田市 H 団地における日系ブラジル人と地域住民」松本康（編）『増殖するネットワーク』東京：勁草書房、235-281。

山口博史 2011「ニューカマー日系南米人支援活動に関する地域間比較枠組み形成に向けて」『東海社会学会年報』3、43-54。

Yamaguchi, Hiroshi, 近刊 , "South Americans in Japanese Industrial Cities", *Immigration at the National and Local Level in Japan: The Impact on Future Economic Growth and Community Relations in Japan and the United States*, University of California San Diego: School of International Relations and Pacific Studies.

山本かほり・松宮朝 2011「リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人労働者 ―A 社ブラジル人調査から―」『社会福祉研究』13、37-62。

The "Range" of Support for Japanese South Americans: The Situation of Brazilians under Economic Recession

Hiroshi Yamaguchi
(International Exchange and Cooperation Headquarters, Nagoya University)

This paper examines the "range" of support available to Japanese South Americans living in Japan. Based on quantitative data obtained from Brazilian workers employed by a temp agency, we investigated whether the respondents had anyone on which they could rely on the Japanese side. We then analyzed the characteristics of those lacking any means of support from the Japanese side. Our examination revealed that personal attributes (sex, age and educational background) and language ability have no significant effects on the ability to receive support from the Japanese side. We also found significant effects stemming from how long the respondents had lived in their present city, the experience of unemployment, the existence of family members on whom they could rely (a negative effect), and the existence of people in religious organizations on whom they could rely to receive support from the people of Japan.

Keywords: Japanese South Americans, support activities, economic recession, social distance, network

〈資料紹介〉

下山逸蒼資料について

粂井輝子（白百合女子大学・教授）

＜目　次＞

はじめに
1.　下山逸蒼略歴
2.　下山家所蔵資料
3.　一世パイオニア資料館
4.　盛岡市先人記念館

キーワード：在米日本人史、移民地文芸、自由律俳句、下山逸蒼

はじめに

「海外移住資料館所蔵文献資料の拡充と学術的活用の探求」プロジェクトでは、内外各地の資料館／図書館／博物館／文書館／および個人で、どのような移民資料が所蔵されているか、資料と所在の確認作業を行っている。

調査者は、1998 年以来、在米日本人による川柳、つづいて俳句、短歌へと範囲を広げつつ、関連資料の所在調査と関係者への面接聞き取り調査を行ってきた。各地図書館に所蔵されている「移民地文芸」関連資料の閲覧の他、アメリカ合衆国（以後アメリカと略記する）ワシントン州シアトル市の『北米時事』、カリフォルニア州サンフランシスコの『日米』、『新世界』、『北米朝日』、ロサンゼルス市の『羅府新報』の文芸欄を通覧した。そうした作業を通じて、1910 年代から 1930 年代の半ばまで、下山逸蒼という俳人の傑出した活動を知った。本稿は、下山逸蒼（本名英太郎 1887 ― 1935）資料に関する中間報告である。

1.　下山逸蒼略歴

下山逸蒼は 1879 年に旧盛岡藩士下山友一郎、リヨの長男として盛岡に生まれた。藩内では名家であったようであるが、父親が借金を残し早世して一家は没落し、母も去った。英太郎は高等小学校卒業後、給仕として県庁に勤務し、やがて測量技師となる。彼は俳句や川柳に親しんでいた。1902 年には自句をまとめ、「一艸［ｲｯｿｳ］集」と名付けている。とはいえ、軟弱な文学青年ではなく、旧士族の子弟として、柔道や剣道で体を鍛え、酒も好んだ。政治にも関心をもち、一志社という国粋的な結社にも所属していた。やがて先に渡米した友人から渡米資金を確保し、1903 年に渡米した。出発に際して、十年で帰国し、代議士になるといったという。渡米当初の家族宛の書簡には、借金を早く返し、事業もやりたいと夢が語られている [1]。

後年の弟への書簡では、アメリカを墳墓の地にするつもりで日本を去ったのだ、と繰り返していたが、弟への書簡を年代順に通覧した限りでは、正規の高等教育のない身では士族出身といえども出世も家の再興も覚束ないと考え、渡米したのであろう。しかし「金の生るアメリカ」でも、日本の家族の生活費と借金返済のための送金に追われ、事業を興す資本金はまったく貯まらず、「身を立て名をあげ」るまでは帰らないという当初の目的は果たせなかった。一方で、俳句で認められ、い

つしかアメリカに留まり、「一生を賭してアメリカの俳句の完成に力めやう」ことを正当化したのであろう[2]。

逸蒼はシアトル経由で10月19日サンフランシスコに上陸する。芝居小屋の掃除人、アスパラガス摘み、レモン摘み、皿洗い等々で、日銭を稼ぐ労働にあけくれた[3]。

こうした労働生活への不満から「例の余の道楽なる俳句」を始めた。逸蒼は、1906年末までには「レモン会」と称する「所謂日本新派の俳人」グループに加わったが、英語学習の妨げになるという理由で翌年1月にはやめている[4]。このころは、英語を身につけ、有利な職について、事業資金を早く貯めたいと思っていたのである。

しかし夜学校は閉校となり、英語学習もままならなかった。しかも送金し続ければ「何時までも資本が出来ぬのだ何時までも帰朝されぬのだ即ち進退これにキワまる」悪循環に陥り、「成功」が「『金を持つ』との代名詞であるならば余の現在はムロン不成功の極みに居る」のであった[5]。

極端な節約と肉体労働の生活と送金に追われる日々のストレスから、逸蒼は1910年ころから再び、本格的に、現地の邦字新聞に俳句を投稿するようになった[6]。1911年には荻原井泉水の自由律俳句『層雲』にも参加し、1912年ころまでには、移民地の俳句で大成したいと考えるようになっていた[7]。カリフォルニア州では、ロサンゼルス近郊のアップランドで、1913年に直原敏平（1869―1929）らと紙燭会を結成し、翌年改名したレモン詩社でも指導的立場にたった[8]。しかし1916年にはここを去り、各地を転々とする。

逸蒼は1920年7月8日、農作業中に突然倒れ、入院手術を受ける。悪性骨髄炎で、左大腿骨を付け根で脱臼した。一時は左足切断を宣告されたが、サンフランシスコ救世軍療養所での治療の結果、病状は小康を保ち、松葉杖で、やがては杖なしで歩行ができるまでに回復した。『新世界』の校正係の職を得、句作と読書という願ってもない生活を送ることができるようになる。

逸蒼は、この病でキリスト教への信仰を深め、病によって他人のうかがい知れない句材が与えられ、湧き出るように俳句が生まれるようになったと考え、病は神からの恵みであると見なした[9]。

やがて再び病状が悪化し、松葉杖でも歩行困難になった。友人たちの好意で友人宅に寄寓し、電気療法や温泉療法も行い、一時は回復の兆しをみせたのであるが、1935年1月6日、サンフランシスコ郡病院で死去した。

逸蒼は、『逸蒼句稿』（1914年）、『下山英太郎句集』（1917年）、『句集　砂漠の旅より』（1922年）、『霧笛』（1925年）、『第五句集海へだて[10]』（1935年）を遺している。これらは逸蒼の自選句集ではあるが、死後出版された『第五句集海へだて』でも収録されているのは1927年までで終わっている。晩年の句を知るには、逸蒼が投句した新聞雑誌、同人誌を閲覧し、そこから採録しなければならない。実際、調査者が通覧した『新世界』、『日米』だけでも、おびただしい数が掲載されている。しかも、逸蒼は『羅府朝日』、『新世界』、『日米』などの日本語新聞の他に、『層雲』、『射手』などの日本の雑誌にも投句している。さらに浦部礼介、糸岡流三、放浪児、沙上幻吉など20あまりの変名を使って、「口語歌」や「短歌」なども発表したという。彼の遺した作品をすべて採録するのは現在では不可能であろう。

2.　下山家所蔵資料

逸蒼がアメリカの生活や風習を知らせるために送った絵はがき、写真、新聞切り抜き（『羅府朝日新聞』の「朝日文芸」欄）[11] の他に、祖母宛の書簡、弟四郎宛、四郎の妻ツエ宛の書簡が年度別に保管されている。

1903 年から 1926 年までの封書には通し番号（1 ～ 138）と内容メモがポストイットで付され、さらに別紙に書簡概要一覧がある[12]。この他に昭和期の書簡が 45 通ある。弟四郎宛封書には、ときには祖母宛、義妹宛の書簡が同封されていたり、送金為替や写真や押し花などが同封されている場合もある。

初期の手紙には、滞在する土地の様子が報じられ、送金為替が封入されている場合には、その使途が指示されている。弟には、借金返済のために、湯屋には行かず、禁酒禁煙を実行し、節約に節約を重ねている苦心が語られているが、祖母にはそうした生活難が記されることは少ない。弟宛には、先祖の逸話（家系への誇り）や岩手県人の消息の他、兄としての生活上の助言が記されている。ときには、誤字脱字の注意、英字の書き方指導を、そして弟に子供が生まれると、アメリカ式子育ても、事細かに書き送っており、逸蒼の教育熱心さと、几帳面な性格が伝わってくる。

発病後の書簡では、病状と痛みが詳細に綴られている。病苦を綴った後には必ず、この病気によって、肉体労働から解放され、かつ新たな句材が得られて、精神的にはかえって恵まれた環境となり、生活面でも何ら問題ないことが強調されている。遠い異郷の兄を心配する弟への配慮であろう。

このような個人的な内容の他に、日本の政治及び政治家への言及（批判）、日米の国民性比較、サンフランシスコ学童隔離問題や排日移民法への論評、俳句論もある。さらには読んだ本の感想も記されており、逸蒼の博学ぶりと関心の広さが伝わってくる。

手紙は、丁寧に記されたものもあるが、ほとんどは、一気に書かれたもので、加筆削除箇所も点在する。判読が困難な場合もあるが、ほとんどは無理なく読める。

資料（一）は、逸蒼が祖母に読み聞かせるようにと、弟へ書き送ったサンフランシスコ案内である。

3.　一世パイオニア資料館

一世パイオニア資料館（36001 Hood Canal Dr., N.E., Hansville, WA 98340）は、アメリカ合衆国初の日系資料館として、竹村義明師（浄土真宗本願寺派開教使）の手で、1976 年 11 月にカリフォルニア州サリナスに創設された。その後、師の転勤に伴い、1995 年 10 月に一時閉鎖されたが、2004 年 10 月に現在の地で再開された。資料館にはワシントン州シアトルから、フェリーでベインブリッジに渡るか、シアトルからエドモンズまで行き、そこからフェリーでキングストンに渡る。ベインブリッジからは車で 40 分、キングストンからは 20 分かかる。白頭鷲もときに飛来する鬱蒼たる林の中の資料館である。

資料館には、パスポートや柳行李から、「支那賭博」の馬鹿票、強制収容所で「密かに」使われた短波ラジオ等々、一世や二世に関わる生活物資が所狭しと置かれている。さらに、米国西北部連絡日本人会編纂の日本語教科書、加州教育局検定の日本語読本をはじめ、一世の遺した著作も数多く展示され、手にして見ることができる。

下山逸蒼に関しては、死去する当日までの 1935 年の日記と、蔵書の一部が所蔵されている。これらは下山逸蒼の晩年を世話した湖畔社の波多泰巌の関係から入手したという[13]。蔵書は確認された[14]もので 60 冊、野口米次郎ブックレットが 7 冊、ノーベル文学賞作品レイモントの四季シリーズ四冊、宗教関係書 6 冊、外国人詩集 6 冊、日本人の詩集俳句短歌関係書 11 冊、ドストエフスキー作品 9 冊、日本作家小説 5 冊、外国文芸 3 冊、現代社会関係 7 冊、その他 1 冊である。逸蒼の印とともに、「更生会」の印が捺されており、泰巌の主宰した組織が所蔵していたと考えられるが、定かではない。

資料（二）はそうした書籍の後ろの見返し部分に記された逸蒼の言葉と俳句の一部である。

4. 盛岡市先人記念館

岩手県盛岡市にある盛岡市先人記念館（岩手県盛岡市本宮字蛇屋敷 2-2）には、遺族から逸蒼関連資料 81 点が寄贈されている。前述の句集とその句稿をはじめ、原稿、弟下山四郎宛書簡、写真や肖像画などがある。

写真では、「紙燭会」同人武石天郊追悼句会の写真（1913 年 8 月 23 日）、レモン詩社句会写真（1915 年 11 月 14 日及び 1916 年 6 月 11 日）が注目される。上記の写真の裏面から同人の氏名職業などの情報が得られる。

書簡のなかで注目されるのは、祖母（実際には伯母）の死去の報に接した逸蒼が、祖母への想いとキリスト教信仰に基づく死生観を述べている 1924 年 3 月 17 日付書簡がある。また封書に、おそらくは弟四郎の手で「最後の手紙」と書かれた 1934 年 10 月 21 日付書簡も見逃せない。資料（三）のように、北米朝日新聞社での生活の様子や悪化する体調について記され、第五句集「海へだて」出版にむけての注意事項が細かく指示されている。

本稿では、最後の手紙を紹介する［資料（三）］。

資料（一）

「御祖母様へよんで聞かせ申すべく朋友間の話しのたねにも

〇今日は朝から靄がかかつて雨模様の為め仕事も休みときまり少しの閑を得たから余の之迄見聞し来つた桑港話をしやう但し一々委しく書いたら仲々煩わしい事ゆゑほんの一口話に縮める其中で万一委しくきき度い事があつたら質問し来つても宜いソレは閑を見つけて後から知らせやう

〇桑港で一番にぎやかな処はマーケツト、ストリートでソコの建物中最も目立つのはコール新聞社の十七階で其頂上にはコーヒ店があるそうだココへ登つて四方を眺めコーヒー一杯やつたら直ぐ五十仙をとられるとの事此建物は石造だが其外廓へくつついた塵芥を掃除するには恰も日本の「火起シ」の様に空気の力をかりき［ママ］吹く器械を用ゐてフーフーフー其器械を上下させつつ塵芥を落とし元の白色を保たしむるのである桑港の市廳（セテホール）ハリスホテルなど現今の建物中最も偉大壮観なものである

〇人の散歩や見物に恰好の所は金門公園（ゴールデンゲートパーク）とクリーハウス（崖の家といふ意）で公園は町から一里も距れた所にあり（カーで行けば四十分計りかかる）中々広大なものでここへ入って行くと丸で深山大沢の裡に踏み込むの思あり実に塵俗界中の仙境である此中には山あり林あり湖あり芝生あり馬車道あり音楽堂動物館植物園運動場遊戯場茶店（日本造りにて日本人の有す所）あり山上には望楼あり一眸の中暮頃の海を望むべき碁布櫛比の市街を瞰下するを得べし林には諸国の樹木鬱蒼として繁茂し湖水には軽船の浮かぶあり水禽群をなし其間を遊泳す日曜に当り人の群衆する日には此湖水へ一大人造瀑布を懸下せしむる故これは二里もある山渓より水を引き来るもので仲々費用もかかるものだ相だが頗る壮観であるとの事又日曜には音楽堂に楽隊の合奏あり聴者は地上に設けある無数の椅子（小学校生徒の授業を受くる如し）に腰をかけてキクなり動物園などの装置は仲々東京の上野あたりの比でなく丸で天然の山中に放し置くと同様の大規模である運動場には「ベースボール」「テニス」「体操」何でも勝手次第壮年の男女打交つて盛んにやつて居る遊戯場には小供の乗る蒸気仕掛の木馬の競走場があるこれも丸で「廻り燈籠」の人や犬の影が廻る様な木馬にのつた人が走り廻るのである其上に揺籠の如き「ブランコ」もあり馬は走り籠は走りユレて廻るなり（コレに似たのはタシか先頃の大阪博覧会に出たときく）ソレから五ツ六ツ位の小供がのる山羊の馬が居る否山羊を馬の如く仕立てて小供をのせ小さき馬場をめぐるなり実に可愛らし此位の年から乗馬の習慣つくる

故誰も皆上手なり（田舎へ来る学校の生徒の往復は自転車か乗馬か馬車である女の十二三の子供が馬車の御者をして平気であるくなりクリーハウスは公園の地続きで大なる花等の園庭あり海を瞰下すべき山其他海水の大浴場あり浴場家屋の後ろに当る海中の巨岩には数多のオットセーが群棲して仲々の奇観であるこれは法律で厳重に取締り無論商売するものでないココにある海水浴には何れの国人でも金さえ出せば自由に這入ることが出来るが独り日本人に限り禁じられてあるソレも何故かといふに今より数年前一人の日本人が同浴中の白皙婦人の足を引倒したとやらに原因する由実に馬鹿馬鹿しき話であるこんな奴がある故何につけ日本人全体が下等人類視され不利益に廻るのである

〇当地には種々の人間あり殆んど世界各国人の展覧場といふ有様であるが其中で白人の中等以上の者の服装は実にキレイサツパリしたもので服の形は平生当り前の背広であるが其ガラは近頃ポツポツ縞物が流行して来たが兎に角仕立ては日本と違ひチヨツキの胸のアキは極めて狭く上着の襟の折れも馬鹿に広い様なものがないズボンは細過ぎる程ホソい帽子は多く黒の中折れで高帽は重に中年以上の人に多い様であるイヅレモ又「ツバ」の極めてセマイもので日本で冠って居る様な「ツバ」の広いものは一つもない「ツバ」の広い帽子の「ツバ」を下の方へ下げて冠つたら「ハハアーバクチウチだな」と人に思はるるのである時計は多分ヒモもクサリもつけず無論皮へくるんだり「サツク」へ入れるなどいふことなくコロリとポツケツトの中に入れて居る金入れは多分ズボンの「ポツケツト」に入れて置く顎の「カラ」は今多ク「Wカラ」を用ゐ「ネクタイ」は小形のものを用ひ此地の男子は「フンドシ」を用ゐず日本のサルマタは婦人用と限られてあり髪の五分刈りは懲役ばかり誰でも男は五六才の小供の頃より髪をワケてキレイに櫛けづつて居り小児も大人も鏡と櫛はポツケツトを離さない髪の刈り様は一寸日本と違ふ即ち耳のワキのモミアゲがずんと短かく後ろ頸の所は多く円形に即ちカラに当らぬ位に剃ってある髯は一日置き位には必ず剃る乞食でもサツパリとしたものである但し労働者がカセグ時の風は又日本以上のキタないナリでやつて居るなり

〇学校の生徒が書物を持つてあるくにはカバンも風呂敷（勿論これは禁物）も用ゐず単に皮のヒモ（ストラツプ）で縛つて持ち女の児などは小形の竹行李に入れてやはり「ストラツプ」で縛って持ち歩行くなり

〇買物は勿論（新聞書籍などの外）何んでも紙に包んで持つて歩くなり（其の品物を外面に露出せぬ様）風呂敷は支那人のみに限り他は誰も用ふる者なしカバントランク等は皆皮製品にてズツクや其の他織物などの品を用ふる者なし日本の竹行李よく流行すリツパな婦人でも平気でブラサゲてアルクなり

〇人と人と御ジギに男子同士ナラバ帽子を脱することなし（帽子を脱するは単に婦人に対してのみなり）単に黙礼に止りチヨツト頸を動かす位のものなり朝は「グツドモーニング」とか「ハロー」とかいふものもある。日本流に帽を脱し腰をかがめしオジギをしたものならソレコソ大笑ひなり握手の礼は親しきもの同士の間に限る

〇高い階上に登るにはエレビター（昇降機）で瞬く間にズンズン昇降往来するのだ

〇桑港で一番街上を歩行て目に立つのは「チンバ」「一本足」の多いのであるこれは器械工場や鉄屋などでの怪我人といふ事だ

〇巡査は体格のヨイ者のみ撰んで採用すこれは四ツ角や人通りのある所にブラブラして居る（交番所などなし）服装は黒の長いコートで金スジと金ボタン仕立である頭には黒のナポレオン形の帽を冠り胸に大きな銀の徴章を下げ手に一尺五寸計りの樫で黒塗りの棍棒に房の下ツタやつを持つて居る此巡査殿はアキレタ奴らで酒屋へ這つてはロハで酒をのみ菓子屋へいってはロハで摘み食ひをするコレは当り前のコトとなつて居るいつでも口の中でモグモグ何かカヂリ乍ら立つて居る賄賂を握ませれば盗賊人殺しでも逃がして金でタノマルレバ無罪者も拘引するといふ厄介な奴深夜酒に酔っ

て来た日本人の鼻先にピストルを向けてポツケツトから金を奪ったという奴いやはや話しにならぬ代物であるソレにくらべると日本の巡査の清廉忠実どんなに尊いか知れない所が此巡査仲々平民的で消防組のやつた芝居に出て巡査の役をやつたり何かする吾等も道で逢つた時向ふから「ハロー、チャーレ」などといはれた事がある

○ソレから国体が違ひ社会の組織が異つてるからだけれど兵士の馬鹿げたのには驚く外ないドダイ兵士は志願してなるのだがどんな者が志願するといへば無職業労働キラヒのナマケモノや貧乏人無学の奴共で其初めは服代の外一ヶ月十五弗もらひ三四ヶ月立てば二十五弗位貰へる帽子を恰も最流行る様なツバの広い中折れ帽で帽も服も茶色で服の腕には金の筋がある平生町をアルクには剱も何もつけず「アメ」をかぢり菓子を喰ひつつ歩行く事や女と手を引いて歩行くるナドはあたり前である隊を組んで歩行く時でも二階の人と話しなどして居る道で長官に逢つても敬礼せずそれでもあたり前で通つて居るイザ戦争となつた時はドンドン逃亡する奴が多い相だがこれも御カマヒ無しで日本の様に銃殺に処すのなんといふ事がない町を酔つて歩行て巡査に横面をグワンと喰はせられヒヨロヒヨロして居る奴などは往々ある米国の人間は日本の兵士は日給イクラ貰ふとキカレタ時タダであると答へたら馬鹿な話しだと笑はるるのである兵士の規律も威厳も何もない国である

○コツチの奴等は街路を物喰ひ乍ら歩行のは平気である男も女も老も弱も但しヅツと上等社会の人となつたら別段であろう

○女尊男卑の国丈け女のイヤに尊大なのはシヤクに触る或日町を二人の女がスマシて歩行いて来たが或る八百屋の前へ来ると一寸内を瞥見して人の居らぬを見スマスや否や篭に入つてあつた唐辛をチヨイと一ツマみとつて知らん顔で行過ぎるのを見た事がある後で人に話したらソンなのはアタリ前だといつて居たツマリ人の知らぬ処ではどんな悪い事をしても人の見て居る前では大きな面して澄して居るといふのはコツチの奴等一般の特色である其様であるから公園の草花一本ムシラないといふ様な公徳に関した事は小供の時分から随分厳重に教へられて居るため其点丈はたしかに日本より優つて居るのである

○乞食は一本足とか盲目のものが人通りの多き処に出てくる楽器を鳴らすとか蓄音機をネジる或はタバコ鉛筆の様なものを出して張つて居るので決して人の門に立つものなし通行人中幾許少くくれる者でも五仙白銅より下のものはないからヨク貰ふ奴は一日弐拾弗もとれる相であるソウなるとゴロゴロ金のつくる迄を飲んだり喰つたり遊びくらして又元の木阿弥となりここに再び乞食するとの事である

○街路は中央の幅広き所は車馬両側は人道で（車馬道は一面にレンガか煉瓦大の石を敷きつめ其間に電車の軌条が通つてある人道はセメントの叩きである電車は街の至る処に達して居るから自転車などで歩行ものは極めて稀で且つ危険である自動車（石炭油を燃す）丈けはポチポチ流行出しすさまじい勢力でかけてあるく

○此地では「ルーム貸し」といつて室丈け貸す家が多い宿屋といふのは室を貸す外一飯イクラで洋食なり日本食なりを喰はして置く「ルーム」丈け借りて居ればやすいのは一週間一弗より一弗二十五仙位から一ヶ月となれば四弗位で（教会へ泊れば一ヶ月三弗）不自由なく生きて行かれる気楽なものだ

○食事は「レストランド」即ち割烹店に行って喰ふのだ「レストランド」は一食十仙の店十二仙の店等（其上もあるが）あるが通常十仙ので十分である朝の食事は五仙位でスマス事が出来る日本人食は皆十仙で一飯が食はれるだらふ一日労働して金とれば三日位ゴロゴロ寝て居ても喰はれるワケそれ故ナマケ者共がイイ事にして油をウツて居るのである

○湯屋は皆一人一人部屋を異にしてあり其浴室には陶器で船形の湯槽に湯と水の出るネジがありシ

ヤボンとブラツシ櫛鏡手拭二本（一本は湯に入れて用ひ一本はアガル時フクに用ふ）顔洗器等チヤンと備つて居る白人の湯屋は一浴二十五仙日本人店は十五仙である
〇床屋は日本人の処で髪かつた計りで二十五仙で髭剃れば四十仙なりソレ故（ヒゲは十五仙）髭は多分自分で剃り髪丈カル有様である白人の床屋は三弗の所もあるよしそれらになると客の着て行つた「ホワイトシヤーツ」を一寸ぬがし髪刈る間に洗濯して（蒸機で）乾かしチヤンと新しくして着せて帰すとの事仲々便利なものである
〇此地の人が嗜む菓子類の内キヤンデー（飴類のやうなもの）はドーモ日本人の口にあはぬドレ食つても香水臭いかシヤボン臭いの計り此地の人間は何でも香の劇しいものを好むのである
〇一番好ましいのは菓物である「アツプル」（林檎）「バナナ」（芭蕉）「オレンジ」（みかん）などやすくてうまし
〇此地の売物の値の極め様が実に面白いソレは五仙十仙二十五仙五十仙といふ様に簡単に出来て居る（たとへは「マツチ」の様なコマカシイものなど五仙にイクラとか十仙にいくらとかいふ様である日本の様に何十何銭何リとクダクダしい相場がない
〇衛生上は何処へ歩行いても便所といふものは一つもないそれは男なれば酒屋女なれば菓子店へ入り一寸一杯のむとか五銭代も買ふとかして其家の便所へするのである（只だとてコトワル事もないだろうが）
〇便所は実にヨク出来て居るもので（陶器製）チョイと小便するには蓋をあげてやり大便の時は蓋をさげて腰をかけて（其蓋にシリの当る丈け穴がクツてある）やらかしスンだなら其前面の上から下つて居る「鎖り」を引けば直ぐに水が送り出でて糞なり尿なりを流し去りイイ加減の時ヒトリで水の迸しるのが止むシカケであるソレ故臭い事もキタナイ事もない（コレは人の家では多く湯殿と同じ室にツケて置くなり）流れたものはドンドン鉄管を迸つて市街排水渠の中（地中の墜道）に落ち終には海中の中へ流れ込むのである
〇それから飲料水も電燈瓦斯燈と同じ様に月何程と金を払ひ毎戸に家へ引いてあり「流し前」「室内の洗面所」「湯殿」何処からでもネジをヒネり次第ドンドン出来てくる井戸などは製造所か何か特別に設けてある所の外は決してない皆此一つ水道の水を用ふるのである
〇日本人に於て柔術の様なものは俗に「メリケン」といふ体を斜めにかまへ両脇の拳を固めて顔胸等を突くのがあるこれは仲々盛んで時々新聞に其形容やら各人の肖像などが書いて出る是れは何でも早く突くといふ一方である但し腰の下及背後からはつかぬといふのは規則なそうだイザ喧嘩となるとこれをやらかすので若し相手の一人がコロベば其立ち上がるを待つて居て又はしめる其間大勢とりまへて見物して居る一人は到底いかぬと降参すれば助け起して塵でも払つてやり互に握手（セキハンといふ）して別るるか酒屋へ這入つて一杯仲直りの酒をくみかわして別るるとの事直ぐ仲よくなつて親しく話し君のはヒドク眼の上へ来たとかイヤ君の一撃は閉口したとか互に讃合つて居るさうだ
〇烟草はどんなものをのんで居るかといつたらマアよいくらしものや奢る方の人は一本二十五仙もする（それ以上あれど）シガー即ち葉巻を吸ひそれ以下一本十仙一本五仙といふのを吸ふそれから多くは長二寸五ト巾一寸五ト厚八分位な木綿袋へ這入った一袋十仙か五仙の烟草を茶色のペーパーに捲いてのむこれをのむのは一番多い木製の柄杓大なるパイプでのむのは下等な方の人間に多く土方職工などか仕事の間もプカプカふかし又は馬車の御者等がよくやつて居る烟草は日本のものより何れも無論上等のよし成年以下のものには烟草を売らぬ規則だが日本の生意気小供や何と同じ事でチョイチョイ隠してのんでる奴が多い何れも烟草の嗜好は甚だしい女は決して吸はぬ（但し家に居て人の見ぬ時は吸ふものもあるとやら）婦人の前ではのまぬ礼儀である

〇此地の人間は日本人の様に互に来復して時々酒をのみ或は料理屋へ這入るといふ様なことは無論ユツクリ長々とのんで居るものはない久し振りの友人に出会するとか親しき人に遇ふて先づ一杯といふ場合には直ぐに相携へて酒屋へ入り各々ホンの一杯のビヤを引かけて出て来る一人で二杯以上のむことがない到つて簡短なものである中にはウエスキーやブランなどでグテングテンに酔払て歩行とか道路へ仆れて居る奴があるがそれ等は巡査に捕まるが最後直ぐ拘留されて罰金を仰付らるるのである

〇此地には烏といふものは一匹も居らぬ元は居つたとの事だが何でも一羽五十弗づつの賞金で恰も日本のペストなどに対する鼠の様にかり尽された相だダカラ可笑い事にはマーケツトの或商店の店頭には二三羽の烏を籠の中に養つて於いて人の足をとどめて居る

〇悪漢悪童等が新来の日本人と見ると何か投けつけたり悪口したり偶にはナイフ等をひらめかしてオドカスものもあるがこんなものにはからかはぬが第一で場合によつたら却つてアベコベに怒鳴つて威勢を示すとか不利と見たら逃げるが第一である彼等は実の所臆病者が多いのである

〇此地の奴等が日本人へ対しての悪口の多くは必ず「ヂヤツプ助兵エ」といふスケベといふ事は何時聞いたものやらドノ奴もよくいふのである

〇日本人仲間にて白人の事を話すには皆いづれも「毛唐」といふ「あのケトウがコーしたあゝいつた」是れ平常のコトバツカいである

〇此地の人間は医者にかかつて歯でも抜かれる時は其痛をこらへかね血気壮んの男でも声を発して泣く相だ又婦人が産をする時も同様号泣する相だ

〇郵便の配達はあたり前にやるが人の都合により或は居所のしばしば移り易い者などは郵便局より一ヶ月幾何で函を買ふて置くたとへば某バツクスの 92 なら 92 を買って置けば其 92 として来た郵便物はすべて其局の中にある 92 のバツクスに入れて置くのでソレを其 92 の買主が日本人なれば日本より船のハイツタ時を見計ふとか他より郵便が来て居やうと思ふ頃自由に局にいつてバツクスをあけ受取り帰るのだ

〇此地の人は毎月曜より土曜日迄労働なり商売なりをして（毎土曜日に家内をヨク掃除するなり）日曜日となると店は晩に締めた侭開けず家内打連れて朝から公園へ出掛けるとか芝居へ行くとか思ひ思ひに遊びに出かけ決して商売などをせぬ（正午まで売る所もあるが少ない日本人のミセは定りなし）労働者等も業を休んで充分朝寝をなし髯を剃り新らしき「カラ」をかけ靴をみがき小サツパリした服を着て酒をのむとか遊びに歩行くとか思ひ思ひに楽しむのであるこれは実によき風習なりと思ふこんな風だから日曜の朝といつたら桑港の街上実に静かなもので馬車もあるかずカー（電車）も少なく工場の響き少なく石炭の烟なく実に別世界の様な感がする（白人は店を市街に持って居て自分の家より毎日通ふのだ夜はガラスの窓戸をしめカギをかけたまま帰つて行くイツも外から店の中が見れて居るなり

〇学校は無月謝の上書籍器具のはてまで皆揃へて学問をするのだ是は日本の今日では実行されぬ事だろうがドーカこんな組織が出来る様に早く国家民人［ママ］の実力を発達させたいものである

〇コツチの人間は湯に入ることが極く少ないが其かわり皆毎晩寝に就く前必ず手足身体を洗ひ拭ひ清潔にして眠りそれから衣服等は時々洗濯しシヤツの如きは毎日か二日置位に洗つたものと着換える故自然湯に入る数を減じてもヨイ訳になつて居るのである

〇街上の人道へタンパツバキをした所を巡査に見付つたら罰金である是れ丈は日本人などは決してやらぬがコツチの奴等は「カミ烟草」の真赤なタンパツバキをゴテゴテやつてる奴が時々ある但しこれは巡査の来らぬ時である又ズボンのボタンのはづれて居たのを見付かると五弗の罰金である

〇芝居は我等の眼から見てはドーも面白くなく殆んど馬鹿気た七軒町の道化じみた様なのが多いが

ただ感服なのは舞台書き割りの奇麗にして巧みに電燈の光線を利用して実物実景ソノままの様に映出さしむるのである（中にはローマ時代の芝居をやり十六頭の生きた馬が舞台の上で競争する様な外題もある）芝居の衣服などと来たら本当につまらぬ三文代計りのものばかりであるがソレを着て舞台に出ると金剛石入れの錦繡かと思ふ程よく見ゆ又見物人は一人一個の椅子を買ひ腰かけて居て見るのだから見物の席に入れば男も女も皆帽子を脱し静粛になって見物す感服した時は盛んに拍手がするのみで［~~するのみで~~と赤で削除線が引かれているが文章の意味から入れた］決してどんな時でも一語も発せぬヘタなものへでも決して悪言を放つなどの事がないたまに拍手中靴で床板を鳴したり口笛吹いたりする奴あれどこれらはホンに下等な連中で且つメツタに無い事である実に一般に心掛けよきものであるもし酒に酔って声でも出したりする奴あれば直ちに巡査に引摺り出されるのだ芝居の中で売るものは酒と菓子で見物の方から行って買ふのであるヨキ俳優ニハナを出すには真の花で額面の様に美しく飾ったものに同じく花で人の名前を顕してこれを与ふるのである日本の様に金を与るといふ様な事がない幕は器械の作用で上からスルスルと下り又スルスルの上る［ママ］のである見物人が話しでもするかタバコでものむ時には見物の室を出て特に別の室でやり決して見物の席について酒やタバコをのんだり話しするなどといふ事がない実に静かなものであるカンシンなものである

〇街上の四辻やら人通ある所には人の店先などを貸りて［ママ］二三人の靴磨が居る（重に［ママ］猶太人との事）五仙を出せば椅子に腰掛けたまま新聞でも読み乍ら磨かすにあり（近頃は十仙とるともいふ）然し日本人でヤラセテ居るものは未だない

〇此地へ来る日本人の身のカタツケ様はただ忠臣蔵の四十七士が復讐の前いろいろの商売に身を落した時のやうである日本では何学校卒業したの何のカタガキがあるといつても此地でやつて居る業務といへば白人の家に雇はれスクールボーイとなりハウスオークとなりデーオークとなりて窓を拭いたりコツク、ウエーターとなり宿屋のベツト直し即ちチヤンバオークとなり湯屋の三助となり皿あらひとなりすべて人のイヤガル下等な職業のみを限りて使するの仕事なのである何が出来てもヨキ地位境遇に使ってくれぬのである

〇然し此地は下等な労働者でも富豪の紳士でも皆同等の心持である紳士だとて決して労働者を軽視せず労働者だとて決して紳士に畏縮せずツマリ昔からの大統領でも何んでも皆労働者から出来て居るやうな国故独立独行の人間でさえあつたなら地位も階級も憚るの要はないのである

〇時間を守る習慣は仲々堅いものである何時より何時迄と定めたら決してソレ以上ハタラクの必要がない少しでも長くハタライたら夫れ分の賃金を請求するの権利があるだから職工がもし夜業でもしたら昼の二倍丈けの賃金が取れ（無論白人の職工）日曜日にハタライても同様二倍取るそうだ

〇「いつわり」を言ふ事は大の悪事となつて居る

〇人の室を訪ふるは先づ戸を叩き中より「カメーン」（お這入りなさい）の声がない内は決して開く事が出来ず若しイキナリ開けて入つたら短銃で打たれてもシカタないとしてある

〇裸体を人に示すも厳禁もし窓のカーテンも卸さずに裸になつて居たのが外からでも見えたらやはり打たれても致方なしとしてある

〇公園などにある岩や石はみんな赤サビのさした焼石の様な質のものバカリ日本の庭石の様な石は更に見えない

〇日本人の店にある日本の書物はすべて日本代価の倍である日本で三十銭のもは此地の三十仙（日本の六十銭）である是は単に書物のみに限らず日本の品がソーである（佐藤君の一考を煩はす）

〇商館の書記其他いろいろの役に女のやつて居るものは沢山ある

一月十日付の書面昨日落手無事勉学の趣安意これに過ぎず余も壮健なれば案ずるに及ばす〇俳句本

のことはソレにてよし毎日新聞は遠山様の処へ来る故送るに及ばず古いのは無論いらぬ送別の写真は本と一所にでも送られたし［友人等の消息略］〇独立独行云々の質問ソレはつまり「コレコレの境遇に立ち至らぬ間はやれ手紙出さぬから不義理だのヤレ年始状ヤラヌから不礼［ママ］だのいふ様な区々たる世間の虚礼は志ばらくブンナゲて置く事を何とも思はぬ」との意にて「敢てするを憚からず」とは知りつつ其尻に抛つて置く事を憚からないとの意味なり［友人消息略］〇別紙四枚に桑港の一口はなしを書いて見た例の通りランボウ書き読みにくかろうがよんで見よソレから汽船の発着表も入れてやる〇田園の生活益々愉快なり岩手県人は川口秀則氏（遠山氏の甥）石鳥谷の人で伊藤久治といふ人の二人増員して総勢十人となつた農業は日本人に最も有望で最も適した仕事であるといふ事はツトに識者の唱道する所余が最初よりの目的もこれであつた身体が壮健になり精神も快活になつて金がとれて費用はかからぬこれで辛抱したら実に思ふ様に活動し行くことが出来る〇余は前便にもいつた通りココ二三ヶ月の間拾五円づつ盛岡の遠山氏より貰ふべし〇畑のアチコチに菜の花やタンポポなどが咲いて居る〇小鳥はモチヤモチヤする程木立や藪に群がり鳴いて居る〇牛は牧場の遠近にモーモーとさかんで居る〇豚の奴がグーグーとやつて餌をアサツて来る〇向ふの家で犬が吠えた〇こちらの園で鶏がトキをつくつた〇プープー喇叭の声は町から馬車で肴屋が来たのであろう〇遥かカナタで銃の音がした鴨でもうつたのか知らん〇アヽ好い天気だ空は蒼々と晴れ渡つて一点の雲もない向ふの山の上にあるのはサンノゼーの気象台か〇ヤー帆懸船が見えたぞハハア海もよく見られるぞ〇汽車が来たぞ〇ヤア向ふの畑で枯草に火をつけたぞ〇眼眸の転回する処の如上の風景相断点綴す其中の田畝に在りて畑を耕し草を耕つて働いて居るのは即ち我々の一団たるキヤンプの生活である昼飯一時間休みとつては夜飯後となれば各々己れが座に（寝台のある所）退きて将棋さすあり新聞見るあり書籍よむあり耕作浮世話修養談等各々口を衝いて出て嬉々洋々として楽み九時頃ともなればソロソロ心地よく安眠するなり如斯は是れ吾等が生活の反面である［ママ］〇桑港のポスト、ストリートから遠山の兄さん他に又移られた故以后御便は別紙の通の表記にして此アルビソへ送るべし〇書物のめんどうなものは送るなといつてやつたが此地では高い上不便だらう都合のよきとき此本を送ってもらひたし涙香小史訳岩窟王でこれは先年万朝報へ連載して今は一冊になつて刊行してある筈であるこれは金の都合もあるたろうから都合のよい時のこととすべし〇借金のカレコレ起つたら何とかして三月末迄まつてモロウベし其頃でなければ金が出来ぬなり〇先は身体強壮に勉強第一なり多し　英太郎

二月三日

四郎殿

資料（二）

（A）高群逸枝『美想曲』金星堂、1922 年。

「一九二二、七、六　サンフランシスコの／税関より受取り来る／此夜九時過校正すまして帰つてから一気によんで了つた

あつけなくとづれば／リンテンキまではたとやむ」

（B）宮崎安右衛門『自叙伝　聖暗』春秋社、1923 年。

「これは一九二三、一一、二二朝六時半霧深き丘のラツヤツト、パアク迄行き帰りし際偶とケツチンに於てコーヒーを飲み合へるM兄の話より暗示をうけて急遽購来れる而かも只一冊我がための如く大成堂の店頭に残りゐし書也　サン、フランシスコにて

月夜サウサリート行渡船の舳先にて

海の風たけるほど／いよいよ高く讃美歌　逸蒼」

（C）賀川豊彦『神との対話』警醒社、1925 年。
「一九二五、一〇、一七　在インデオＨ夫妻より／喜ばしき洗礼の消息を受取りしその／夜之を求む、サン、フランシスコにて
　　この地上苦を笑ひ／永遠の星仰ぐ　逸蒼
　　Ｈ夫妻へ返信の末に
　　この喜びを神に感謝し／祈れば／涙」
（D）レイモント著加藤朝鳥訳『ノーベル賞作品　農民（春）三』春秋社、1926 年。
「一九二六、三、八　夜サン、フランシスコのリホームド教会で第三大信丸乗組残存者達の遭難談あり　我が左足首の疼に塗るべき薬を買ふて戻れる途中フと見出して購めたもの―
　　嵐の中で／芽ぐむものは芽ぐむ　逸蒼
　　Feb.27 1927」
（E）野口米次郎『芭蕉俳句選評』（野口米次郎ブックレット　第十一編）第一書房、1926 年。
「一九二六、八、一二夜サン、フランシスコにて―明日の公休日には今朝Ｋから借りた金でバスをとつてパロアルト方面へ彼地の初秋を観に行かうとしてゐるその夕
　　日がへりながら／初秋の／旅なのだ　逸蒼
　　Aug.25 1926」
（F）野口米次郎『蕪村俳句選評』（野口米次郎ブックレット　第十編）第一書房、1926 年。
「一九二六、一一、一五サン、フランシスコにて
　明日は雨といふ天気予報を裏切ろうとする／やうな十一日月いよいよ冱へてきた宵に・・・・
　　訪紅人居
　　はつものの栗尽くし／いずれば月冱え　逸蒼
　　四つぶ焼いた／栗にて読み初む
　　一九二六、一一、二五感謝祭の夜の雨後
　　Nov.26,1926」
（G）バクーニン著、本荘可宗訳『神と国家』改造社、1929 年。
「一九二九、三、一三サン、フランシスコにて
　バクーニン君の霊に告げや――君の所謂／不合理な信条を信するクリスチヤンは此世に於ても最も合理的な否それ以上／に正しい生活をする生活者なんだ君の視且つ考へた基督者といふのは或る特種のキヤソリツク的なその者のことであらう恐らく・・・・
　　ケダモノを／先祖にせねば／承知せず
　　一九二九、四、一八
　　レーン病院にて
　　第三階より一階の／入込み室におろされた日」

資料（三）1934 年 10 月 21 日付

一九三四、一〇、二一朝十一時したためるサン、フランシスコ北米朝日新聞社三階にて　英太郎
（この句集[15]は主もに今度いろいろシンパイしてくれたり金くれたりした句の同好者らへ贈りたいものタレへもカレへもはやらないつもりだ）[16]
〇今は恰度一九三四、十月二一日の夜八時 ―俺はこのガランと広ろい三階建ての― 二階はただっぴろい編輯室その他下は活字職場と印刷機械場・・それに経業部になつてゐるのだ ―三階の電車通に面した方はダイニングルーム即ち余等とそれにつづいてケツチン即ち台所その次が便所でその次が

小さい空き部屋その次の一室― ここにはシンク即ち水の出てくる流し元―朝顔洗つたりなんか出来るところがあり天井のない申し分のないルーム（即ち部屋）壁は草原いろに塗つてある・・・実は新世界に見きりをつけ（―まだとるべくしてとれない金が二百弗以上あるのだが―前の破産の時五百弗は全然ミコミないとして・・・・）「日米」か「北米朝日」かにしようとした時日米には浅野君兄弟ともゐて（弟は編集長で・・・キノドクにも七才になつた長男の義君（ただし）といふ可愛い盛りの子が世界に類のないかつ治療法もわかつてゐないといふ白血球のふえて二週間内に死ぬその病気にかかつて死んで一昨日その葬式に列し俺はおトキに招かれてきた・・・・兄の幸平君はこの不況のためセツカク持った日本美術店も人手に渡し仕事もないので日米社の地方集金をやつてゐる）田原紅人も居りその他の人々とも顔ナジミなり職場の連中やらコツクもみんな知合ひでその方にも行けたのだが・・・・それに金払ひも三新聞中一番よいのだが―やはり俺はこのガラーンとした大きな家に一人ゐられる楽みの方を味ひたい・・・・といふのが心的第一条件なのでとうとうこの朝日新聞の方にきめたのだ ―これは「日米」のストライキ組が創立した新聞社なのだが― みんな好い連中で俺に十分の信用を置いてくれ（第一社長の海老名一雄（かづお）（春舟郎（シユンシーロー））―海老名弾正氏の長男）が俺の入社がきまつてゐない前から自分の筆で新聞に入社するやうに発表しわざわざ俺のホテル住ゐに訪ねてきてすすめてくれたりしたので入つたのだがその仕事が俺の直すのはキチョーメンに直しナニカと気持ちよく働らけるので金はドレ丈とれるやら恐らくねて食ふて小遣余程度のものであらうけれどここに決心して入社したのだが―

〇さてこの三階へのあがり下りには一本の杖を力らに足許の定まらないやつをふんばつて昇り降りするのだが―あるくと近頃セボネが尻の方につきぬけるやうな鈍痛を感じとても苦しいのだ―松葉杖は外出のときだけとしてゐる・・・両脚はヒザから下麻痺してゐて絶えずヂクヂク病んでゐてその不快苦痛はとてもひどいのだが腰掛けての仕事ならガマンも出来てこの苦痛も一時忘れられて仕事はむしろ好箇の苦痛忘却剤なのだ・・・・ところで昨夜は土曜夜なので社から二ブラツク（つまり日本の二丁と思へばよい）ばかり離れたフイルモア街といふニギヤかな商店つづきの中にある五仙、十仙、十五仙値の店が開けてゐるのでそれへいつて ―途中人のない前にセメントで出来てる低い垣？［ママ］に腰かけてやすんだりし乍ら― コマゴマした日用品を買つたがそれに二十仙と特別の札つきでバケツが売りにあつたのでそれも一つ買ひ（バケツや湯わかしや石油ヒーターその他は田舎に預けたままになつてゐる）もとつてケツチ［ママ］のくらやみに手さぐりで瓦斯で湯をわかしそれでたまつてゐた洗濯をして（夜十二時までかかつた）部屋中に綱を張り（今日は小雨がふつて太陽の光がなかつた）それにぶらさげたままだかわききれずにあるのだ即ち白シヤツ一、下に着る夏物のシヤツが三、冬物の上下一枚に出来てゐる長いヤツ一、それにナイトガン即ちフランネルのこれもあたまからかぶる長いヤツ一、靴下一足、夜ねる時足冷えないやうに米の袋でこしらへた足袋のやうなやつ一、これだけのものが今この部屋にぶら下がつてゐるのだこれに新世界社からみんなの助力で搬んで来た本やガラクタが大体片つけたがまだまだ足のふみ場もない様に雑然と散らばつてゐるのだそこのごたごたした部屋の高いベツドの上で今この手紙をかいてゐる俺を想像してもらひたい・・・・・・まあそれはそれとして

［句集について　略三行］

〇病気のことなんかはもうアキアキして人から病状をきかれるのもコウルさいしこの上どうして直さうとも考へたくないただしこのまま放つておくわけにもゆくまいから落ちついたら野一色式の電気療法だけはつづけやうと思つてゐる―がイマ恰度バタリーが切れたのでロスアンヂルスの方へ代償先払便で注文しやうと考へてゐるのだが田舎へ持つて行つてある湯わかしやら石油ヒーターその他取り寄せねばならず金もなくなつたからいづれその内に・・・・と考へてゐるのだ――

〇句集製本体裁に就いての一ツ書きに対し賛否の点を左に―
一、句の上下を揃へて五行づつ（可）
一、フリガナのついたものにだけフリガナをつける（可）
一、序のコトバは本文の活字より小さく（可）
一、活字の大さは盛岡にあるといふ「霧笛」のより大きいものを（可）
一、装幀の表紙のいろはこの見本の鹿々肉から出る紫紺でよからう・・但し無地にたのむこの飛び魚やその他どんなモヨウもまつ平ら御免だ無地無地無地に限るこれは固く守つてもらひたいいろんなモヨーなんかつけてはまるでブチコワシになるバカバカしいものになつてしまうから紫紺の無地にしてこれに貼つたように白い紙に黒ろく児供に「海へだて」とかかしてもらひたいこの俺が貼つた紙の位置にこの表題を貼りつけてヨコでなく縦てに貼るのだ ―俺が書いてもいいけれどやつぱり筆の方がいいし児供に書かしてもらひたい但しこの紫紺地に貼つてある「海隔て」と横に書いた字は俺の気にいつてるからこの人に「海へだて」と書いてもらひたい俺は「隔」といふ字がキラヒなのだヘンテコな字格なのでソレやコレやで「海へだて」としたいのなんだよ（内の方は「海隔て」としてもよい
一、改造文庫型より「霧笛」型の方がいいとの意見だがそれはお前に任せやう四六版にね・・・
一、金文字などは大キラヒだここに入れてある見本のやうにしたらいいぢやないか ―即ちこの見本の紫紺紙（模様をつけない無地の）をただの表紙用の紙にかぶせてこしらへたらそれでよいのだ
一、この見本にある無地の紫紺紙を表紙にかぶせそれに俺が貼りつけた位置に白紙に黒字で書いた「海へだて」をこの通り貼つた表紙にする・・・・といふ事に頼む
一、くれぐれも模様は一切つけないことに頼む俺の好みに反するから・・・・それにあんまり凝らない様にたのむヘタに凝られたりしたらすっかりブチコワシになるから金もかからないやうに金文字や金モヨウなどはマツピラゴメンだそんな悪趣味は大キラヒなのだから・・・
〇「凝つては思案に能はず」といふたとへがあるアまり体裁にヘンに凝られては俺の意志に全然ちがつたものになるのだあくまでも素朴にして而かも芸術の味感あるものにしたいのだ安価にして・・・且つ・・・・
〇千鳥も飛び魚もナニもカモ模様づけはマツビラゴメンなのだ
〇図案なんかは全然必要なし内容的な句集を図案やナニカでヘタクソなお化粧する必要がドコにあらう？！ソンなものは全然いらないのだ
〇メードニツポンといふコトバは―現にニューヨークの方に着した（Made in Nippon）といふマークのために上陸さ志止めになつたといふ話があるソレは規則に Japan と規定明記してあるからだ・・・・といふ原因だったさうだムロンこの句集は買品でないのだからソンな点にこだはる必要ないのだけれど税関吏なんといふものはドコでも案外ワカラない奴があるのだからやはり Made Japan（in はいらなからう）としてもらひたい―但し日本からは日本には決して印刷してないやはり紫のラバースタンプでポンポンと捺してあるんだよ盛岡にはラバー、スタンプ即ちゴムに印をほる業者はないのかね或はアルフワベツトＡ、Ｂ、Ｃ、一つ一つをよせて MADE JAPAN と型にはめてポンポンと捺すやうな用具はないのか？ココならゴク簡単に出来るのだがナ－そうだ―ここに「句集炬火」といつて一昨年ロスアンゼルスのオリンピック大会があつたそれを機会にロスアンゼルスのアゴスト社といふ新しい句の同人が太平洋沿岸の俳人に檄を飛ばして記念の俳句大会やつて俺も中原から旅費送ってもらつてそれに列席したのはキオクしてるだろうつまりその記念句集なのだ（コレはひとり太平洋沿岸の人々のみならす故国では「層雲」から二十一人「海紅」からは二十二人ハワイからは九人ロスアンゼルスからは十三人、）沿岸からは八人といふ多勢のものをあつめ東京の三秀社で印刷

した黒無地表紙のそれこそ申分のない体裁のものがある―イマ思ひだしてそれの巻末を見たら小さい活字で“Printed in Japan”としてある・・だからやはりその通りプリンテード・イン・ジヤパンと印刷してもらひたいそれがよからう・・・・
〇それからこの序で又いふがこの句集「炬火」の用紙はナンといふ紙かしらないが恰度ホウショのすこし薄い荒らい手ざわりのする紙なんだが ―そしてこれも黒無地の表紙紙(がみ)をあまり厚くない紙にかぶせてあるのだよ
〇次に「お問合わせしなくとも製本し得るやう・・・」云々とある条項に対して返事しよう・・・
一、表紙は前にくわしく言つた様に普通の少しばかり厚めの目に見本の紫紺紙をかぶせ貼りつけて表紙には海へだて［四角に囲みのなかに海へだてと記入］とあの位置に貼りつけるので布地だの金粉なのではないのだよ
一、表紙の色も前に言った通りのものなんだ
一、布地不用
一、四六版にしよう
一、本文の紙質は？［ママ］前に言った「炬火」のやうなナンといふかしらないが奉書紙（ホウシヨ紙）に似て薄く且つ表裏のない手ざわりの少々荒らめな紙（是は層雲社から二年毎に出る句集もやはりこの紙なのだ）―にしたらよいと思ふが若しこれが金高かかるやうだったら普通の洋紙でもよい（念のためココに「炬火」句集からその用紙をすこしはさみ取ってここに封入したよ）
一、活字は八ポイント半でよからう盛岡で印刷することは俺も賛成だ
一、部数の二百もよからう・・・・
一、昔の［図二つ、一つは四角囲みに右はじに傍点二つ、もう一つは四角囲みに右端に縦に傍線その脇に横の線４本］なんかはバカバカしい旧思想ぢやないか？俺は第一アメリカに永年住んでゐて句はすべてアメリカの句なんだよ―先づそれを考へてみてくれこんな体裁のものにされるか？
一、プリンテード・イン・ジヤパンは無論英字でなくてはダメなんだ何となれは米国人の税関官吏に読める字でなくてはダメなんだソレだから言ふまでもなく英語に限るのだ―こんなことをたづねるとはあまりに非常識ぢやないか？
一、題字はソレぢや俊子に書かしてもらひたい但しリツパにリツパにとキバツて書いたのでは面白くないよむしろヘタクソの方が却つておもしろいのだ天真ランマンなナンの作意もないやつが・・・・その点からいつたらむしろ和夫の方なんかは字がヘタでおもしろいぢやないか
一、どうせ年末は印刷屋が忙しいのだからヒマになつてからでよいイライラしてまちがひだらけにやられてはバカを見るからゆつくり落ついた頃註文してもらひたいのだ
一、俺のはウリモノでないのだからヘタに体裁をつくられては却ってメイワクだ人の目につこうがつくまいが全然内容的なもので外形的なものでないんだからねしたがつてテイサイに苦心もヘチマもあつたもんでないのだ
以上でもつて俺の製本に対する気持(もち)もわかつたらうから・・あとは原書にたいしてマチガヒのない様に校正をシツカリたのむだけだ―つまり俺の原稿と少しも違はなく出来上りさへすればよいのなんだから・・・・
〇さて俺の境遇の千変万化のはこれは俺の内心の希願ではあつたけれどかく一年の殆んど四分の三の間も田園やまして山の情景に一日三弗以上もかけて行けるなどといふことは夢にも考へなかつたことでそもそもこれは人意や人力(りよく)で出来たことでなく正しく天意なり神力の到らしめて下さつた事と考へるより外ない即ち俺の句境の変換を与へて下さる神の恵みだったと考へる外ないね・・・どうしてこんなことは予期もなんにもしなかった事なのだ・・・これには湖畔社といふものが対岸のオー

クランドに出来たのがソモソモの機縁となつたのだがコノ湖畔社は数月前から火の消えたやうにパツたりと消滅してしまつたのだソレも考へやうでは俺のこの度の田舎行きの便を与へてくれる役に立つまでの存在であつてこれが過ぎたもんだから消えてなくなつた天のフシギな摂理だとも考へられてならないのだナニシロ考へやうになつてはこうした不具の身にされたといふことがそもそも天の恵みだつたのだ ―句にすつかり傾かしむべく ―

ソレに俺といふ人間は人と並みに妻をもとうと家庭を・・・といふ様なことはテンで考へないつまりすツかりこれらから解放されてスキザンマイな生涯―何ものにも羈束拘束をうけないでくらしたいと念じてゐたのだからこうした不虞の体になつたのはいはば「願がたり叶つたり」の生き様なんだ ―そういふ俺の心掛にたいしてチヨツトよいビケーシヨンを天から与へてくれたのがこんどの田園行なり温泉行なりなのだ・・・・と斯う考へられてならないのだよ― 信ぜざる者からは迷信とも妄想とも見えやうとも俺にはそんな風に考へられてしかたないのだ・・・・

〇それにふしぎなのは両脚ことに膝から下が不自由でだんだん苦痛が増してきてゐるのに上半身だけは少しも病身らしくなく気力も旺盛でこのコウルサイ校正の仕事も「邦字新聞の校正として最上」のものと認められて重宝がられてゐる ―近頃は毎日五、六、七句づつ朝日新聞の第一頁に出してくれといふので出してゐるのだ「日米」の方へはうたや句を毎週の文芸欄に出してゐるし・・・実際俺のカラダは我乍らフシギな病苦と活力と兼ね合せ有つてゐるのが不思議でたまらないのだ― 杖にすがつてやつとハシゴをのほり松葉杖で苦しみ乍ら外をあるくそれもオツクーになつてよくよくの時でなくば外出もしない出来ないやうになつてゐ乍らナカナカへたばりもしないのはフシギなのだ

〇おれに御養生第一に早く御快復・・・・ナンていふのはまちがひだよもう回復なんてコトは考へてもゐないまあヘタバル処までこのカラダを引きずつて喰ふて寝てゆけるこのシンブンにはたらいてゆくまでなんだ快復なんといふことを考へるさへバカバカしく病気の事をいろいろと思ふてみるのもスツカリ飽き飽きして了つて考へてもみなくなつたのだ考へたつてナンにもたしになることぢやないのだから・・・・・

［中略４行　友人について］

〇製本については以上くどくどすぎる程書いたのだからもう何もいふことがない活版所の忙しいところを通り越さしてから注文した方がよいだらう・・・・

〇もうこれからはクリスマスのプレゼントはいふに及ばずシンブンも送れないからそのつもりに思つてゐてもらひたい

〇家族一同の健康を祈るだけで何にもいふべき言葉もない利代さんにもよろしくたのむ・・

〇最後に十月号「層雲」あの厳選極まる（特に俺に対して・・・荻原井泉水（セイセンスイ）氏が選した四句を左にしたためみせよう ―これは田舎に病気保養してゐた頃の句なんだが・・・・

送りとどけて星空帰りゆくわだち

揚がつてるのはみなアメリカのへなへな凧です

カリフオルニアの緑野（みどりの）で我が吹く草笛

豚飼は豚のことばかり考へて春ゆく

といふのだこれが病人の句とよまれるかネ？ハハハ・・・オレの一面にはこういふところもあるのだよ［4句の下に ｛が書かれ、その下に「という～のだよ」の説明書き］

註

表記について

資料の文中には現在では不適切な表現があるが、歴史的資料として原文のままとした。なお旧漢字体のみ現在の漢字体とした。

[1] 祖母宛 1904 年 2 月 3 日付など。渡米してから一草を改め逸蒼と号するようになった。「蒼海の上を越えて来た」からであるという。1904 年 3 月 6 日付。

[2] 引用は、1904 年 10 月 19 日付、および 1916 年 6 月 23 日付。

[3] 1922 年 6 月 25 日付。

[4] 1906 年 12 月 17 日付 1907 年 1 月 14 日付。「レモン会」がレモン詩社と同一であるかに関しては不明である。

[5] 1910 年 11 月 7 日付。

[6] 同上。

[7] 弟四郎および祖母宛、1912 年 7 月 31 日付。

[8] 1915 年 11 月 14 日レモン詩社での句会記念撮影写真には、久保綱子、玉利錦江、木村三斜、直原行人、中村四葉、吉田未知生、西条木兆、高橋波静、下山逸蒼、篠川篁玲の顔が見える。紙燭会の俳人武石天郊追悼句会には、山内峡花（羅府新報記者）、遠藤紫郎（南加時事記者）、小野鉄公（本願寺開教師［ママ］）、川上阿雲（本願寺開教師［ママ］）、高橋波静（画師、新劇俳優）、玉利錦江（日本人会書記）、西条木兆（製図家）、笠原崛山（クツザン　職業記載なし）、深川立木丘（羅府朝日新聞社員）、木村三斜（洋服靴店員）、下山逸蒼（当時遠山の太平洋魚店員）、藤井天彩（羅府新報主筆）、素簡、直原行人（開墾請負者）の顔が見える。天郊［浩玻 1884-1913］は、飛行機家、墜落死した。職業等の情報は写真裏の説明書きによる。資料は盛岡市先人記念館所蔵。なお Eri Yasuhara の研究によれば、機関誌『れもん帖』は 1914 年末か、1915 年初期に発行が始まり、1919 年ころまで発行された。Eri Yasuhara, “Remoncho: Early Japanese American Literature in Southern California,”『立命館言語文化研究』8 巻 5·6 合併号：59 頁。

[9] 病状を案じ、帰国を勧める弟や祖母に対して、病気になったことで「詩材」に恵まれ、強い人間になったのだから、心配するなと、繰り返し、書き送っている。

[10] 題名の表記については資料（三）参照。

[11] *Everybody's Magazine* と題する雑誌の頁に、『羅府朝日』「朝日文芸」欄掲載の自句が貼られている。1911 年 1 月 1 日の「試吟」から始まって、「一題十句」が 1911 年年末まで、43 回から 100 回貼られている。その他年月日不明の文芸欄もある。「明治四十一年より四十五年二月十三日迄三千十一句」という書き込みがある。

[12] 下山睦子氏作成。封書には受け取りの日時が記載されているが、これは受取人が記入したのだという。封書の消印日付と書簡の日付が大幅に異なるもの、封書がない書簡などもある。

[13] 2011 年 10 月 27 日メール通信。

[14] 逸蒼印が付されているもの、彼の手で日付が付されているものを逸蒼の蔵書と見なした。

[15] 『海へだて』。

[16] 手紙の罫線の欄外に記されている。

A Report on the Documents of Isso Shimoyama, an Issei Haiku Poet

Teruko Kumei（Shirayuri College）

This is part of a research project intended to shed light on immigration/emigration materials available at and outside the Japanese Overseas Migration Museum at the JICA Yokohama International Center, in order to raise public awareness about the existence of such materials for wider utilization. This report focuses on Isso Shimoyama, an Issei haiku poet, who left Morioka, Iwate, for the US in 1903 to earn money to help support his struggling family, but died penniless as a proofreader for a Japanese-language newspaper in San Francisco in 1935. This report briefly describes Shimoyama's biographical background, and then examines various materials left by him, including personal letters to his family in Morioka. The following documents are transcribed:

(1) Detailed description of the city of San Francisco
(2) Poems written on the books he purchased
(3) Last letter to his brother

Keywords：History of Japanese immigrants in the U. S., immigrant literature, freestyle haiku, Isso Shimoyama

海外移住資料館の収蔵する戦後海外移住実務機関作成業務資料等の紹介

岡野伸治（海外移住資料館業務室 室長）・渡邉由紀子（同 司書）

＜目　次＞

はじめに
1.　図書資料室（海外移住）及び収蔵資料の概要
2.　移住事業実務機関とその事業
2.1　日本海外協会連合会と日本海外移住振興株式会社
2.2　海外移住事業団
2.3　国際協力事業団
2.4　国際協力機構
3.　移住行政の状況
3.1　『昭和三十八年募集要項綴』
3.2　海外移住行政を所管する省庁
3.3　移住行政事務の根拠
おわりに

キーワード：戦後の海外移住、日本海外協会連合会、日本海外移住振興株式会社、海外移住事業団、JEMIS、国際協力事業団、国際協力機構、JICA

はじめに

日本海外協会連合会、日本海外移住振興株式会社、海外移住事業団、国際協力事業団、そして現在の国際協力機構。これらは日本の戦後海外移住事業を担ってきた機関であり、その事業の成果物として、各種の業務資料が作成されてきた。本報告では、海外移住資料館の収蔵資料、特に各機関が作成した業務資料に記載された内容をもとに、戦後海外移住事業の変遷を概観する。

1.　図書資料室（海外移住）及び収蔵資料の概要

まず最初に、本報告の対象である業務資料の収蔵状況について言及する。

海外移住資料館には常設展示スペースの他に、「図書資料室（海外移住）」（以下、資料室と言う）が設置されており、利用者に対して海外移住関連資料の閲覧サービスを提供している。資料室には書庫が併設され、海外移住資料館の収蔵する資料のうち、図書類の他、マイクロフィルムやアーカイブ類など閲覧に供する資料の保管機能も有している。資料室で保管している海外移住関連資料は、現在約 40,000 点で、うち図書類は約 35,000 点である[1]。資料のほとんどは閉架式であるが、閲覧スペースでは、業務資料、移住先国・地域発行資料（周年記念誌など）、都道府県市町村発行資料（県移民史など）、統計類、一般書籍も含めて約 2,000 点が開架され、閲覧に供されている。2012 年 2 月現在、閲覧スペースの再配架作業を行っている。

図１　閲覧スペース配架構成（予定）

A-1	B-1	C-1	D-1	E-1	F-1
海外移住資料館発行資料 『展示案内』，『研究紀要』	JICA 発行資料 業務資料、報告書	JICA 発行資料 『海外移住統計』	一般書籍（北米）	一般書籍（中南米）	各国記念誌
A-2	B-2	C-2	D-2	E-2	F-2
JICA 発行資料 周年誌，『移住研究』	JICA 発行資料 業務資料、報告書	一般書籍（移民史概要）	一般書籍（北米）	一般書籍（その他地域）	各国記念誌
A-3	B-3	C-3	D-3	E-3	F-3
JICA 発行資料 『海外移住』（合冊版）	JICA 発行資料 業務資料、報告書	一般書籍（小説等読みもの）	一般書籍（中南米）	一般書籍（児童向け）	各国記念誌
G-1	H-1	I-1	J-1	K-1	L-1
移住地発行資料	移住地発行資料	海外日系人協会発行資料 『移住家族』，『日系人ニュース』	多文化共生 （日本語教育、子弟教育）	一般書籍（外国語）	人物調査資料
G-2	H-2	I-2	J-2	K-2	L-2
移住地発行資料	海外日系人協会発行資料 『季刊海外日系人』， 『日系人大会報告書』	統計『在留外国人統計』， 『海外在留邦人数調査統計』， 『出入国管理関係統計概要』， 『出入国管理関係統計年鑑』	多文化共生 （日本語教育、子弟教育）	多文化共生 （在日日系人、在外日系人）	人物調査資料

M-1	N-1	O-1	P-1	Q-1
人物調査資料 『伯剌西爾行移民名簿』	人物調査資料 『伯剌西爾行移民名簿』	復刻版資料　『初期在北米日本人の記録』		復刻版資料 『カナダ移民史資料』
		O-2	P-2	Q-2
M-2	N-2	復刻版資料　『初期在北米日本人の記録』		復刻版資料 『日米年鑑』，『拓務統計』， 『日系移民人名辞典』
人物調査資料 『伯剌西爾行移民名簿』	人物調査資料 『伯剌西爾行移民名簿』	O-3	P-3	Q-3
		復刻版資料 『初期在北米日本人の記録』	復刻版資料 『日系移民資料集　北米編』	復刻版資料　『布哇年鑑』
M-3	N-3	O-4	P-4	Q-4
人物調査資料 『伯剌西爾行移民名簿』	復刻版資料 『初期在北米日本人の記録』	復刻版資料 『初期在北米日本人の記録』	復刻版資料 『日系移民資料集　南米編』	復刻版資料 『海外各地在留邦人職業別人口表』，『海外日本実業者の調査』，『移民地事情』
R-1	S-1	T-1	U-1	V-1
都道府県市町村発行資料				復刻版資料『植民地資料事典』，『仏教海外開教史』
R-2	S-2	T-2	U-2	V-2
都道府県市町村発行資料				

海外移住資料館の設置されているJICA横浜は、海外移住センター及び神奈川国際水産研修センターという２つのJICA国内機関を統合し2002年に新設され、同時に海外移住資料館も開館された。海外移住資料館開館準備段階で、①海外移住センターに収蔵されていた資料、②海外移住資料館開館に向けて新たに国内外で収集された資料、③JICA図書館収蔵資料のうちJICA著作物以外の資料、以上３つの海外移住関連資料が海外移住資料館へ移管及び収集され、開館時における収蔵資料が構成された。開館当時の収蔵資料のうち、資料室書庫へ受け入れた図書類の点数は概数で、①3,000点、②2,500点、③5,500点、計11,000点。①については、整理済みの約3,000点以外に、未整理の図書類も多数移管されており、海外移住資料館開館以後、新たに収集された図書類と合わせて、整理登録作業を継続し、現在の蔵書数に至っている。

海外移住センターでは、海外移住資料館設立が決定した段階で、海外移住関連資料の保全を目的とし、当時のJICA国内機関の所有する海外移住関連資料を集中的に収集しており、その際に各種の業務資料も海外移住センターに集約され、それらが上記の①として海外移住資料館に移管されている。その中には、後述する日本海外協会連合会や海外移住事業団の作成した業務資料も含まれており、結果として、戦後移住事業に関連する業務資料の大半が、海外移住資料館に集約されることとなった。

本報告では、日本海外協会連合会、日本海外移住振興株式会社、海外移住事業団、国際協力事業団、独立行政法人国際協力機構が作成した、海外移住に関連する業務資料を対象としている。海外移住

資料館の収蔵資料データベース（2011 年 10 月時点）に登録されている業務資料の点数はそれぞれ、101 件、15 件、406 件、1,202 件、26 件である。

2.　移住事業実務機関とその事業

戦後の海外移住は、1952 年、ジュート栽培移住者が、ブラジルのアマゾン河流域に渡ったことからはじまる。政府は、再開された海外移住を推進するための実務機関の設立を考え、戦前から各府県に設置されていた海外協会の中央機関として、1954 年に財団法人日本海外協会連合会を設立した。また、米国の銀行からの移住借款を契機として、1955 年には日本海外移住振興株式会社が設立され、移住者等の行う事業資金の貸付等の事業を行うこととなった。

しかし、両機関の事業には一部に重複があったため、1963 年、海外移住事業団が外務省の特殊法人として設立され、これに伴い日本海外協会連合会及び日本海外移住振興株式会社は解散した。

1974 年、移住事業を実施してきた海外移住事業団と、技術協力を実施してきた海外技術協力事業団が統合され、財団法人海外貿易開発協会の業務を一部加え、国際協力事業団が設立された。そして、2003 年、特殊法人等の合理化により独立行政法人国際協力機構へ改組され、現在に至っている。

2.1　日本海外協会連合会[2] と日本海外移住振興株式会社[3]

日本海外協会連合会が移住事業を行っていた 1954 年から 1963 年の 10 年間に送り出された移住者数は 53,560 人であり、戦後移住が再開された 1952 年から国際協力事業団が移住者送出を終えた 1993 年度末までの移住者数 73,035 人の約 73% を占めた[4]。

当時の状況としては、1951 年 9 月サンフランシスコ平和条約調印後、ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチンなどへと移住が再開され、政府は移住者保護のため 1956 年のボリビアを始めとし、1959 年にパラグアイ、1960 年にブラジル、1961 年にアルゼンチンと、各国との間で移住協定を結んでいる。また 1955 年には、移住の円滑なる推進を図ることを目的として、総理大臣の諮問機関である海外移住審議会が設置され、同年にはコチア産業組合[5] がブラジル移植民院より青年移住者の導入枠を取得している。同年には、アメリカ合衆国難民救済法による渡米第 1 陣も出発している。

日本海外協会連合会は、海外移住のあっせん及び援助を行い、海外移住の推進を図ることを目的としていた。加盟団体である各府県の海外協会は組織上、日本海外協会連合会の構成団体ではないが、同会の設立目的を果たすための実質的な業務は、各地方海外協会が担っており、移住者の募集及び啓発広報業務などを行った。日本海外協会連合会はそれらの中央機関として、業務の統一的指導を行っていた。国外においては、アメリカ合衆国（サンフランシスコ）、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ドミニカ、コロンビアに、海外支部が設立された。

日本海外移住振興株式会社の目的は、海外移住を推進するため、移住者およびその団体の行う農業・漁業・工業その他の事業に必要な資金の貸付けを行うほか、必要に応じ移住者を受け入れる事業にたいする資金の貸付けおよび投資、またはその事業の経営を行うことであった。

パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ドミニカに国外支店が設置され、ブラジルについては、同国の法制に準拠する必要があったため、移植民事業を営むための「ジャミック移植民有限責任持分会社」および投融資を営むための「イジュウシンコウ信用金融投資有限責任持分会社」の 2 つの現地法人が 1956 年に設立されている。

日本海外協会連合会時代の 10 年間に、戦後の移住者数は急速な増加と減少を経ており、日本海外協会連合会が設立された 5 年後の 1960 年にピークを迎え、以降移住者数は急速に減少している。

2.2　海外移住事業団[6]

南米への農業移住が低迷する一方で、1962 年にはカナダの移民施行令が改正、1966 年、東京にカナダ大使館査証事務所が開設されると、カナダ移住者が急増、同時期にブラジル、アルゼンチンへの技術移住も増加したが、1961 年より海外移住送出数全体としては減少に転じた。

1960 年代初頭まで、日本海外協会連合会と日本海外移住振興株式会社が中心となり、地方海外協会が各都道府県と協力して移住実務を行っていたが、その実務は互いに競合ないし重複していた。1962 年、海外移住審議会は、「国の補助金もしくは資金によるものについては、これを統合し、新たに単一の公的実務機関を設けて移住事業の合理化を断行すべきである。」との答申を行った。そして、1963 年、日本海外協会連合会と日本海外移住振興株式会社の業務が統合され、海外移住事業団が設立された。

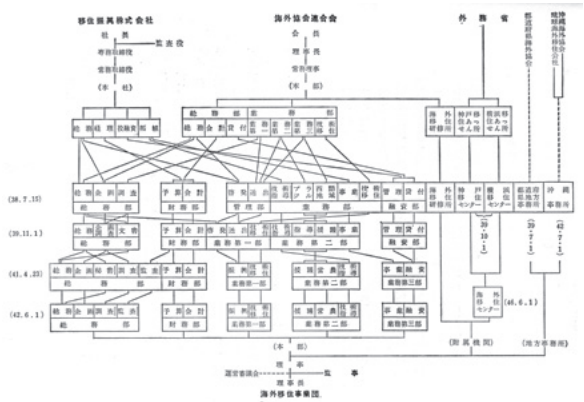


図 1　国内機構の推移

国外の支部、支店等は海外移住事業団の国外支部へ移行し、国内では付属機関として海外移住研修所が海外移住事業団へ引継がれた。1964 年には、各都道府県に地方事務所を設置、また同年、神戸及び横浜の移住あっせん所[7]が外務省から引継がれ、これを移住センターと改称した。更に、沖縄等における海外移住事業の取り扱い[8]、カナダ移住の取り扱い開始に伴い新事務所を開設し、業務体制の整備が図られた[9]。

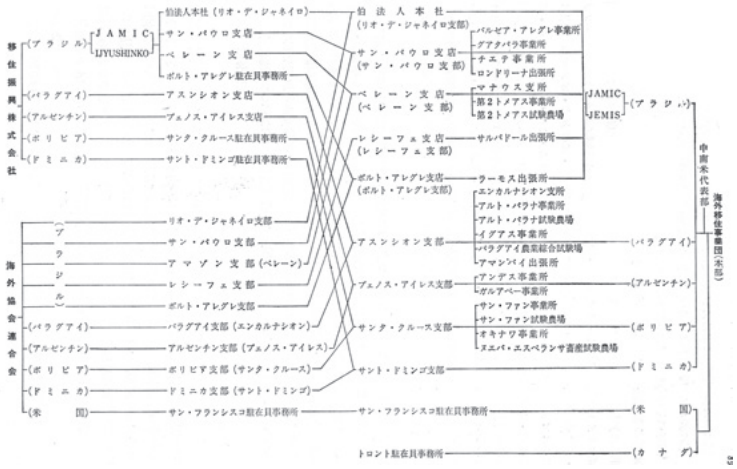


図 2　在外機構の推移

【資料】『海外移住事業団十年史』(海外移住事業団 1973 年)

2.3　国際協力事業団

1971 年、海外移住審議会はその答申において、海外発展の推進、既移住者に対する援護の強化、啓発および教育の強化を唱え、さらに海外移住事業団と海外技術協力事業団との関係において「両事業団の現地における事業成果は相互に影響を及ぼし合って受け入れ国の開発に貢献することにかんがみ、両事業団の協調体制を確立することが望ましい。」と述べている。

1974 年、開発途上地域等の経済及び社会の発展に寄与し、国際協力の促進に資することを目的とする国際協力事業団法が制定され、国際協力事業団が設立された。国際協力事業団の移住事業は、海外移住事業団が実施していた事業をそのまま引き継いだため、内容に大きな変化はない。国内の業務は、国内支部、海外移住センター、海外移住研修所を通じての、啓発、広報、相談、斡旋、移住者の訓練・講習・送出・渡航費支給、移住者子弟の本邦研修などの業務であり、海外では海外支部、現地法人[10]を通じての、移住者動態調査・移住先調査、農業経営・自立安定のための援助としての医療、教育、インフラ整備、農業試験場を通じる研究・指導、安全措置、入植地の取得・造成・分譲、資金の貸付などを行った。

国際協力事業団設立後も南米向け移住者送出数は年々減少を続ける結果となり、カナダやオーストラリアへの送出[11]を加えても、全体としてこの傾向は変わらなかった。移住事業の方向性も移住者送出から海外での援助事業重視に変わり、移住者子弟の本邦研修、日本語教育支援など、人材育成支援を積極的に行うようになった。1994 年、移住関連業務を担当していた移住事業部が廃止され、移住事業はその国際協力としての側面重視に転換され、移住者及び日系人社会に対する支援、協力の拡充を図ることとなった[12]。海外移住資料館は、国際協力事業団が独立行政法人化する前年である 2002 年に開館している。

2.4　国際協力機構

開発援助に対する国内外の状況の変化と、行政改革の一環として特殊法人改革が進められたことから、国際協力事業団は 2003 年に独立行政法人化され、国際協力機構となり現在に至る。現在の事業内容は下記のとおりであり、独立行政法人化当初と大きな変化はないが、助成事業や事業資金貸付など、一部の事業が廃止されている。

1）　知識普及

海外移住資料館の運営管理

2）移住先国での支援

営農普及（2010 年度終了），医療衛生対策，教育文化対策（日本語教育支援），施設整備

3）　移住者子弟の人材育成

日本語学校生徒研修受入，日系社会リーダー育成事業

4）　日系社会と地域社会への支援

日系社会青年ボランティアや日系社会シニアボランティアの派遣，日系研修員の受入

5）　事業資金の貸付（貸付は 2005 年度終了，現在は回収のみ）

3.　移住行政の状況

前章で概観した国際協力機構に繋がる各機関は、戦後海外移住の実務機関として、その業務を行なってきた。財団法人と株式会社から始まり、「公的実務機関」として事業団化、現在の独立行政法人化された機関へと変遷するなかで、移住者の募集・選考から送出、現地での各種支援まで行なってきたものが、時を経て、現在の「中南米地域等への移住者の定着に必要な業務」[13]となった。ここ

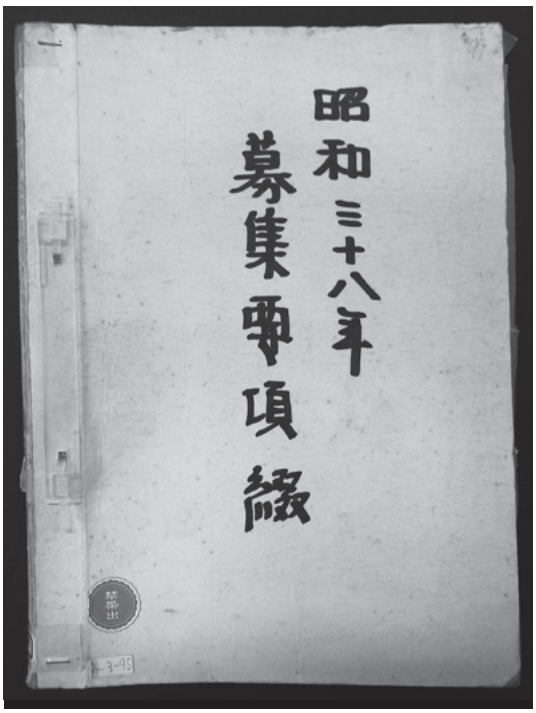
までその変遷を概観したが、本章では、具体的な業務資料を１点とりあげ、その内容から展開し、当時の移住行政の状況を示す各種資料を紹介する。

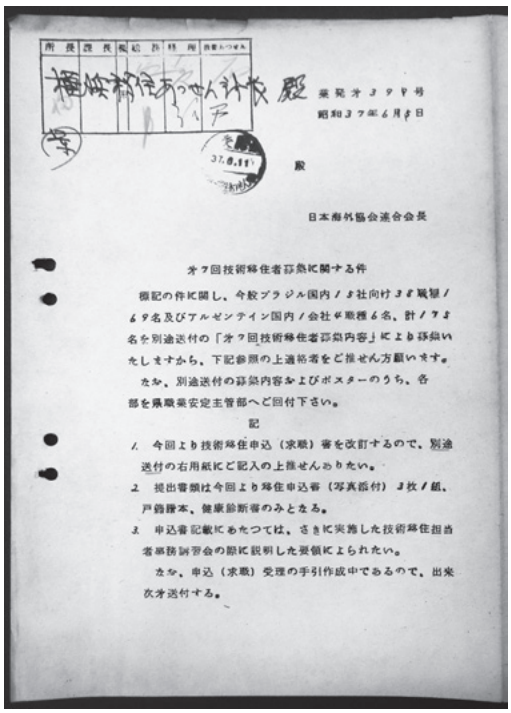
3.1 『昭和三十八年募集要項綴』

『昭和三十八年募集要項綴』は日本海外協会連合会の時代に横浜移住あっせん所で作成された業務資料で、国際協力事業団時代の海外移住センター（神奈川県横浜市磯子区根岸）図書資料室に収蔵されていた。表題には「募集要項綴」と記載されているが、綴じられている資料は主として「募集要領」と表題に記載されている以下の９点の冊子である[14]。

①『伯国バイア州イツベラ植民地自営開拓移住者募集要領（1963.5)』
②『ボリビア国サンファン移住地自営開拓移住者募集要領（1963.3)』
③『第９回ブラジル国技術移住者募集（1963.4)』
④『ブラジル国アマゾン流域第二トメアスー移住地自営開拓移住者募集要領（1963.1)』
⑤『ブラジル国桜耕地（サンパウロ州）移住者募集要領（1962.10)』
⑥『第７回ブラジル・アルゼンチン技術移住者募集内容（1962.6)』
⑦『第６回ブラジル・アルゼンチン技術移住者募集内容（1962.3)』
⑧『アルゼンティン国花卉蔬菜栽培単独青年移住者募集要領（1962.5)』
⑨『パラグアイ国アルトパラナ移住地自営開拓移住者募集要領（1963.6)』

③以外はすべて募集要領である。募集要領はいずれも実務担当者向けの業務資料として日本海外協会連合会が作成したもので、④⑥⑦⑧については、日本海外協会連合会長名の送付状が添付されている。




横浜移住あっせん所殿
業発オ３７９号
昭和３７年６月８日
殿
日本海外協会連合会長
オ７回技術移住者募集に関する件
標記の件に関し、今般ブラジル国内１８社向け３８職種１６９名及びアルゼンテイン国内１会社４職種６名、計１７５名を別途送付の「オ７回技術移住者募集内容」により募集いたしますから、下記参照の上適格者をご推せん方願います。
なお、別途送付の募集内容およびポスターのうち、各部を県職業安定主管部へご回付下さい。
記
1. 今回より技術移住申込（求職）書を改訂するので、別途送付の右用紙にご記入の上推せんおりたい。
2. 提出書類は今回より移住申込書（写真添付）３枚１組、戸籍謄本、健康診断書のみとなる。
3. 申込書記載にあたつては、さきに実施した技術移住担当者事務講習会の際に説明した要領によられたい。
なお、申込（求職）受理の手引作成中であるので、出来次オ送付する。

送付状宛名は横浜移住あっせん所長、発信者が日本海外協会連合会長、となっているが、「本信送付先」は、いずれの送付状も都道府県海外協会長である。また、「本信写送付先」として、それぞれ下記の送付先の記載がある[15]。

⑥：外務省移住局長、労働省職業安定局長、神戸・横浜各移住あっせん所長、神戸支部、雇用促進事業団理事長、海外企業技術協力あっせん所長、サンパウロ･リオ各移住あっせん部長、アルゼンティン支部

⑦：外務省移住局長、労働省職業安定局長、神戸･横浜各移住あっせん所長、雇用促進事業団理事長、海外企業技術あっせん所長、神戸支部主任駐在員、JAMIC サンパウロ・リオ各移住あっせん部長、アルゼンティン支部長

⑧：外務省移住局長、農林省振興局長、神戸･横浜各移住あっせん所長、海外農業移住中央訓練所長、海外移住研修所長、神戸支部

農業移住の募集要領には、募集地区と募集数、移住者の資格条件、申込・渡航手続き、渡航費貸付額と条件、所要資金、携行物資、営農に関する情報（融資基準や経営収支の概算など）、移住先の概況などが、技術移住の募集要領には、引受機関と会社、募集職種と募集数、雇用条件、移住者の資格条件、申込・渡航手続き、携行物資などが記載されている。

③のみが、移住希望者向けに作成された要項であり、全８ページのリーフレットに、応募資格、手続き、生活費や物価、求人内容一覧の他、移住あっせん機関として、以下の記載がある。

> 技術移住の業務にはいろいろありますが，全般的な指導監督を外務省と労働省が行ない移住希望者の受付・相談等を各公共職業安定所と都道府県海外協会が，就職あつせんその他を海協連と在外支部がそれぞれ担当しています。

3.2　海外移住行政を所管する省庁

昭和 30 ～ 40 年頃の海外移住行政には、いくつかの省庁が関わっていた。『わが国民の海外発展 移住百年の歩み（本編）』（外務省領事移住部、1971 年）には、移住行政について「主務官庁である外務省を中心に、農林、労働、通産、文部、自治等各省の緊密な協力のもとに行なわれるべき」であり、「外務省は、その設置法に基づき、移住行政の総合的な企画、立案を行なうとともに、移住に関する外交政策の実施にあたる」と記載されている。さらに、1955 年８月地方職業安定機関等に対し労働事務次官通牒を発し、指示した内容として「農林漁業移民については農林省、企業移民および高級技術については通商産業省において、それぞれ取扱うこととなっており、上記以外の雇用労働者として海外に移住するすべての移民は職業安定機関が取扱う」と記載されている。

また、日本海外協会連合会作成の『移住執務提要改訂版』（1959 年）にも、「地方から推せんされた移住者は、海協連が主体となって最終的選考を行う。この場合には、移住者送出の主管官庁たる外務省、並びに農林関係移住については農林省、その他の移住者については労働省や通産省等関係官庁と協議し決定することになっている。コチアの如く引受者側の指定あるものについては、全国農協中央会等関係機関も加えて選考会議が開かれる。」と記載されている。

募集要領送付状の本信写送付先や、募集要項に記載された内容にもあるとおり、外務省、日本海外協会連合会及び地方海外協会以外にも、当時の海外移住行政全体として他の省庁及び関連機関が、行政の意思決定から実務レベルにまで関わりを持っていたことがわかる[16]。

『海外農業移住募集送出予定地区概要　昭和 38 年度送出』（1963 年）は農林省農政局拓植課が作成した業務資料であり、冒頭の「はしがき」に、以下の記載がある。

昭和38年度送出予定の海外農業移住の受入地区は、現在27地区が考えられており、このうち受入の確定したものは21地区で、他は目下検討中のものである。

この概要書は、啓発募集事務の参考に資するために、受入の確定した地区について、主として地区募集要領にもとづき海協連、振興会社の資料も参酌して作成したものである。

内容は、受入の確定した21地区の受入計画と、各地区別の概要、入植計画、送出計画、営農の進め方などで、『昭和三十八年募集要項綴』に綴じられた募集要領のうち、農業移住については、すべて受入計画に該当する地区が含まれている。海外移住資料館の収蔵する当時の農業移住関連業務資料のうち、募集要領以外では、そのほとんどの作成元は農林省もしくはその関連機関である。

3.3　移住行政事務の根拠

実務レベルで複数の省庁及び関連機関が関わっていた状況について、各種業務資料から言及してきたが、各省庁の行う事務の根拠はどのようなものであったか。この点については、1954年の海外移住に関する事務調整についての閣議決定から、翌年の外務省移住局設置に伴う閣議了解、外務、農林両省事務次官覚書に見ることができる。

海外移住に関する事務調整について
昭和29年7月20日　閣議決定
1. 海外移住に関する主務官庁は外務省とする。但し農業移民の募集、選考、訓練及び現地技術調査は、外務、農林両省の所管とする。
2. 外務省内に移住関係官庁の連絡会を設け、各省事務の連絡統一を図るものとする。
3. 農業移民の募集、選考、訓練及び現地技術調査は農林省がこれを担当とする。
但し、右について農林省は主務官庁たる外務省との協議を必要とし、且つ、連絡会の決定に従うものとする。
4. 海外移住に関する事務の実施は民間団体たる日本海外協会連合会及びその組織団体たる地方海外協会をして国内国外を通じて一元的に行わしめるものとする。
5. 農業移民選考の最終決定は日本海外協会連合会が外務、農林両省の指示を受けてこれを決定する。
6. 日本海外協会連合会及び地方海外協会の法制化についてはすみやかにこれが実現を期する。

外務省に移住局を設置することに伴う件
昭和30年5月20日　閣議了解
海外移住に関する事務の調整については、昭和29年7月20日閣議決定によるのほか、なお下記によるものとする。
1.　農業移民には林、漁業移民をも含むものとする。
2.　海外移住に関する事務のうち、農林漁業以外の雇用移民の登録、あつ旋、技術補導ならびに募集に関する事務は、前記閣議決定1.および3.の趣旨により労働省が担当する。
職業安定機関ならびに日本海外協会連合会（地方海外協会を含む）は、海外移住に関する事務の実施について相互に協力するものとする。
3.　関係各省はその所掌事務に応じ、海外移住事務の円滑な遂行について協力するものとし、これがため所要の人事交流を考慮する。

4.　日本海外協会連合会（地方海外協会を含む）の主務官庁は外務省とする。
農林、労働その他の関係各省はそれぞれの所掌事務に応じ日本海外協会連合会（地方海外協会を含む）を指導監督し得るよう共管する。

「外務省に移住局を設置することに伴う閣議了解事項」に伴う農林漁業移民関する外務、農林両省事務次官覚書
昭和 30 年 5 月 17 日
農林漁業移民に関する両省共管の国内事務につき、その簡素明確化を期すると共に、両省間の事務連絡の円滑化を図るため下記のとおり協定する。
1.　外務、農林両省は農林漁業移民に関する諸情報を適時相互に連絡すること。
2.　外務省は、個別的具体的受入条件をなるべく速かに農林省に通報すること。農林省は、右通報に基ずいて募集、選考及び実務講習に関する要領を作成し、外務省と協議の上、これを決定すること。
3.　右の決定に基ずき農林漁業移民が移住あつせん所に入所するまでの間の募集、選考（最終決定を除く）、実務講習及びこれらに伴い必要な国内弘報の事務は農林省が責任をもって担当すること。
　従つて、都道府県及び海外協会連合会に対する右の事務についての指示、通ちようは農林省が行うこと。ただし、基本的重要事項については外務、農林両省の連名で行うこと。
4.　弘報宣伝及び国際教養講習の事務は外務省が責任をもって担当すること。
5.　農林漁業移民選考の最終決定については、外務、農林両省が共同して担当すること。

以上は、外務省と農林省[17]についての根拠となる閣議決定等であるが、農林省以外の通産省、労働省との間でも、事務次官通達や省間での了解事項等が文書で残されている。

おわりに

本報告では、戦後の海外移住事業を担ってきた国際協力機構へ連なる各機関の業務内容と当時の移住行政の状況について、海外移住資料館が収蔵する業務資料を中心に紹介してきた。

今日から遡って、国際協力事業団、海外移住事業団、日本海外協会連合会と、戦後の海外移住事業を担った公的機関が行った実務の記録としての業務資料の多くが、海外移住資料館に収蔵されており、それらは戦後の海外移住を研究するうえでの基本資料として、「背骨」にあたる資料群と言える。本報告では、その「背骨」を軸にして、戦後の海外移住再開当初における、複数の行政機関の関わりについて、その一端を紹介した。

図書資料室（海外移住）では、これらの業務資料を広く一般に公開し、調査研究への利用に供しており、海外移住資料館 web サイト[18]にて、業務資料や統計類などを中心とした基本資料リストも公開しているので、参照いただきたい。もちろん、収蔵資料全般を対象とした情報検索システムでも、検索が可能である。

註

[1] 図書資料室（海外移住）の入室者数は年間約 2,000 ～ 2,500 人。レファレンス対応は年間 2,000 件弱。情報照会等への対応は年間 1,000 件弱。情報照会のうち約 3 割は、ルーツ探しや消息調査などの問

い合わせである。

[2] 日本海外協会連合会の 1963 年当時の事業内容は以下のとおりである。

1)　啓蒙宣伝

・機関誌『海外移住』の発行（1954 年 2 月 20 日創刊）

・現地事情紹介のパンフレット、ポスター、募集要領などの印刷資料の作成配付

・映画、スライド類の作成公開、講演講習会、映画会、展示会などの開催

2)　募集選考

・地方海外協会などを通じて移住者を募集し最終選考を実施

3)　訓練講習

・適格移住者に対し、語学、教養、現地事情、農業・工業技術の訓練講習を実施

・農業移住希望の青年を対象に、営農技術、語学、現地事情等の訓練講習を実施。訓練講習施設として、1960 年、海外移住研修所を群馬県勢多郡宮城村大字赤城山（現群馬県前橋市）に設置

4)　送出事務および輸送

・移住者の渡航に必要な事務手続、渡航準備および輸送中の指導保護

5)　渡航費貸付および支度金交付

・渡航費の長期貸付および回収、支度金および国内集結費の支給

6)　現地援護

・現地到着後の通関、輸送の世話、営農、生活指導

7)　調査研究

・現地事情などに関する調査研究

・「雇用農実態調査」

・「農家経済調査」

8)　移住指導者の養成

9)　在内外移住関連団体との連絡提携

【資料】『海外移住事業団十年史』（海外移住事業団、1973 年）。

[3] 日本海外移住振興株式会社の事業内容は以下のとおり。

1）渡航費の貸付

2）融資業務

3）出資業務

4）入植地業務

自営開拓移住者の入植・営農の確立を目的とし、南米各国に日本人の移住適地を購入した。道路橋梁などの建設、入植農家の区画割、造成工事などを施して、日本からの移住者、またすでに現地移住している日本人に分譲していた。

【資料】『海外移住事業団十年史』（海外移住事業団、1973 年）、『海外移住読本　上巻　改訂版』（海外移住事業団、1965 年）。

[4] 1954 年から 1963 年の 10 年間に送り出された移住者数 53,560 人は、『海外移住事業団十年史』（海外移住事業団、1973 年）による。1952 年から 1993 年度末までの移住者数 73,035 人は、『海外移住統計』（国際協力事業団、1994 年）による。

[5] ブラジル・サンパウロ州周辺農村地帯の労働力不足によるコチア産業組合員の生産力減退を防ぐため、当時のコチア産業組合と日本の農業協同組合が提携して開始された制度。コチア組合員の農場にてブラジル農業の知識と経験を積ませたうえ、契約期間終了後は自営農民として独立させ、

ブラジル農業の発展に寄与せしめることを目的とした。1955 年に単独青年移民の受入れが戦後始めて開始され、1959 年 7 月より夫婦、1961 年 12 月より家族の受入れを行うようになった。
【資料】『ブラジル国コチア産業組合扱移住者（単身、夫婦、家族）募集要領』（日本海外協会連合会／全国農業協同組合中央会、発行年不明）。

6 海外移住事業団の事業内容は以下のとおり。

1）　海外移住に関する調査

・国内における移住希望者の動向分析

・国外における関係諸国の法制、政治、経済および社会情勢の把握、入植地の適地調査、農産物の市場調査および移住者の経済調査等

2）　海外移住に関する知識の普及

3）　海外移住の相談及びあっせん

4）　移住者への訓練講習、渡航費貸付、渡航費支給、支度金支給

・移住希望者に対する職業別技術及び知識の修得、外国語の研修等の訓練・講習の実施（農業移住者、技術移住者、婦人移住者、カナダ移住者等、コース別）

・移住者子弟の本邦における技術研修

5）　移住者渡航の際の宿泊施設提供、引率、その他の指導援助

6）　移住者の事業、職業及び生活一般の相談援助

・試験農場の運営

・移住者の経営状態、市場問題および生活実態を把握、分析し、今後の移住者指導、援護の方向付けに資するための調査として、「農家経営調査」、「市場調査」、「雇用農業移住者の実態調査」などを実施

・機械類の貸与

・技術移住センターの運営

7）　移住者定着のための福祉施設整備その他の援助

・医療衛生：診療所の設置、巡回診療、予防衛生知識の普及、医師、看護師の育成等

・教育：小中学校の建設、教師確保、教材整備、奨学金交付、青年教育、日本語教育等

・生活改善普及指導、公民館建設補助

・自治組織育成指導、農業協同組合業務の円滑な推進

・移住地道路補修改善、集団移住地電化助成等

8）　入植地取得、造成、管理、譲渡及び取得のあっせん

9）　移住者及びその団体に対する農業、漁業、工業等の事業資金貸付及び事業資金借入に係る債務の保証

10）　移住者を受入れる農業、漁業、工業、その他の事業に対する移住者受入れ関係所要資金の貸付

【資料】海外移住事業団法（第 21 条）、『海外移住事業団 1972』（海外移住事業団、1972 年）

7 海外移住センター

1928 年、内務省社会局所管「神戸移民収容所」として設立、翌年拓務省へ移管。1932 年「神戸移住教養所」に改称、1941 年、戦時のため閉鎖。1945 年、外務省に移管され、1952 年「神戸移住斡旋所」と改称され再開された。横浜では、1956 年、神奈川県横浜市中区に「横浜移住斡旋所」が開所。1961 年、同磯子区に移転。1964 年、神戸移住斡旋所および横浜移住斡旋所は、外務省から海外移住事業団に移管され、「神戸移住センター」、「横浜移住センター」と改称、海外移住事業

団の付属機関となった。神戸移住センターは、1971 年に閉鎖された。

横浜移住センターは、神戸移住センター閉鎖と同時に「海外移住センター」に改称され、移住センターは一元化された。2002 年、「神奈川国際水産研修センター」と統合され、「横浜国際センター」が新設された。

移住センター開設当初は、移住者の乗船準備及び渡航前の訓練講習の場であったが、1971 年の「移住者子弟技術研修制度」による研修員の受入、1985 年の「海外開発青年」の派遣前訓練の実施などが、移住センターで行われるようになった。それらの事業は現在、「日系研修員制度」「日系社会ボランティア制度」に改組されて以降も、引き続き行われている。

【資料】『海外移住事業団十年史』（海外移住事業団、1973 年）、『海外移住センター業務概要』（国際協力事業団、2001 年）。

[8] 沖縄移住業務の引継

日本とアメリカ合衆国の合意にもとづき、沖縄等における海外移住業務を海外移住事業団が取り扱うことが決定し、1967 年、那覇市に事務所を設置するとともに、ボリビア国沖縄移住地の管理も海外移住事業団で行うことになった。

【資料】『海外移住事業団 1972』（海外移住事業団、1972 年）。

[9] 47 あった地方事務所は、1973 年までに 12 支部として統合された。

[10] 1956 年、日本海外移住振興株式会社の出資により、「ジャミック移植民有限責任持分会社（ジャミック）」「イジュウシンコウ信用金融投資有限責任持分会社（イジュウシンコウ）」の 2 つの現地法人がブラジルに設立された。ブラジルの経済社会情勢の変化を背景とする外国移住者受入政策の変更に伴い、両法人がブラジル国民法に抵触するとして、ブラジル政府より撤退を要請され、1981 年に解散した。

【資料】『ジャミック移植民有限責任持分会社ジェミス金融株式会社業績史』（国際協力事業団、1988 年）。

[11] 1977 年、オーストラリア大使館から、日本人移住者積極的受入れ方針が表明された。それを受けて、翌年、キャンベラに駐在員事務所が開設。同年、海外移住センターにおいて第 1 回目のオーストラリア移住者訓練講習が行われた。

【資料】『国際協力事業団年報』（国際協力事業団、1979 年）。

[12] 1996 年以降、移住事業として実施してきた業務のうち技術協力の性格が強い業務は、技術協力事業として再編された。「日系人を通じた技術協力」として、技術協力事業予算に組み替えられた主な事業は以下のとおり。

・移住研修員受入れ事業から日系研修員受入れ事業へ
・移住専門家派遣事業から日系社会専門家派遣事業へ
・移住シニア専門家派遣事業から日系社会シニア協力専門家派遣事業へ
・海外開発青年派遣事業から日系社会青年ボランティア派遣事業へ

また移住者を技術協力専門家として活用したり、非日本国籍者であっても高度な技術を持つ日系人を第三国専門家として派遣する制度を 1997 年に創設するなど、技術協力事業の効果的、効率的な実施を図るうえで日系人は重要な役割を果たすようになった。

【資料】『国際協力事業団年報』（国際協力事業団、1997 年）、『国際協力事業団二十五年史』（国際協力事業団、1999 年）。

[13] 【資料】国際協力機構法（第 3 条）。

[14] 『移住執務提要　改訂版』では、「移住者の受入国との間で、具体的に移住者を日本から送出する

時期、輸送方法、受入条件等が定められると、海協連（著者注：日本海外協会連合会の略称）はこれらを要約して「移住者募集要項」とし、各地方海協（著者注：各地方海外協会）に送付する。そして、各地方海協では、かねて啓蒙宣伝等の広報活動の際、調査して置いた移住希望者の相当ありそうな地方を重点的に選んで募集要項を発送するとか、あるいは移住相談なりその他の機会なりに予備登録しておいた人々に照会するとか、地方新聞、府県の広報機関紙、ラジオ等々を通じて広く一般に呼びかける方法をとる。」と記載されている。一方、募集に関する具体的な内容について書かれている箇所では、移住事業に携わる者へ配られる資料として「募集要領」と記載されている。また、当時、移住地、募集形態ごとに作成されていた、移住者募集に関する業務資料は「募集要領」という名称で発行されている。収蔵資料に「募集要項」と記載された資料がないため、現時点での推測ではあるが、当時は「要領」と「要項」を明確に区別して統一的に運用していなかった可能性がある。

【資料】『移住執務提要　改訂版』（日本海外協会連合会、1959 年）。

[15] ④には「本信写送付先」の記載はない。

[16] 外務省以外の行政機関及び関連機関の作成した業務資料の例（海外移住資料館収蔵）。

『海外農業移住資料』（農林省農地局管理部開拓拓植課、1968 年）

『ブラジル結婚希望者斡旋要領並びに花嫁移住者講習会実施要項』（全国拓植農業協同組合連合会発行年不明）

『ブラジル農協青年移住の栞』（全国拓植農業協同組合連合会、1976 年）

『農業拓植基金関係規定集改訂版』（中央農業拓植基金協会、1964 年）

『産業開発青年隊訓練計画書』（建設省建設大学校中央訓練所、1972 年）

『各国の移住政策』（労働省大臣官房国際労働課職業安定局、1967 年）など。

[17] 当時の農業移住行政については、『戦後海外農業移住の所管と機構：農業拓植史資料　第 1 冊』（農業拓植協会、1965 年）、『戦後海外農業移住の所管と機構：農業拓植史資料　第 2 冊』（農業拓植協会、1966 年）が詳しい。

[18] URL：http://www.jomm.jp/library/lib_materials.html

Introducing the Operational Documents and Other Materials Prepared by Working Agencies in Charge of Postwar Japanese Overseas Migration and Stored in the Japanese Overseas Migration Museum

Shinji Okano, Yukiko Watanabe (Japanese Overseas Migration Museum)

The history of postwar Japanese overseas migration began in 1952 with immigration into the Amazon Basin. Agencies in charge of implementing the postwar Japanese overseas migration program prepared various kinds of operational documents on its achievements. This report overviews the developments of the postwar Japanese overseas migration program with regard to these operational documents stored in the Japanese Overseas Migration Museum. It then reviews the operations in those days as based on a certain operational document on the recruitment of settlers, along with the prevailing social background.

Keywords : Postwar overseas migration, The Federation of Japan Overseas Associations, Japan Emigration Promotion Co.,Ltd., Japan Emigration Service, JEMIS, Japan International Cooperation Agency, JICA

“Last Notes” by Takeo Sugano (1) : The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become “Japanese” in Japan

Toshio Yanagida (Keio University)

This is a reprint and glimpse of part of an essay entitled "Last Notes" authored by Takeo Sugano, a second-generation Japanese-American. Sugano had begun writing this essay as a student at Waseda University on September 23, 1943, when the restriction on drafting students was lifted, and then finished it postwar on January 12, 1946. In his Last Notes, Sugano shares with us his long thoughtful life experiences as a second-generation Japanese-American, from his birth in the U.S., through two trips to Japan, college life in Japan and military duty there, up until the end of the war. The notes were intended for his parents and brothers back in the U.S. as he braced for his own death, with the day for his going to the battlefield rapidly approaching. After the war, the notes wrap up with a summary insight into the social conditions in Shinano-Omachi, Nagano, at that time, along with his own thoughts on the future of Japan. This is a precious piece of historical literature that illustrates in a soul-searching manner how a second-generation Japanese-American would grow into a "true Japanese."

Keywords: Japanese, second-generation Japanese-American, student mobilization, diary

急返事をとの事で、増田弁護士、内本日本人会長等に相談する。要はシカゴ新報も資金難の点もあり、一考を要する」「１９８１年７月18日（土）午後より、シカゴ新報の経営について、総会の席上、菅野に六千弗にて渡すとの事で、一応引き受ける。無収入の上に、社会奉士（ママ）となり、現在１５００部の部数で果して採算がとれるかの問題があるが、結局は休刊とするかとの問題もあり、引き受けざるを得なくなった。一年間に支店開設と新聞社の経営、二重の負担となったわけである」「１９８１年８月１日（土）本日よりシカゴ新報を引き続（ママ）ぐ事となり、社長に就任する。［オヘア空港支店］店内の改築を行ふ費用として約３千弗計上。」「10月２日（金）銀行の支払が毎週となり、運転資金の不足に問題があり、会社に請求書未払の督促状を出す様にした。但し、日本式事業には、アメリカに於いては困難である事を痛感する。」と本業の資金難にもかかわらず、菅野は無収入の上に、社会奉仕となるシカゴ新報の経営を引き受けたのである。また、『シカゴ新報』新社長としての菅野は、経営の刷新をはかるとともに、当時移民研究者として名を馳せていた伊藤一男を同紙の東京特派員に任じたという。奥泉栄三郎「『シカゴ新報』と日系社会⑨」（『在北米日本人研究の栞』第二八号、文生書院、二〇〇八年一二月、一～七頁）。

（5）『シカゴ日系百年史』は一九八六年四月にシカゴ日系人協会により刊行されている。

（6）菅野武雄「わが人生に酬いなし」（『在北米日本人研究の栞』第二九号、文生書院、二〇〇九年一月、一八～二一頁）では、一九三六年、日本からアメリカに戻った当時についての回想をまとめている。

（7）「最後の手記」原本を挟み込んだ紙製フォルダーには、菅野の自筆で「学徒出陣に際して、在米の両親、兄弟に送るため、最後の手記として書きました。　シカゴ在住　一九九二年五月　菅野武雄。伊藤様に御送り申します」と表書きされており、その下に伊藤が、一九九二年五月三〇日受領」と書き記している。菅野はその二年余り後の、一九九四年十一月死去している。菅野から伊藤への本手記の送付の経緯については、具体的な事情を明らかにする史料を伊藤一男関係資料の中からは見い出すことはできない。また、伊藤が何らかの形でこの手記を利用、公開した形跡はいまのところ確認できていない。

（8）菅野武雄述・奥泉栄三郎編「ニッポンの十五年」その一（『在北米日本人研究の栞』第三八～四〇号、文生書院、二〇〇九年一〇～一二月、九～四六頁）。その二（第四一～四三号、二〇一〇年一～三月、一〇～二一頁）。その他、『在北米日本人研究の栞』のそれぞれ三〇号、二〇〇九年二月、三一～三四頁。三一号、二〇〇九年三月、二六～三二頁。三二号、二〇〇九年四月、四八～四九頁。三三号、二〇〇九年五月、三四～三九頁。三四～三七号、二〇〇九年六～九月、一六～二三頁に、菅野の写真、記録などの関係資料が奥泉の解説をつけて掲載されている。

（9）「最後の手記」pp.376-377

（10）翻刻にあたっては、旧字等は常用漢字に直し、句読点については一部翻刻者が補ったが、できる限り原本に従った。

七十幾年、我が海運業の発展と共に、次第に船舶の数も増え、此の大平洋を横断する船客もおびたゞしい数に及んで来たのである。永遠に平和たるべき此の大平洋に［三十九葉］【p.59】波風荒き日来ると誰が予測し得たであらうか。今や日米間の風雲急を告げるとは言へ、丁度一年後の十二月八日、此の大平洋上に、今余の航する此の海が一大決戦場と化するとは神ならぬ身の余自身知る事を得なかったのである。だが船は今静かに航して居る。南米依り帰国する邦人が大多数を示め、北米からの邦人は極小数であった。移民として送られ、今又戦乱の巷から幾多の悲劇を味はひつゝ、不屈不撓の伝統的意志を受け継いで遙か万里の彼方依り、なつか【p.60】しい故郷山の空を夢見つゝ、二月余りを彼等は帰って来たのである。一攫千金を夢見て巣立つた人が多い当時に於いて、功なり、名を成して帰る人もあったであらう。然し又其の夢も破れて、淋しく故山に一人孤独の身を幾十年振りに横たへる人も幾何か。千差万別の思ひを乗せて船は横浜に向ひつゝあったのである。だが祖国に帰る喜こびは誰れしも同じ想ひであったであらう。祖国こそ喜こんで我々を迎へ入れて呉れるであらう。噫々、この日上陸の日こそ、余にと［四十葉］【p.61】つて生涯の中最も喜ばしき日であったのである。房総半島依り静かに横須賀沖を廻り、秀額真白き雪を載く富士の姿、我故国に帰るの思ひ一汐であった。祖先の生れ、祖先の血を持つて外敵依り守り来たった此の土地、再び帰るを得たのであった。横浜の姿は変らなかった。だが人が、眼が、足が、口が、総べて変つて居た。戦時下の日本、闘へる日本、それが真の姿なのだ。祖国の姿なのだ。昭和十一年春未だ、自由主義の残存多く、階級闘争華かな時代の余影消えやらず【p.62】五・一五事件、二・二六事件の血気の陸海士官の行動も無意味に終らずべくもなく、次第に粛正されつゝあったが、資本家の独占的自由主義未だ盛んに、国民の精神生活の頽廃眼に余りありし頃依り比して異様の変り様であった。人は緊張し、眼は自己の職分に集中され、足は戦線に向けられ、口は聖戦完遂を張強張し、真に一人の遊客あるを思はせられなかった。自動車は場車に、自動人力車にリヤカに代へられ、満四年半後に於ける十六年十二月一日の今日、余は思はず襟を正さし［四十一葉］【p.63】められたのであった。

註

（1）岡野伸治「伊藤一男関係資料整理状況について」（『JICA横浜海外移住資料館研究紀要五』、二〇一〇年、一〇一～一〇七頁。なお、菅野による本手記と、ノモンハン事件での従軍体験を持つ須見新一郎による自伝「いたつら小僧日記　巻二」の二点の史料は、整理作業の中で別置史料とされていたため、岡野報告では言及されていない。

（2）五種類の四百字詰め原稿用紙二百八枚、無地藁半紙七枚、都合二百十五枚に書かれている。原稿用紙は、特別な印刷のないもの、「KY特製」「マルコク」「WASEDA UNIV」「精神科学研究所出版部」などの印刷がされているものなど五種類が利用されている。

（3）菅野武雄自筆による「菅野武雄履歴」、「日記抄」（菅野家所蔵）などによる。

（4）業務打合せ関係メモ（菅野家所蔵）には、前年一〇月一七日のオヘア空港支店開設以降の会社の窮状について、「1981年1月5日（日）オヘア支店開設と同時に、資金難に苦しむ。（中略）このまま継続は困難であり、自転車操業の道を辿りつつあり。資金難に苦しむことおびただしい。方法を考へねばならない」と記録している。しかし、「1981年5月9日（金）シカゴ新報の杉本幸八郎社長90才に近くシカゴ新報の経営に困難を来たし、引き受けられるか否かの相談を受ける。来る7月中旬の総会迄に至

恐異を感んじて居った事は事実であるが、機械文明の中に決して精神的優位性は見られなかったのである。日支事変後とみに日本に対する与論は悪化し、軍拡に、戦争にと次第に露骨に敵対抗行為を示して参り、機械力へと総べては集中され、飛行機五万台、陸軍一千万人、戦車十二万台等々数次に於いて天文学的軍拡を示して来た事は、余にとっては見逃す事が出来ない問【p.53】題であったにしろ、然しその精神力に於いては、決して恐るべきものはなかったのである。

当次二六〇〇年（昭和十五年）来、次第に国民皆兵の制になり二十一才以上、三十五才迄徴兵する事となり、アメリカ市民権を有する余も又徴兵登録の義務ありとなし、同年十月二十九日カンプトン市に於いて『二四九三番』の番号を受けねばならぬ事は、余にとって屈辱であった。だが徴兵登録を忌避し、軍法会議、罪金刑に処せられ獄舎生活を送る依りは、寧ろ一時の辛抱に依りこれ依り逃れるが最[三十六葉]【p.54】上の方法と信じ、十一月七日身体検査を受け甲種合格となれも、又皮肉なる現象と思ふのである。当時、既に余はアメリカ依りの脱走を希し、機会を伺って居ったのである。尓、六月卒業後両親の懇願にて長兄の後を継いで花市場通ひをなして居た余は、朝未明一時頃依り起き出で、夜十時就床の生活をして居たのであるが、半ヶ年に及ぶかゝる生活の中に、次第に其の帰国の機を失する事を恐れ、十一月初め依り徴兵係事務所に行き帰国の許可を申請する事七度、漸くにして手続きを偽【p.55】造し其の許可を得たのであったが、船舶は途絶之勝であり、先に乗船せる船客はサンフランシスコ、ハイレ等にて下船せしめられ、全く帰国不能となったのである。然し余は、益々決意強固にその機会をねらひたま〳〵サンピドル港に来港せる日本郵船会社のブエノエアイレス丸来港するを知り、サンピドル出航港後横浜向直通なるを知り、同船に乗船する事を計画し、遂に十二月十三日午後五時出帆する事を得たのである。

只其れも両親、家族の者のみ打ち明ち、近隣友［三十七葉］【p.56】人奥人にさへ話す事を得なかったのである。次兄に対し、只電話を以つて帰国する事を話し、サンピドル港に送る者只兄弟のみであった。来年帰国する予定たりし両親、弟二人とは直一年たてば会へる事と信じ、永遠の別れになる事とは夢にも考へられなかった。門口に送る老ひし母の顔、義姉の顔、叔父叔母の顔、三年後の今日に至つても尚眼依り忘れる事は出来ないのである。

移民用官の眼依り逃れて乗船せる者、余を除いては一名のみであった。帰国せる老人客、十二【p.57】才未満の者は国外脱出の制限を受けざりしも、制限を受けし者の中逃れる事を得たのは僅かニ名、最後にアメリカを離れた者であるであらうと予想されるのである。満四年半の滞米生活、温き両親、兄弟に振れ生活したのも、余の半生を通じて余の幼年時代を除いては僅か四年半であったのである。それが最後の家庭的平和の生活であった。サンピドル港に行く迄、ハンドルを握って余自ら自動車を操縦したのがアメリカに於ける最後の日であ生活であり、又最後の日であった。黄昏のサンピドルの港を離れ行く時［三十八葉］【p.57a】遠くロスアンゼルス市の夕灯影が輝き、港依り僅か三、四里の地の小丘き丘に居はすたらちねの御姿偲べば一人淋わびしく、甲板にたゝつ余のホホを濡らすのであった。過去の思ひに、胸せまりき。波頭に立ち見送る兄弟、従弟妹の顔は小さく、夕暗に消えて行き、去り難き思ひも一汐、たゞ己れが使命に目覚めせしめられ、心強くも甲板に立ち両親、兄弟、知人、友人に別れを告げたのであった。船は次第に陸地を離れ、静けき師走の夕半に波の音のみ聞え、西へ〳〵と故国目指して行く中【p.58】に、次第に、堅きベッドの中にうつゝともなく眠りに落ちて行ったのである。時昭和十五年十二月十三日、二十二歳の冬である。

第六章　帰国上陸第十歩　祖国への旅　帰朝の旅

明くれば十四日、船は西へ〳〵と航するのであった。明治初年以来

一六

惟ふに、これは人種的偏見に捉はれた白色人種何れもが、其の偏見と共に日本民族の興隆と躍進とに不安を感じ、百方其の躍進を阻止すべく画策しつゝある現状であります。

嘗て、日本の使臣がジュネーブに於ける国際会議の席上、人種平等論を提唱して列強からして容れられなかった事は、かうした人種的偏見の然らしめたものであり、異人種殊に白人対東洋【p.50 の 4】人間の人種的偏見は実際理論を超越したる一種の原始的潜在意識の表現であって、一朝一夕に其の根強い感情の錯誤を洗滌する事は不可能であります。

由来人間の社会的生活は、単に法律的拘束に依ってのみ成立するものではなく、個性と個性との緊密なる接触によって精神的に結合する事が、完全なる集団生活の第一要素であります。故に此の精神的結合が特に人種的偏見に捉はれたる異人種間に於て、完全なる了解を得る事は極めて至難である事は言を俟たないのであります。故に我々は、不屈不撓、其打開に邁進すべきは当然であります。

茲に於て、私は常日頃父兄より武士道の精華として犠牲的精神が如何ばかり高潔なるものであるかを聞かされて居ります。「士は己を知る者の為に死す」とか、「海ゆかば水づく屍、山ゆかば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、かへり見はせじ」とは、日本民族が生死を超越して犠牲的精神を讃美し高潮したる［三十三葉］【p.50 の 5】天下の至言であると思ふのであります。

諸君―極東に於ける渺々たる一小帝国が今日の大をなしたのも、即ち此の犠牲的精神、死線をも突破する没我的日本精神の現はれが一大原因であると思ふのであります。見よ！かの壮烈鬼神をも泣かす爆弾三勇士の最後を！然るに、今日の大をなした日本国民を以て、欧米諸国は一個の好戦国民と誤解してゐるのであります。

然し日本は、遠くは元寇の戦、日清日露は勿論、今次の日支事変に至るまで、未だ嘗て征服を以て敢行したる事なく、何れも大義名分に於て毫も恥ずる処なき義戦であり、此の純潔なる犠牲的精神の発露なのであります。然り、吾々は日本民族伝統の此の犠牲的精神を以て献身的に米国に対する愛国の至誠を披瀝し、日米精神文化融合に努め、両国民族永遠の友好関係を調整すべき堅き信念と使命とを根幹として、吾々日本人第二世が単に頭脳の優秀であるのみな【p.50 の 6】らず「天照大神」神代より二千六百年平和と人類愛を信条として、伝統的日本精神に培はれ来った日系市民たる事を実を以て発揚し、人種的偏見の誤まれる事を認識せしめると共に、日本民族の真髄を強く、より強く、彼等の根底に植えつけねばならぬと信ずる者であります。

然も此の使命は、第一世より第二世に引き継がれたる義務と言はんよりは寧ろ、日本民族として血を享けたる者に対し東洋十億の有色人種の指導者として、天より与へられたる使命であると確信する者であります。

さらば諸君、我々は米国の優良なる日系市民として、この日本的理想と精神のもとに、我々の使命遂行に邁進せんことを絶叫して、この栄えある壇を降壇する次第であります。御静聴有難う御座いました。』［三十四葉に戻る］【p.50】然し乍ら一青年の叫びは、大海に一石を投じた如く、如何ん共仕難く、その道は難く、肉体的に精神的に過度の労働はあり、若弱輩漸く二十を越す事二に【p.51】して、昭和十五年（二六〇〇年）六月カンプトンジュニア（初等）カレーヂ（大学）を卒業する事が出来ねた。直ちに帰国せねばせんとした決意も、両親の懇願の為断念せねばならなかったのである。労働の結果、幾何かの貯金を得、故国の大学への入学の志望止み難く、早稲田大学政経講義録全完二十四巻を取り寄せ、業務の予暇（ママ）読破して一人楽んで居たのであった。自由主義万能時代のアメリカ依ねり余ねの得る所は、単なる快楽主義、個人主義的資本家の野望、金権主義的猶太精神、悲（ママ）家族主義であり、余にとっては満足し得るもの［三十五葉］【p.52】はなかったのである。機械文明の優秀性には驚嘆せざるを得なかったのであるが、そして又、最も

る祖国日本の実力」、浅沼稲次郎代議士「東亜新秩序建設」、民政党北昤吉代議士「日支事変の将来」、陸軍少将大場弥平「戦乱の欧州を巡りて」等々幾多の内地依り来たれる名士の講演を聞き、刺戟され鼓舞され、他日の為にそなへ勉学を続ける事は忘れなかったのである。

翌十三年『時局に鑑みて吾人の覚悟を述べん』と題し、又『二世の立場依り見たる日支問題』と題し、我々在米日本人が真に米英人に対し、日本の支問題の真想を説く事が吾々に現在与へられたる義【p.49】務であると信ずる侭に述べたのであった。

邦人子弟依りなる青年会を起し会長となり、率先して仕事の側ら剣道に、弁論に、精神的結合に働微力を尽し、又故国皇軍への雑誌、慰問金、恤兵金を募集し、日本人の一致協力、尽忠の精神こそ、真に涙ぐましきものであった。恵まれぬ境遇に生きるには、精神的融和以外の何ものもないのである。其れを結ぶものは、民族的結合、忠君愛国の至誠である。神州不滅の確信こそ、この融和統一の中に生れ来るものである事を信ずるのである。

［この間に1950年3月2日の日めくりカレンダー（白紙）あり］

［三十四葉］【p.50】翌十四年十一月、ロサンゼルス市に於いて『日本的精神と理想』と題し所信の一端を述べ、天孫降臨の御神勅こそ日本建国の大理想であり、八紘為宇の精神こそ世界永遠の平和の大理根本理念たる事を説き、その使命こそ我々に化せられたる物義務にして、この時局の真只中に今やこの大理想を負ひて日米間の平和を維持すべきに乗出さねばならぬと説いたのである。

［三十一葉：挿入］【p.50の1】

茲に少し長文に失するが、記して置きたいと思ふのである。

『諸君―世界の歴史を繙いて見る時、如何なる国家にも民族の持つ独特の伝説、並に精神を見い出すのであります。而して此等の伝説と精神は、各々其の民族の誇りとする処であり、多数民族が一集団を成す場合に於て最も明確に示される現象であります。故に民族の持つ伝説と精神とに対しては、各々尊敬の念を以て伝統的により強く存続し、民族的潜在意識となって物心両方面に躍動して居るのであります。

我等の両親の生れたる皇統連綿として二千五百九十九年の歴史を持つ日本は、其の民族の一人々々が平和の女神であらせ給ふ天照大神を伝統的に崇拝し、平和と人類愛を唯一の信条となし、純潔且高遠なる理想の許に、今や一大国【p.50の2】家として世界に雄飛しつゝあるのであります。

此れを支那の如く、自ら中華と称し、排他的精神のもとに培はれ来った民族、亦西班牙の如く往時北方の蛮族に依って与へられたる圧迫と苦痛から解放され安逸夢の国ユーソヒヤを夢見つゝ退嬰的に培はれ来たる民族、更に英国は征服と侵略とを以て其の核心となし、露西亜の其は圧迫と反抗とで組立てられ、仏国に至っては淫蕩の記録を其根幹とする事である事は、蓋し多言を要しないのであります。

然るに、日本が世界に雄飛すべし得るに至った其遠因が如何に純潔であり、且高遠なる理想を実体とせらるゝ天照大神の伝説並に精神に由来する事を見出す時、我々二世は五色彩雲、面に燦として輝く、日本民族の旭光を仰ぎ見るのであります。然して、此光輝ある日本民族の血を享け、先駆者の熱烈なる民族精神と進取の伝統を満身に受け継ぎ、この北米の新天地に日系市民として生れし限りなき誇と力強さを感［三十二葉］【p.50の3】ずるのであります。

然し乍ら諸君、茲に我々第二世の将来を静観する時、必ずしも前途春の海の如く洋々たるものではなく、否寧ろ幾多の難関が横はり居る事を覚悟せざるを得ないのであります。

現在我々は日系市民として、他の市民と同様総ての権利を享有して居りますが、我等が東洋人であり、日本人である事が人種的に見て種々雑多の場合に於て曲解され易き立場にある事は否定出来なく、従って人種的に見て、かくの如きハンデキャップを持たねばならぬのであります。

威の基いにである存はしますのである。世界を以って為家となすの大理想の精神は、我が国建国の御精神にまし〳〵、世界統治の理念は征服にましまさず、皇化にまします事は有難き極み【p.42】に在しますのである。大御稜威に欲する世界の民こそ、永久不変、平和に生きらるゝ事は、我が日本に於いて外にはないのである。始めて見らるゝのである。然るに、猶太的悪魔の神エホバの民の選民思想は排他的であり、不悲道徳的であり、傲慢であり、一として我々の入れられざる所である事は、この八紘為宇の大理想に生きる大和民族として断じて許せざる存在なのである。其の一の現はれとして、殖民地時代依り発生誕せするアメリカの一角に於いて衝突せざるを得ない事は、決してかゝる存在［二十七葉］【p.42a】を許す事が出来難い由所からである。然し我が在留同胞の数は、当時日本人系子弟を合せても三十万に足らず、且つ又明治初年以来の移民の為、確固たる基盤社会を形成する余裕なく、其の圧迫に抗せざるを得ないも万止むを得め事なのである。然し其の内心の苦闘こそ、他日此の小数民族に対し徹底的に、世界平和の革乱者とし断固神国日本、大和民族の手に依り膺懲の鉄槌を加ふべき秋来るは当然近き事と確信ずけられて居ったのである。起つべき秋に起き一端緩急【p.43】あらば義勇公に報ずの精神こそ、日本民族の特質なのである。忍従と堪忍は日本民族のみ知る武士道の精神である。在留同胞の苦難の道は、二五九八年、九九年益々其の度は加はつて行ったのである。然し、出来得る限り堪へ忍ぶ事は忘れなかったのである。民族を異にすれば、それは卑屈、臆病、無力とも見られ様、然し我々の鉄石心は飽く迄平穏の裡に事を解決せん事を念願して居たのである。然しこの事は白色人社会には通種にとっては分からぬ事であった。

［二十八葉］【p.44】 第五章　排日支事変

昭和十七年（二五九七年）七月七日、余の渡米後一年有余にして遂に排日、抗日に基其の端を発した日支間に於ける衝突は、支那兵の不法射撃に依り盧構橋に戦は開かれたのであった。

異郷に於いて皇軍の連戦連勝のニュースを聞く程嬉しい事、喜こばしい事は又とないものである。上海占領、蕭除州、南京陥落、庚東占領次々と電波を通じて送らるゝ「快報」、我知らず胸をどるものであったのである。

【p.45】然し戦の裡に又悲報は一汐胸打つものであったのである。ノモンハンに張古峯に於ける皇軍の苦戦を耳にし、幾多の尊き犠牲の名を聞く時、余は人知れず悲しみに、小学校の同窓、中学の上級生、又級友の名を叫び、遙か故国の空、故郷の山河に思ひを馳せるのであった。だが一度去りし護国の英霊は再び帰らず。余の故山に帰るの日我を待つ友は靖国の森に神となり祭られ居るのである。余も又今故国に在りせば銃をとり、第一線に活躍し居るに、在米外徴集猶予の恩典に欲浴し［二十九葉］【p.46】いかで徒に自己生命を生き長へられ様。今こそ余の使命を絶叫すべきと心中深く期したのである。其れには自己の信念を説く以外ない事と信じ、演説の練習を開始したのも当時の事である。だが余自身、小学校当時依り壇上に立つ事さへ恐しかったのが、どうして人に話す事が出来様。余の夜深更に至る迄、丘の一角に立ちて広野に絶叫する事二ヶ月余り、真険なる練習の果ありて、漸く壇上に立つ自信を得、同十二年八月『吾等第二世の使命』と題し、思ふが侭に話す事を得、吾々日本人として行くべき道は飽く迄日本精神、祖国の伝統【p.47】を継承する事にあると絶叫したのである。

そして又、当時アメリカに旅行し来れる日本の名士に面接を求め、教へを受け、講演会に出席し、総ゆる機会に見聞を広めて行ったのも当時である。主婦の友社の山田わか女史、東京玉川学園長小原国芳氏、代議士中野正剛氏の『日本に立ちて世界の大勢を見る』、剣道にては高野師範、社会大衆党阿部成夫代議士、『日露丸山鶴吉閣下、松田竹千代代議士の「日支事変を巡りて」、星一代議士「日支事変の真只中に南米を視察して」、船田中代［三十葉］【p.48】議士「事変下に於け

一三

問題として強調これの改善化を【p.34】強調されないのであらうか。これこそ仮面を被れる米白色人種、特に英猶太人の正体なのである。逆言すればアメリカの正体なのである。茲に所謂る深刻なるアメリカ自体内に於ける民族戦争、人種的優秀性を見る事なくしては此の問題は解決される事はなかったのである。我々余りにもアメリカの外面に迷はされ、その裏面に動きつゝある国際猶太人の正体を知る事が出来なかった事は、過去の我が国の外交史上、明治開港以来の最大なる打撃であり、屈辱であ［二十三葉］【p.35】あったのである。だが、今こそ其の正体を見る事に依って、此の問題も安易平和に、然し其処には、民族的闘争、人種戦、細分すれば経済戦、宗教戦、文化戦と予想されつゝも、其の過程を経る事に依って、我々の最も悩んだ当時の問題は解決されるであらうと確信づけられたのである。アメリカ国内に於ける猶太の勢力は、猶太研究家にとっては既に知名なる問題である。民族性政治界、経済界、宗教、文化、教育、映画は勿論、宣伝に、新聞、ラジオ其の支配的勢力の及ばざる所一としてなく、其の数僅か五百万と謂れる【p.36】小数民族を以って、一億五千万に及ぶ他種族を支配し、煽動し行くを思へば、慄然とせざるを得ないのである。此の少数民族に依る世界の金権的支配は余りに有名なる事実であり、こゝに付言する必要は何等認めないが、世界の金の九割をしめ、然してその九割八部をアメリカの一山中に秘蔵し居ると言ふ事実も又、その側歴然たる証拠なのである。然らば何故此の少数民族がかゝる超民族的勢力を有し居るかは我々の知らんと欲する所であり、其れに対処する事も［二十四葉］【p.37】又我々にとって研究すべき價値あるものと信んずるのである。次第に此の小数民族に関心を有して行き、又事実に於いて批判分析する事を得た事は、世界余の政治的見解に対し大いに貢献していった事は明らである。彼等の意図する所は、タルムードを唯一の聖典とし、唯一の神、エホバの基礎を信じ、世界転覆、革命、革乱を手段とする一大復讐であり、世界的征服大陰謀に外ならないのである。

然し、余自身も又初期に於いては此の事実を信ずる事は出来なかった。否寧ろ信ずる【p.38】と言ふ依りは、現実の問題としては否定されざるを得なかった。果してかゝる事実が世界の歴史上に過去に存在して行たであらうか。其れは余りにも空想家の夢物語りであり、驚異であり、恐怖であり、戦慄すべき事柄であるが故である。果してかゝる事実が世界に存在し居ると言ふならば、実に恐るべき事実である。余は日夜内悶せざるを得なかったと共に、興味を以って文献を読破し、歴史の裏面、外交、政治、経済、教育に於ける悲劇的事件を悉密に研究して行ったのである。［二十五葉］【p.39】其の結果は、余は其の事実を信ぜざるを得なかったのである。我々の謎は解けたのである。正面の敵は猶太以外の何物でもなかったのである。当時に於けるアメリカの政治、経済、文化総べては、既に猶太財閥に握られて居ったのである。

国際問題の陰には、常に猶太の魔手はのびて居たのである。幾ら我々日本人が英雄的存在を以って、悲憤慷慨しても、彼等の魔手には断固として及びもつかなかったのである。黄色人種の移入禁止を始め、人種的偏見は勿論、土地【p.40】貸借売買の禁止、白色人種との結婚禁止、住宅制限地域外の居住禁止、住宅設置禁止、ホテル、公園立入禁止、帰化権も無く、引いては日本人にのみ対する営業禁止、積極的圧迫の度は加へられ来たった事は、我々日本人勢力の拡大化は強圧的なる手段の何物でもなかったのである。其れは何故であるか、言ふ迄もなく日本民族の優秀性の恐怖依り発する、政治的野望なのである。彼等の最も恐るべきは、日本人と共に独乙人である。我々は肝かく事実を体験的に見感ずる事が出来たので［二十六葉］【p.41】ある。天照大神の天孫降臨の開闢以来二千数六百年の今日に至る迄、八紘為宇の偉大なる大理想は、上は万世一系の天皇を戴き下はく大和民族の詔承必謹の神霊のまに〳〵精神は神霊のまに〳〵君の為生きて来たのである。大御稜威こそ皇化の中心であり、天皇を以って宗家となす一大家族精神こそ我が国万代世不変の生活単位であり、天皇こそ大稜

活を送る事は許されなかったのである。［十九葉（翻刻者注）後補？］【p.28a】特にこの事は、余の自動車旅行を通じて感じられたのであった。暑中休暇は毎年六月初旬依り九月上旬に亘る三ヶ月に余り、余等は殆んど其の大部分を家事の手伝に費すのであったが、学校始業前七週間の間、自動車を自らドライブし、名所、博覧会等見学するのが常であった。ヨセミテ公園に、サンフランシスコ万国博覧会に、サクラメントに、或は南下し、サンデーゴに、メキシコ国境に、ブロレー方面に、全々日本未地なる土地に行き見学する事に於いて、我々日本人の社会的地位を【p.28av】体験する事を得たのである。コロラド狭谷依りデースバレー（死の谷）にかけて、炎熱燃ゆるが如き沙漠地帯に足する時、アメリカの雄大性を痛感すると共に、地域的国民性の相異を又痛感し得るのである。大陸的旅行の中にアメリカ文明は生れたに反し、島国的山岳地帯に我々の祖先は生長し、周囲此の状況に依り支那配された事は、民族性の相異を来す事はいなめぬ事実なのである。この中部の山脈地帯に於いては、余等日本人の存在は未だ珍らしきものであったのである。

［（翻刻者注）十八葉末尾に戻る］

第四章　在米に於ける学園生活

余の学生生活は、平凡の中にも現実に於ける日常生活に就いては、普通の人に於いては見逃［二十葉］【p.29】し得た問題も、余自身にとっては見逃し得なかったのである。あらゆる省細（ママ）の問題にわたって、一々検当（ママ）する事は忘れなかったのである。特に我々自身の受ける外部的依り加へられる人種的、民族的、外交上に亘る個々の状勢に亘って、内面的に自己自身の強力なる力を養ふと共に、将来に対する確信を次第に強化されて行ったのである。学校に於いて、日本人の子弟が常に最優秀の成績を獲得しつゝ、卒業後に於いては何等役立ち得なかった事も、就有力なる官公庁【p.30】は勿論、一小会社にさへ彼等の進路としての就職さへ出来得なかった事も、昨日迄も各大学に於いて最一番、二番を決して白色人種に譲る事なく、日本人の頭脳の優秀性をほこって居た幾多の第二世は、今日は農園に、果樹園に、売店に、従来の学歴、頭脳を何等活用する事を許されず、いたづらに社会的に葬られ行くも、米人社会に於いては何等不可思議な問題とはされず、寧ろ当然なるものとされて居ったのである。茲に於いて余等に残されたる道は唯一つ、彼等と真に闘ふ以外にはなかったの［二十一葉］【p.31】である。日本人の優秀性は、明治維新以来急速に対外的に認められつゝも、現在に至る七十余年後此迄の今日に於いて尚海外出稼人、移民人として其の存続を認められなった（ママ）事は止むを得ぬ事とするも、我が国に於ける外務省当局の確固たる外交政策なき為、又確固たる殖民政策なき為、如何に在海同胞（ママ）が苦難を味ひ、或は座折し、或は異郷に淋しく死して行きし事か、移民哀話の中に見られるのである。然し、余等はかゝる異郷に非業なる最後を遂げられた先輩の意志を継【p.32】承し我々の進路を打行く事は、我々の使命と云ふ依りは寧ろ義務であり、飽く迄も勇往邁進せねばならぬ事を固く誓ったのであった。アメリカは世界依り移住し来たった各民族に依って形成せられた一国家である。真なるアメリカ人とは、魂原住民インデアン人種以外にはないのである。然しインデアンは、其の民族性、文化程度、教育程度に於いて、其の指導性を持続し行く事が出来なかった事は、万止むを得な（ママ）事と思はれるのである。然らは中人一六〇九年メーフラワー号の清教徒以後、一七七九年アメリカ独立戦争に［二十二葉］【p.33】至る間、中色人種の移民アメリカ移住者は白色人種を以って第一となす事は我々の知る所であるが、其の建国の由以は、飽く迄も自由、平等、博愛に基き、共和制を布きし事は今日尚不変の国家理念であると云ふ事は信んずべき事である。西紀一九二四排日本人移入禁止令を呈出されて以来、日本人に対する圧迫、迫害は何処依り凸発生せるものであるか、人道主義、正義を称へる彼等の国家理念依り、何故人種的偏見、異民族圧迫、黒色人に対する暴圧が生じ、然して之れを正当化し、社会問題、国家

一一

まざるを得ざる関門と言はねばならなかった。其れは此の章に於けるいて言ふ所の、我々は決して善良なるアメリカ市民としては好偶されなかったが【p.22】故である。自分の決心は定まったのである。余自身の人種的優劣性に対する闘は始まったのである。純粋なるアメリカ人とは果して何処種何種に属するや否や、何処依り流れ来たったものであるか、アメリカ土着の現住民はアメリカ、インデアン人種以外にはないのである。然し、彼等は果してアメリカ人と見做されるや否や、端単に先着順を以って規定するならば、其れはアメリカ国法に反するものにあらざるや、様々の凝問が余の脳裡を往来するのであった。然し、それも次第に余の滞［十六葉］【p.23】米四年半の生活の中には解けて居ったのである。アメリカ建国の精神、自由、平等、博愛の理念は、現在の単なる建国当時のモットーであり、現実には決して存せざる事であった。単なる国家観念、アメリカを代表するカムフラヂたるに過ぎなかったのである。此の結論依り見て、余の其の後の生活は、民族的統一、日本人の一致団結、日本精神の継承流布以外の無にものでもなかったのである。昭和十然し乍ら、無力なる余には未だ何も出来なかった。英語を解する力のなかった事は、余に【p.24】とって最も大きな打撃であった。然し余は屈しなかった。連手を求めて白人の家庭に入り語学、アメリカ人の慣習を習得する為、学僕となったのである。在米同胞の入米の最初期に於いては一度は経験せる所であるが、決して容易なるものではなかった。［欄外：余の最初に入った白人の家庭は、偶然とも云ふべきか、余の生れた家から一町も離れぬ所であった事は、余自身も後に母に聞く迄は知らなかったのである。運命のいたづらとも云ふべきか。かくして余は懐かしい土地に三月の間日を送る事が出来たのである。］米食を常食とする我々にとっては、パンの生活は満足は出来難いものである。苦しい幾日かの月日と共に、漸く語学の片ことを話せる様になり、土地に於けるセッキンジョンマーシャルハイスクール（高校）に通学する事は余にと［十七葉］【p.25】つて幸福なるものであった。然しこの生活も余には長くは続かなかった。三月の後には自宅に帰り、家業たる花園業に従事すると共に、インタプライス、ハイスクール（高校）十年生に転校し、半年誕後の二五九七年（昭和十二年）の春の秋九月に、カンプトン、ハイスクール十一年に進級、翌年六月同校を卒業、進んでカンプトン、ジュニアカレーヂ（初等大学）十三年に進入学する事を得たるも、不屈不撓の精神の発露と確信して居るのである。現実は決して安易なるものにはあらず、撓まざる努力こそ真に幸福た【p.26】る事を信じて居るのである。当時の大学時代余は水泳部選手として入部して居り、南加州に於いては唯一人の日本人代表選手として活躍して居た事は、最白人壮余の学友に接するには最も恵まれ、且多く知る事に於いてはを得たのである。初等大学生活は二年間にして終り、二五六〇〇年（昭和十五年）六月無事学業を終了致し、同年卒業する事が出来たのである。当時余は、日曜以外殆ど休養の暇なく、連日連夜学業に、運動に、労働に其の一日〳〵を過して居たのである。大体午後二時講議が終り、二時依り水泳練習、他校試［十八葉］【p.27】合、午後四時乃至五時帰宅、其れ依り家事の手伝として農園に午後八時依り就床する迄復習、予習に、為に余の身体は年と共に錬鍛へられ、日本人としては最優秀なる体躯をつくる事がを得たのである。身体は既に五尺百七十三糎（五尺七寸）体重は七五瓩（二十一貫）を越え、如何なる肉体労働にも苦痛を感じなくなって居ったのである。両親共兄弟、叔父叔母共に壮健であり、長兄当時既に結婚せる長兄、次兄の両夫妻、昭和十五年早稲田大学法学部を卒業し、九月渡米せる三男、弟二人を合せ、且つ又長男は既【p.28】に一子あり、叔父、叔母（農園の共同経営者）並に従弟妹を合せてその家族は十五名の大家族にして、余の生活は健康に、学問に、家庭的に経済的に恵まれ、幸福なる日は流れて行ったのである。然し乍ら、我々自身の移民生活の内面的なる満欲足感、幸福も急激に社会状勢、政治的に経済的に動揺し行く外部的諸問題に吸引せられ、平和な安穏な生

一〇

境に依って支配される事は一応理のある事である。アリストテレスの云ふ『人間は政治的動物である』と言ふ事自身、人間は決して個人に於いては生存出来難い事を証明して居るのである。多数人の間に於ける生々発展の過程こそ、生存の有価値的なるものであり、社会的動物として研賛し行く意義がある事と思はれる。然し当時の余は余りに順境たりし為、当時に於ける自由主義、資本主義、金権主義、デモクラ［十二葉］【p.15】ティクなる議会主義に対する学校教育其の侭なる生活に随順し行くに過ぎなかったのである。只、上級程度になるに従ひ、現在も同校に歴史科の教弁をとる二本松出身の済藤喬教先生の『日本精神史講和』に対して強く引きつけられて居った事は、今も尚記憶に新たなるものである。

欧米流の中等学校の教育法に対し、純粋なる日本精神を鼓舞する同先生の言葉に次第に体内に流れつゝあった。日本人の血潮が奔流し始め、多感なる少年依り青年期に入る余をして、次【p.16】第に総ゆる社会現象に対する認識の度を深めて行った事は、余にとって生涯忘れぬる事の出来ぬものである。単なる文科、理科全般に亘る知識を流布し、欧米文化に湯心酔し行く当時に於いて、日本精神に還れと絶叫する憂国の言葉は悲壮なるものであったのである。自分自ら予期せざる中に精神的に欧米化し、日本の伝統も次第に失はれつゝあった事は、当時のデモクラシ思想万能時代に於いては止むを得ぬと云ふも、為政者の責任並に無自覚なる欧米文化尊崇［十三葉］【p.17】拝者のしからしむる者であると云ふも過言ではないのである。

然し、自分余は又中学卒業と同時に、早稲田大学政治経済科志望の意志を一時捨て放棄し、昭和十一年三月卒業を見るや、やうやく青年期に入りし十八歳の春四月、秩父丸の船客となり、両親の下に帰らざる事を得なくなったのも、余自身生れ乍らにして背負ふ神の摂理であらうと思ふのである。この、祖国日本を離れて、生を受けた土地に帰り行くも、一つの運命と言ふべく、其処に余自【p.18】身にとって、政治的、民族、人種、殖民等々の問題に対し、周囲の事情、環境の中に、自己の生命的反発を感んじて行ったのも当然の事であり、自分自ら日本人第二世の行くべき進路を開拓せずすべく運命づけられ、十八才の青年と生長し来たった。

余の上陸第一歩は、既に重大なる使命を余に任じ、人種的偏見、民族問題、日本人圧迫、排斥の声盛んなる地に帰ったのも、当然の事であると信んずるのである。然らば最も重大なる問題として、未解決の侭にアメリカ移民史八十年［十四葉］【p.19】を通じて解決されざるは、第二世問題に外ならないのである。茲に余自身の小見を余自身の体験依り見る事こそ、最も正しき事であると信んずるのである。『我々自身は最も好き日本人たると共に、最も善良なるアメリカ市民たる事を要請されて来たったのである。』然らば、最も好き日本人、最も善良なるアメリカ市民とは何か、この問題に対して余自身の体験を語らねばならないのである。次の章に之を述べて見たいと思ふのである。

【p.20】第三章　上陸後に於ける所感

アメリカ合衆国に於ける第二世の数は約十五万、南北アメリカを合すれば約三十万になん〳〵とするのである。余の上陸せるは、昭和十一年四月二十九五日であった。上陸に際し、書類不備アメリカに於ける出征生の事実証拠不十分の為、一週間ゆ移民局に抑留され、我が国に於ける天長節の佳節の日、移民局内に収容され居るも国情の相異とは言ひ、聊か憤概せざるを得なかった。

移民局の収容所には世界各国の人種が居り、余等に［十五葉］【p.21】日本人とっては全く予想外の所であった。獰猛なれ、無知なる白系外人の連、世界の果依り果に迄流れ歩き漸く自己の安定場所を得た様な浮浪人の連、黄色あり、黒色あり、余にとっては余り気持ちの良いものではなかったのである。然し、余自身も又其処の一週間の間一員たらざるを得なかったのも決して偶然なるものではなかった。一度は踏

なく、又善良なる農父を父として又余自身の境偶について、父依り教へられる事もなく、漠然として一移民の子として、山野原を跋渉し、夕暮、小暗きランプの下に帰り、異郷に淋しく一家団欒の中に食卓を囲み、一日の来し方を話し相会ひ床に就くのであった。其して年中行事として、内地と同じ様に日の丸の御旗の下に集ひ、好き日を祝ふ事、其れが移民生活にとって唯一の楽しみであった事を記憶して居るのである。

然し余自身は八歳の春迄、自然に人種的偏見は幼な【p.8】心に感じつゝも考へる力なき為か、大きな問題としては両親に訴へる様な事もなく生長して来たのである。

八才の春（二五八六年）四月、パナマ丸にて余の兄三人、弟二人を伴なひ両親が故国に帰って来た事は、余にとっては人生問題に対する解決の道を与へて呉れたものである事を何依りも感謝するのである。迷へる問題にも一つの移民生活に於ける最大の問題悩みは、子弟祖国を離れて生れたる子弟の教育の問題なのである。真の祖国の姿を教へる事にあるので［九葉］【p.9】ある。然し余の兄弟は帰国に依って、始めて日本の姿にふれる事が出来たのであった。余自身の決心、目標は漠然と乍らも決まって居た事は、今当時の日記をヒモとく事に依って見られるのである。始めて見る故山の姿、余には何もかも珍らしい事のみであった。始めての体験のみであった。体験のみに依って、人生問題は解決される。其れは、理性其のものが伴ふ事は勿論であるが、実践なきところには正しき価値判断は出来難いのである。理論と実践の統一性、そこに真【p.10】の人生の意義がある事と思ふのである。

昭和大正十四年（五）五月二十七日、海軍記念日祝の当日、福島県の寒村木幡小学校二年に偏入、幼少年時代の余は腕白なる事は有名にて であった。朝家を出で夕刻遅く帰宅し昭和四年六月、当時小学校五年（現在の国民学校）生たりし余は、其処を離れて、六里ばかり離れた本宮町の叔父の家に偶居になるに忙介住む事となり、本宮尋常高等小学校に転校し、昭和六年十三才の春三月、無事六年の課程を終へ、同県郡山市にある安積中学校に入学し、茲に五ヶ年間の中学校生活が始まったのである。

［十葉］【p.11】

第二章　本宮に於ける少年時代の考察

安達太良山の秀嶺を背に、阿武隈川の清流を前に、七年間に亘る少年依り青年期に入る中学生時代の考察は余にとっては政治的には何等の意義を有せず、単調なる平凡なる生活であったと言へる。勉強もせず、環境に恵まれ、叔父の家に寄宿しつゝ五年間の汽車通学の回顧は想ひ出の一言につきると思ふのである。故山の夢多かりし少年時代の生活、温泉に恵まれたる山岳地帯は登山に、ハイキングに、将又幾日かの【p.12】海水浴に大平洋岸への渡徒歩旅行、昭和六年の満州事変、昭和七年の上海事変、夢多き少年にとっては真に理解する力もなく、恩師の言葉の侭に遺骨の奉仰に駅頭に参列する日が多かったのである。資本家と労働階級の対立、所謂るブロジアとプロレタリヤ問題の深刻なる当時に於いて、十三、四歳なりし余は、只社会の表面に動きつゝある問題にのみ関心を有して居たが、凝問を説くべきに対し真険なる解決を求めるには、余りにも無力であったのである。然し乍ら政治、社会［十一葉］【p.13】問題に対する興味憧憬の眼は深く、文学少年として、感傷的なる正義の感観念に悲憤慷慨し、深更迄考へる事は余の性格として有して居た事は事実である。

当時、両親はアメリカに於いて花園業に従事し、余等の為に学資の送金は相当多額であった事は、余自身の中学生活を反り見て何等経済的に困難を感ぜざる点依り考へ見て、苦労はなかったのである。かゝる生活に順調に余の半生があったとしたならば、余自身の現在は又異な【p.14】って居ったのであらう事を予想されるのである。人間は環

八

の精神に燃え、銃をとりて祖国の機急に、大君の為戦ひ居る事を通信機関の絶えし今、会ふ日、語る日、再び来あるとは計り知れざるも、余の戦死後僅かに肉親の者の手に入らば幸と思ひ、書き記して居くものきたいと思く次第であります。

東京柏木の宿にて

二六〇三年九月二十三日記

[五葉]【p.1】

最後の手記

第一章　宿命

余が、所謂る『第二世』として生を育けたる事は、一つの宿命と見なければならないと思ふ。ヒットラーの『吾が闘争』に依る、神の攝理の言葉が妥当するものと考へらえるのである。日本人を両親に持ち、生を宿敵米国に育けた事に依って、深刻なる国家観、民族問題、人種問題、将又教育に依る思想的問題に、生れ乍らにして無知なる幼児の中依り自然に支配を受け、身の生長と共に、次第に関心を持たざるを得なくなった事は当然の理と【p.2】思ふのである。特に、世界に於ける優秀民族として、八紘為宇の為崇高なる大理想に生きる大和民族として、人種の展覧会場とも云ふべきアメリカ合衆国に生れた事は、其性として指導者と余に取っては生れ乍らにして闘争の性格を自然に供はやすへられ来たった事は当然事実である。

茲に最初に余は、ヒットラーの『マイン、カンプ』を真似る物ではないが、血の純潔性が優生学上依り見て如何に尊きものであるかを、身を以って体験し来る事が出来たのである。

[六葉]【p.3】皇紀二五七九年（西歴一九一九年）三月二十日（アメリカの出生証明書には三月十九日とある。何故、日本の戸籍謄本が二十日になって居るかは不明である。）北米加州ロスアンゼルス市衛北コンモンウイルス街（現在のハリウッド市）に余は生れたのであった。

両親余の父は海外発展の盛んなる明治三十年前後、当時の移民奨励の波に乗じて、福島の故山を後に、当時理解されざる移民苦闘の歴史を現実に幾度か味はいつゝ、明治三十一年ハワイに渡【p.4】航し、労働生活に身を投じ、且又砂糖会社に就働、ハワイ滞在五年後、明治三十六年アメリカ合衆国に期機に乗じて渡り、様々の苦闘の後、北カリフオルニヤ、サクラメント市依り転じて南下し、ロスアンゼルス市の魚屋に就職し、大正二年同県木幡村依り母を迎へ、ハリウッド市に花園業を経営、こゝに移民生活に於ける第一歩の段階たる家庭をなす事を得たのである。茲に第二世として孤々の声を上げ、日本同国戸籍法に依りアメリカ市民（日本人系）として、所謂『第二世』問題として新に我が［七葉］【p.5】国外交史上に、海外発展の新形式として種々の政治的、文化的、思想的に新現象を呈し来たったのである。第二世自身は純粋たる日本人の血の所有者たる事には変りはなく、只出生地域の異郷たるが故に、苦闘の歴史は生れ乍らにして負ふて来た事は必然であるのである。

一花園業を経営する両親の下に、白色、黄色、黒色、其の他分ければ総ゆる人種を包含するアメリカの中に、日本人祖国を持つ民族こそ永遠の指導者民族たる事を確信し、アメリカ建国の歴史の【p.6】中に高邁なる世界永遠の平和、民族相互間に於ける『和』の精神、『信』の精神を以って生々発展し行くは我が大日本帝国民族臣民たる事を確信し得るのである。

生後二年にして同市外カヨテパスに移住し、従義弟妹本田氏と共同経営にて花園業を継引続き経営、余も又土地に於ける日本人に依って造れたる日本語学園、並にアメリカの公立学校に午前、午後相互に学び、好き日本人たる事と共に、好きアメリカ市民たる事を要請されて居たので［八葉］【p.7】ある。余は当時に於いては思想的批判の力も

七

為に」と相対化して見据えることの出来る「二世」の眼差しがあったことを、我々は見逃してはならないであろう。

四、本文（10）

［一葉］【p.1】

最後の手記

菅野武雄

【p.2】一九四三年

昭和十八年九月二十三日

学生徴集猶予の恩典廃止

法文経科の大学高専の授業

停止の日之を記す

［二葉］

明治天皇御製

剣

しきしまの大和心をみがかずば

剣おぶともがひなからまし

あらはさむときはきにけり

益良夫がとぎし剣の清き光を

親

ひとりたつ身になりぬともおほしたてし

親の恵をわすれざらなむ

卒業生

ものまなぶ窓をはなれていまよりは

国のつとめにたゝむとすらむ

今はとて学のみちにおこたるな

ゆるしの文をえたるわらはべ

心

しきしまの大和心のをゝしさは

ことある時ぞあらはれにける

男

弓矢とる国にうまれしますらをの

名をあらはさむ時はこの時

［三葉・早稲田大学原稿用紙］

勇

ちよろづの仇にむかひてたわまぬぞ

大和をのこの心なりける

［四葉］【p.1】

決意　十八・九・二十三

我も又男子と生れし果ぞある

君に召されて行く事を得ば

此の秋ゆ弓矢とり持ち醜輩を

打ちて砕けむまけのまに〳〵

序

今日昭和十八年九月二十三日早朝、学生徴兵猶予の恩典が廃止され、愈々国内戦時体制強化の為、我々学生一人残らずペンを捨て決然起つて国難に趣（ママ）くべく、茲に余の二十五有余年の半【p.2】生、思ふが侭に書き留め居きたき所以のものは、現在宿敵北米合衆国に抑留されつゝ、悲憤の涙の中に祖国神州日本の勝利を祈願確信しつゝ呻吟して居る

我が在留同胞の為、又両親、兄弟、姉妹の為、異郷に生れ乍らも尽忠

六

らの考えを伝えるべく演説の訓練を重ね、それを試み実現していった点であり、しかも、そういった彼の努力は「一青年の叫びは、大海に一石を投じた如く、如何ん共仕難く」現実にはほとんど報われることがなく、同時に学生と家族労働者としての自己の位置づけや、自動車旅行を通じて体験したアメリカにおける日系人の社会的地位、人種差別などから、自身の将来の可能性にも煩悩せざるを得ないという厳しい位置に置かれていたということである。また、彼は白人のもつ人種的偏見を最終的には「正面の敵は猶太以外の何者でもなかった」とユダヤの国際的な陰謀として合理化を図るが、現実生活の上での不安、煩悶は、アメリカ市民権による徴兵検査での「甲種合格」という事実の前に決定的な局面を迎え、その状況からの逃走という背景をも併せ持った日本への再渡航であり、それがその後の彼の思想運動や改造運動への参加へとつながってゆく道を開いたということである。

少々、結論の先取りにもなるが、昭和十九年一月、召集令状を受けた菅野の所感をここで紹介してみよう。

「二世として運命づけられた我が上に、今始めて真の帝国軍人として栄誉は輝かんとして居る。事実は総べてを客証づける。二世として、意志の侭に当然祖国を決定し得べき様運命づけられた我々に、真に茲に意志の決定を運命づけられ、然して又、法的に日本人として「アメリカ：翻刻者補注」国籍を離脱し、今茲に真に日本人として銃をとり、かつては同胞として、学友として机を並べし輩に対し、真の決戦をいどまんとして征く。自己の意志如何に依り国際人と成り得る我々に、最後の決定の術は斯くして選ばれたのである。闘あるのみである。正義と人道、忠君愛国の至誠、尽忠報国の誠、其れは日本人としてのみ与へられた道である。死か生か。倒るゝも尚、七度生きて皇恩に報ゆる尽忠報国の道一貫あるのみなり。かつての学友、かつての親友、かつて共に競泳に覇を争ひし人々は、今は銃をとりて雌雄を決せん。共に祖国の為、人道と正義の為に・・・」(9)

菅野は、アメリカの徴兵検査での「甲種合格」から逃れ、二度目の日本行きを「決意」した時には、小中学校時代を送った日本への想い出と憧憬を持ちつつも、自分たち二世を、「意志の侭に当然祖国を決定し得べき様運命づけられ」、「自己の意志如何に依り国際人と成り得る」ものと考えており、日本における学生生活を通じて思想改造運動などに没頭してゆく中で、自らの意思で主体的・積極的に「日本人」になっていったと受けとめ、帝国軍人としての出征によって、「真に日本人」になるべく「意志の決定を運命づけられ」たと自己解釈していたと考えることが出来るであろう。

日本での生活を重ねる中で、次第に当時の狭隘な軍国主義思想に飲み込まれていったかのように見える日系二世菅野武雄には、彼が日本人として戦に赴くことと、アメリカの学友がアメリカ人として戦に赴くことを、「共に祖国の為、人道と正義の

「最後の手記」本文一〜二頁

五

家庭的な環境の中で穏やかに過ごしていたようである。また、福島における小学校・中学校時代の生活についても、彼に将来についての「決心や目標」を形成させることになったとしながらも、アメリカの両親からの送金によってほとんど何の苦労もなく過ごし、「政治的には何らの意義を有せず、単調なる平凡なる生活であったと言へる。勉強もせず、環境に恵まれ、叔父の家に寄宿しつゝ、五年間の汽車通学の回顧は、想ひ出の一言につきると思ふ」と総括されており、その記述も簡潔で抽象的である。唯一、歴史の教師からの影響については、「欧米流の中等学校の教育法に対し、純粋なる日本精神を鼓舞する同先生の言葉に次第に体内に流れつゝあった。日本人の血潮が奔走し始め、多感なる少年依り青年期に入る余として、次第に総ゆる社会現象に対する認識の度を深めて言った事は、余にとって生涯忘れぬ事の出来ぬものである」と記し、本手記を執筆している時点で、いささか後付けながら、当時の生活について彼なりの分析、省察が加えられている。

また、菅野は、中学校入学のころから日々の行動と思いを綴ったかなり克明な「日記」を記しており、「日記」そのものは現在確認することはできないが、現存する彼自身が戦後間もなく自分の人生を振り返りつつそこから抜き書きしたと思われる「日記抄」を見る限りでは、福島での生活では、思春期を迎えた学生らしく、友人との交際、先輩からの「制裁」に対する強い憤り、バスケットボールの体外試合やマラソンといったスポーツへの参加、友人との旅行や遠足、女子学生との恋愛などなど様々な経験を通じて、本手記で菅野が強調しているような、後の思想運動につながる側面だけではない、若者らしい多様な生活体験を重ねていたことが確認できる。そこには、資本主義における階級対立や西洋対日本の思想問題への関心といった面よりはむしろ、人格形成期における人生に対する自然な煩悶や、希望、不安などが見て取れる。また、両親・兄弟が師範学校への進学を頻りに勧める中で、彼は商船学校への志望を持つ一方で、中学生活への不満・倦怠感などから早くからアメリカ行きの決心をしており、卒業が近づくと兄たちの影響から、早稲田大学への進学を志望しつつも、経済上の事情も加わり、中学卒業後すぐに「一年間の恋とも永久にお別れ」し、多くの友人と別れ、「希望に燃えて」アメリカへ戻っていったのである。本手記から、これらの事情について読み取ることは困難である。ちなみに、「日記抄」には、菅野が本手記で日本精神を鼓舞されたとされる歴史教師の名は一度も登場してはいない。

繰返しになるが、本手記は、学徒出陣という事実を前にした彼が、「日本人」として出征するという現実を背景にして記述されているもので、復員してからの記述を除けば、ある意味では家族に宛てた「遺書」、ないし「決意の書」とでもいうべき性格を持ったものである。従って、自分が「日本人」として出征するという現実を受け止める過程として、日本への再渡航から、彼の大学生活、就中、当時の学生運動、思想運動活動家としての、彼の生活と思索とが綴られ、それ以前の生活については、その流れを背景に再解釈されていると見てよいであろう。また、二度目の渡航以降の彼の生き方と、出征に当たっての「決意」を書き残すことが主たる目的であり、それに結びつく記述が量的にも質的にも中心をしめていることは当然のことと言えよう。

当時、日本の多くの青年が、後進資本主義国としての矛盾が噴出している状況下で、アプローチの違いはあれ、様々な社会の改造運動に没頭してゆく中、彼もまた早稲田大学在学中に国家、国民精神の改造運動へと傾倒して行く事になる。しかし、他の青年と異なっていたのは、今回紹介する、アメリカにおける青年時代の記録の中でも語られているように、彼は在米中は日系二世として日米の間に置かれた自己の位置を自分なりに認識し、その中で在米日系二世の役割、目的、使命を実現すべく、「善き日本人であると同時に善きアメリカ人」であろうと努め、積極的に渡米中の日本の著名人の講演から学び、学生と労働者という二重生活で肉体的にも精神的にも苦しい中で、懸命に自

四

る(6)。一九九二年五月、伊藤一男に送付する(7)直前まで、菅野は本手記に加筆、修正を加えている。彼の壮年から晩年にかけてのものと思われるそれら一連の加筆、修正もまた、戦後再び生まれ故郷のアメリカでの生活を重ねていった菅野の意識変化を考える上で極めて興味深いものであるが、本稿では、「最後の手記」が擱筆された昭和二十一年一月の時点でのテキストをそれまでの削除・修正の痕跡を含めできる限り再現することとし、後年の修正と思われるものについては、後日稿を改めて紹介、解説することとしたい。

二、二度目の日本渡航

菅野武雄の生涯については、シカゴ大学図書館の奥泉栄三郎氏が、菅野家に遺されたアルバム、「日記抄」、などの資料を網羅的に利用して、多角的に丹念に紹介されており(8)、詳細はそれらに譲ることとするが、以下、今回翻刻した部分に関する期間を中心に、「シカゴ新報」前社長でもある昭子未亡人のご厚意により筆者自身が撮影させていただいた「日記抄」「一九八二年八月十五日記　菅野フランク武雄経歴」「帰米二世の歩み」などの原本に依拠しつつ、簡単にまとめておくことにする。

菅野武雄は一九一九（大正八）年三月十九日、福島出身の菅野末、トラノを両親として、カリフォルニア州ハリウッド（ロスアンゼルス郡北コモンウエルス街）に生まれ、三才の時に、ロスアンゼルス郊外のカヨテパスに移り住む。一九二四（大正一三）年には、公立学校である西羅府ブロックレン小学校に入学すると同時に、日本人経営になるカヨテパス小学校へも入学し、日米両国の教育を午前と午後とに分けて受けている。

一九二六（大正一五）年四月、七歳になったばかりの彼は、兄弟全員とともに日本で教育を受けるため両親に連れられパナマ丸で日本へ渡航し、父末の故郷である福島県安達郡木幡村での生活を始め、同地の木幡小学校二年に編入している。一九二九（昭和四）年四月には、木幡村から本宮町の叔父の家に移り、本宮小学校に転校。一九三一（昭和六）年に本宮小学校を卒業すると、郡山市の安積中学校に入学し、その後も叔父の家から郡山まで汽車通学をしていた。そして、一九三六（昭和十一）年三月、安積中学校卒業と同時に、四月九日、日本郵船秩父丸で両親の待つカヨテパスに戻り、家業の花園業の手伝いをしながら、同年九月カンプトン・ジュニア・カレージに入学、当初はほとんど英語の授業についてゆけず苦労するが、次第に学生生活にも慣れ、水泳部の選手として活躍するなどして、一九四〇（昭和十五）年六月には、カンプトン・ジュニア・カレージを卒業。同年、アメリカの徴兵検査を受け「甲種合格」になったことを一つの切っ掛けとして、以前からの宿願であった早稲田大学入学をめざし「手続きを偽造し」、十一月大阪商船ブエノスアイレス丸で単身日本へと渡航することになった。四年ぶり、二度目の日本渡航であったが、二度目の日本滞在は、それから二〇年にも及ぶものとなったのである。

三、「最後の手記」を読む

今回紹介する部分では、菅野武雄がアメリカに生まれ幼年時代を過ごした後日本に渡り、小学・中学時代を経てアメリカの両親のもとに戻り、学生と労働者という二重生活を通じて、排日の動きや人種差別の現実に直面して、日系二世としての活動の限界を感じ、かねてからの志望でもあった早稲田大学へ進学するため再び日本へ向かうことになった経緯までが記されており、本手記の中では過去の出来事の回想として記録されている部分である。

北米での幼年時代については、既に彼自身の記憶も確かではなかったようで記述もごく僅かで、「幼な心にも人種的偏見を感じつつ」も、

第九章　療養生活七ヶ月
第一節　武蔵野療園生活・・・・・・・・・・・・一二六　〃
第二節　『思想戦戦闘綱要』・・・・・・・・・・一四一　〃
第三節　本宮に於ける静養生活四か月・・・・・一五七　〃
第一項　大東亜戦争勃発・・・・・・・・・・一五七　〃
第四節　正大寮寮生活・・・・・・・・・・・・一六九　〃
第一項　敵国在留の両親、兄弟、同邦を偲びて・一九二　〃
第二項　徴兵検査・・・・・・・・・・・・・一九五　〃
第三項　日本学生協会解散・・・・・・・・・一九九　〃
第四項　分科会（政治、経済、文化）・・・・二〇五　〃
第五項　早大に於ける学生運動・・・・・・・二一〇　〃
第十章　比叡山西教寺全国合同同志合宿
第一項　第二行進曲・・・・・・・・・・・・二一六　〃
第二項　第二早高逗子合宿・・・・・・・・・二二五　〃
第三項　西教寺合宿・・・・・・・・・・・・二二八　〃
第四項　試験・・・・・・・・・・・・・・・二四八　〃
第五項　都下出発式・・・・・・・・・・・・二六一　〃
第六項　全国高専巡廻合宿・・・・・・・・・二六七　〃
第七項　早大精神科学研究会出発式・・・・・二七三　〃
第七項（八）　正大寮解散・・・・・・・・・・・・二七八　〃
第十一章　柏木時代
第一項　聖徳太子の信仰思想と日本文化創業・二八四　〃
第二項　同信協力・・・・・・・・・・・・・三〇七　〃
第三項　家庭生活・・・・・・・・・・・・・三一一　〃
第四項　国家生活・・・・・・・・・・・・・三二〇　〃
第五項　『国民評論』を駁す・・・・・・・・三三八　〃
第六項　猶太問題研究・・・・・・・・・・・三四九　〃
第七項　社会問題・・・・・・・・・・・・・三五四　〃
第八項　最後の学園生活・・・・・・・・・・三五七　〃
第九項　壮行会（18.10.29）・・・・・・・三六〇　〃
第十項　新年に当りて（19.1.10、19.3.15）・三六八　〃
第十二章　軍隊生活
第一項　初年兵時代・・・・・・・・・・・・三七五　〃
第二項　陸軍予備士官学校・・・・・・・・・三七九　〃
第三項　見習士官時代・・・・・・・・・・・三八〇　〃
第四項　終戦・・・・・・・・・・・・・・・三八四　〃
第五項　敗戦の原因と追究（20.11.28）・・・三八七　〃
第六項　平和なる詔書渙発・・・・・・・・・四〇六　〃
第六項（七）　将来への生活の設計（21.1.12）・・四〇六　〃

二

本手記の著者である菅野武雄は、一九六〇年にはアメリカ永住権を取得して、妻子を伴い親兄弟の生活していたシカゴに渡り、その後、家業の旅行業を引継ぎ成功を収めている（3）。一九八〇年一〇月には、オヘア空港近くへの支店開設など事業拡張を行うことになり、その為の資金調達に腐心する一方で、翌八一年八月一日からは、購読者層の減少により経営が行き詰まっていた『シカゴ新報』を引き受けた（4）他、シカゴ福島県人会の会長やシカゴ日系人協会の要職を歴任するなど、シカゴ日系社会の中心になって活躍してきた人物であった。また、シカゴ日系人協会が『シカゴ日系百年史』を企画し、伊藤一男にその執筆を委託した際には、同書編集委員長を勤め、伊藤の取材、執筆活動に献身的に協力している（5）。

時間が前後するが、菅野は、旅行会社社長であった兄の急逝により一九七〇年に新社長に就任しているが、翌七一年には、「帰米二世の歩み」という短文を、七七年一一月一日からは、「或る帰米二世の記録」を書き記し始めるなど、何度か手記や自伝をまとめようとしており、本手記もそれらの執筆作業に直接間接に利用されたものと思わ

〈史料翻刻〉

菅野武雄「最後の手記」（一）

—日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想—

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）

〈目　次〉

はじめに
一、「最後の手記」の構成
二、二度目の日本渡航
三、「最後の手記」を読む
四、本文

キーワード：日本人、日系二世、学徒出陣、日記

はじめに

本稿では、アメリカ生まれの日系二世菅野武雄が、早稲田大学在学中の昭和一八年九月二三日、学生徴兵猶予が廃止された日を以て書き始め、その後折に触れ書き継がれ、敗戦後の昭和二一年一月一二日に擱筆をみた「最後の手記」を翻刻・紹介する。「最後の手記」の原本は、JICA横浜海外移住資料館に寄贈された伊藤一男関係資料を整理する作業(1)の過程で発見されたもので、四百字詰め原稿用紙など二一五枚からなり(2)、今回はその約五分の一にあたる四〇枚分を翻刻する。

一、「最後の手記」の構成

菅野の本手記は、アメリカにおける出生から、二度の日本渡航、日本での大学生活、軍隊生活を経て、終戦を迎えるまでの経験と思索とを綴った長文のものであるが、既に触れたように、徴兵猶予が廃止され、戦場に出る日が近づいたことから、自らの死をも覚悟した上で、在米の両親、兄弟達へ遺す手記として書き始められ、終戦後、長野県信濃大町で当時の世相と自らの日本の将来に向けた思索とをまとめたところで筆が置かれている。おそらく、中学時代から書き留めていた「日記」を傍らに置き、それを参照しつつ綴られていったものと思われ、猶予廃止後については、ほぼ実質上、「日記」・「記録」としての性格をも併せ持ったものとなっている。

本手記には著者による目次は付されていないが、本文の章立てから、全体の構成は以下のようになっている。

明治天皇御製
決意（18.9.23）……一ページ
序……一 〃
第一章　宿命……一 〃
第二章　本宮に於ける少年時代の考察……一一 〃
第三章　上陸後に於ける所感……二〇 〃
第四章　在米に於ける学園生活……二八 〃
第五章　日支事変……四四 〃
第六章　帰朝の旅……五八 〃
第七章　早稲田大学入学……六三 〃
第八章　日本世界観
第一節　武州御嶽合宿……七一 〃
第二節　日本学生協会の思想運動……八三 〃
第三節　黒上正一郎大兄……九五 〃
第四節　全国合同合宿の意義と訓練……一〇五 〃
第五節　再会の歌……一一七 〃

執筆者一覧
Authors

島田法子（日本女子大学・教授）
Noriko Shimada（Japan Women's University）

松宮　朝（愛知県立大学・准教授）
Ashita Matsumiya（Aichi Prefectural University）

山口博史（名古屋大学国際交流協力推進本部）
Hiroshi Yamaguchi（International Exchange and Cooperation Headquarters, Nagoya University）

粂井輝子（白百合女子大学・教授）
Teruko Kumei（Shirayuri College）

岡野伸治，渡邉由紀子（海外移住資料館業務室）
Shinji Okano, Yukiko Watanabe（Japanese Overseas Migration Museum）

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）
Toshio Yanagida（Keio University）

JICA 横浜　海外移住資料館　研究紀要 6
平成 23 年度

発　　行：国際協力機構横浜国際センター
Japanese Overseas Migration Museum
海外移住資料館
発行年月：2012 年 3 月

問い合せ先
JICA 横浜　海外移住資料館
〒231−0001　神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 赤レンガ国際館
Tel 045-663-3257 ／ Fax 045-211-1781
Web:http://www.jomm.jp/　E-mail:info@jomm.jp

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum JICA Yokohama

Vol. 6

2011

Articles

Japanese Immigrants in Hilo, Hawaii:
Their Literary Activities at Gin-u Shisha Tanka Poetry Club — Noriko Shimada

Comparative Studies of Brazilian Workers:
Their Living Conditions and Future Perspectives — Ashita Matsumiya

The "Range" of Support for Japanese South Americans:
The Situation of Brazilians under Economic Recession — Hiroshi Yamaguchi

Review on Scholarly Materials

A Report on the Documents of Isso Shimoyama, an Issei Haiku Poet — Teruko Kumei

Introducing the Operational Documents and Other Materials Prepared by Working Agencies in Charge of Postwar Japanese Overseas Migration and Stored in the Japanese Overseas Migration Museum — Shinji Okano, Yukiko Watanabe

Research Document Reprints

"Last Notes" by Takeo Sugano (1) : The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan — Toshio Yanagida

JICA